

## 『銀鈴』収録短歌一覧

通し番号	雑誌・号数・頁	題目	作者	短歌	備考
1	銀鈴1-1	紫英	石橋夕波	朽つる期は斯かれと秋の野に笑みぬ燃えしがままたやくや紅蓼	
2	銀鈴1-1	紫英	柴田逝秋	朝雨にひとり野路行く子が秋のさびしき影や里の牧ぶえ	
3	銀鈴1-1	紫英	狩野梅南	かくて夜は更けぬ遠きに鐘鳴りぬ見返る夢に啼くほととぎす	
4	銀鈴1-1	紫英	山本静子	幸あれな栄もあらせと西の空星澄む夜毎君恋ひわぶる(人に)	
5	銀鈴1-1	紫英	福屋杜啼	遠鳴りて夕潮よせ来乗りいでよ魔の笛吹いて夏へ彼方へ	
6	銀鈴1-1	紫英	福屋杜啼	供奉しつる芸の夏宮あなかしことる鍵の手のあけまどはるる	
7	銀鈴1-2	紫英	岡碧水	ここの世にみ袖かさねむよしもなし恋のとこ幸天のみ国に	
8	銀鈴1-2	紫英	岡碧水	ここやいま暫し黙思の境なれハートの血潮しづかにめぐる	
9	銀鈴1-2	紫英	入澤涼月	花の香は堂に満ちぬる宵の春小琴にゆらぐわがおもひ哉	作者名「大屋無価珍」→「入澤涼月」に修正 (書入・第2号訂正文により)
10	銀鈴1-2	紫英	入澤涼月	露や葉に白玉なして香たかきうつるは神と笑む若子かな	
11	銀鈴1-2	紫英	河野三生	平和(やわらぎ)とのぞみの色をもたらしわが詩の領ぞかがやき帯びぬ	
12	銀鈴1-2	紫英	河野三生	歌はんに恋はんにかしこ我が身ぞと筆にもはぢしはつ秋や風	
13	銀鈴1-2	紫英	増野紫星：増野翹白か	岩がけに黒髪長う波よびてかほるもよしや天つ星姫	
14	銀鈴1-2	紫英	増野紫星：増野翹白か	花はいま神のおん手にうるほひて生ひぬ咲き出ぬ蓮暁や春	
15	銀鈴1-2	紫英	尼川紫瀾	沈みては落ちてはそこに輝きぬ珠や遠海我に似る珠	
16	銀鈴1-2	紫英	尼川紫瀾	おのづから若きおもひか白菖蒲いぶくにあかき血もこもるなり	
17	銀鈴1-2	紫英	佐々木春濤	をさなきを神に恨みのはたとせやつひにふさはぬ詩と知りし今	
18	銀鈴1-2	紫英	佐々木春濤	水やりて餌やりて低うささやけば鸚鵡汝また呼ぶよ世の恋	
19	銀鈴1-2	紫英	飯塚雲水	春川をきよき手馴の棹さして遣るに小舟のせばからぬ哉	
20	銀鈴1-2	紫英	飯塚雲水	白梅のかをるや窓に君待つと有るのまろうど鶯来る(詩人に)	
21	銀鈴1-2	紫英	立田紅翠	み柩はつひの運命(さだめ)にとざしたりおん座いまいま安くおはさむ	
22	銀鈴1-2	紫英	山本明星	幸うすうさびしう我は歌もなし闇の世せちに神待たれぬる	
23	銀鈴1-3	紫英	内田枯竹	たへがてにたどるかよわの子に重き罪の石たび去にませし神	
24	銀鈴1-3	紫英	前田紫紅	夕栄の雲紫に空を織るいま興来の百合のみ園や	
25	銀鈴1-3	紫英	前田紫紅	春の神よそほひなりて花や花夕野しづかに曳きませしみ裳	
26	銀鈴1-3	紫英	前田紫紅	海のごと八重潮巻きて七彩や美しき詩は恋は湧くらむ	
27	銀鈴1-3	紫英	前田紫紅	神の世か数の星屑ひとつひとつ恋とかがやく天のみ誇り	
28	銀鈴1-3	紫英	中村秋泉	奇し夢を若葉にしるぶ星月夜久遠のしらべ春潮と湧く	
29	銀鈴1-3	紫英	中村秋泉	紫とさては赤きと野の映をたびしみ歌にほこるわらんべ	
30	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	よき君のみ歌ささげて卯月夜を神へまぬるも身のほこりなり	
31	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	あるは彩羽あるは小百合の花をもて成りしよそほひ今歌に見よ	
32	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	天の王(きみ)のみ言かしこみ優姫(やさひめ)が詩人我に恋はたびたる	

33	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	百合園の夢の犠牲（にゑ）にとおん神がみ手になりたるわが生霊（いくだま）か	
34	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	あやまちて詩の冠をよそほひ罪としいはば君ゆるすべき	
35	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	疲れては王者とよぶに力なし詩歌またまた我遠ざかる	
36	銀鈴1-3	紫英	福田紫雲	思ひ出の楽舞が夢をうら問ひぬ十九は狂ふにふさわしき歳	
37	銀鈴1-3	紫英	蔵田信子：蔵田のぶ子・蔵田二葉	渴きては物に狂ふわが霊（たま）の何を夜ごとの胸の高鳴	
38	銀鈴1-3	紫英	蔵田信子：蔵田のぶ子・蔵田二葉	眠りてはおちてははかな微草（わかぐさ）のおごらむすべを春にまどひし	
39	銀鈴1-3	紫英	蔵田信子：蔵田のぶ子・蔵田二葉	往く春を淋しわが頬（ほ）にみ手かさむおなじ愁ひの姉もいまさば	
40	銀鈴1-3	紫英	蔵田信子：蔵田のぶ子・蔵田二葉	恋にます女神の春衣うすもののみ袖の彩と桜ばな咲く	
41	銀鈴1-4	紫英	河野翠瀲	野をめぐる夏神白きかつぎして泉よりこそ影はうごかむ	
42	銀鈴1-4	紫英	河野翠瀲	詩歌なり恋也、得つる身のひとつ砕けし星のいく世経しもの	
43	銀鈴1-4	紫英	河野翠瀲	姉よびて夏野まろぶに興もあり白百合枕いざやわ手たべ	
44	銀鈴1-4	紫英	河野翠瀲	八重潮の潮路分けゆく珠と珠青藻がくれに夢も追ひつつ	
45	銀鈴1-4	紫英	河野翠瀲	美しき瑠璃戸黄金の花ささげ供奉のみ姉が肩に寄りゆく	
46	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	おほらかに召されてまゐる果の身とあまきに慣れて人を怖れず	原文総ルビ
47	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	夕月夜なにを恨みむさまよひか御名かしこうて呼ぶに人もなき	原文総ルビ
48	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	うたはれて一人に終へん生（いのち）ぞといつはりてだに寄り来酔の日	原文総ルビ
49	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	み手とりて嬉しう負ひしつみの名や昨夜（よべ）きよかりし里もねがはじ	原文総ルビ
50	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	草刈れる姥よびとめて山かげの藤によく似一花の名問ひぬ（旅にしてよめる歌のうち）	原文総ルビ
51	銀鈴2-3	酔の日	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	抱かれて寝る夜の夢も候はめ母には遠き浪華江（なにはえ）の秋（人に）	原文総ルビ
52	銀鈴2-5	玉舟	大屋桂水：大屋左一	星月夜しらべは競へ秋の虫ひとり斯螽（ばつた）ぞ影のやせにし	
53	銀鈴2-5	玉舟	大屋桂水：大屋左一	星すむ夜紅にほふ花の下常世の幸を神に得し我	
54	銀鈴2-5	玉舟	大屋桂水：大屋左一	涼しさや夕日が波の華の霧清き玉舟美しき虹	
55	銀鈴2-5	玉舟	大屋桂水：大屋左一	うらぶれの子が琴の音は宵闇の月よぶ松の吹息（いぶぎ）にも似む	
56	銀鈴2-6	微響（新凉会詠草）	山下あき子（石見）	この思ひあらぬさまによそほひて笑みて門出の人おくる今朝	

57	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	山下あき子（石見）	秘めおきし理想（おもひ）のほのほ地に生ひて咲けるか菊の成りしよそほひ	
58	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	田邊馬笑（石見）	山男山にし入れば山幸と木の間くぐりて得し茸かな	
59	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	河野素陽（浜田）	せせらぎのちひさき音のひとつにも美し歌はこもりなむもの	
60	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	前田木風（伯耆）	朝月になにの怒りぞむれ獅子のくるひ出でつる緋牡丹の花	
61	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	前田木風（伯耆）	天に星地（つち）には花の霊あれど我が歌いかに神うごかさぬ	
62	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	ゆかり（石見）	さらばよと城が名よびてわが泣けばよわしと笑みて山はゆるがぬ（城山にわかるるとて）	
63	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	中村秋泉（神戸）	草花の火焰（ほのほ）と燃ゆる靄の野をかづきゆるうも漂ふ今か	
64	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	増野紫星（石見）：増野翹白か	春のうみにわかき舟人帆をあげぬおお浪風の路たひらなれ	
65	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	山本明星（出雲）	詩にたかきミューズの神の使なる君がみ袖に掩はれば足る（翠激の君に）	
66	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	河野翠激	雲しづか山幽にして鳥啼かず秋ささわたる風をこそ問へ	
67	銀鈴2-7	微響（新涼会詠草）	河野翠激	寝ころびて呼べば雲より木精（こだま）して山に相倚るわが懐か	
68	銀鈴3-1	太刀風	多田東岳	成し手に血汐はあつし太刀はとし敵の幾万今何すらむ	
69	銀鈴3-1	太刀風	多田東岳	太刀は折れぬ力はつきぬほほ笑みて天（そら）の光明（ひかり）に霊（たま）は融けゆく	
70	銀鈴3-1	太刀風	多田東岳	さばつるぎ刺せよ殺せよ同胞（はらから）の犠牲（にえ）にある身は笑みて終らむ	
71	銀鈴3-1	太刀風	多田東岳	おほけなき高き教も沢の子のさきはひなれば太刀は許さむ	原文「沢の子も」→「沢の子の」に修正（書入により）
72	銀鈴3-1	太刀風	多田東岳	まこと見よ旅順の空は寒からむ大和男の子の霊（たま）の太刀風	
73	銀鈴3-5	風見車	入澤涼月	舞ひ舞ふはさながら天の使者のごとわれに似たりや恋の蝶々	
74	銀鈴3-5	風見車	入澤涼月	花の香は堂に満ちぬる宵の春小琴にゆらぐわがおもひ哉	
75	銀鈴3-5	風見車	入澤涼月	わが才はちひさし神のみ手によりよき世と過ぎんねがひを持つ身の	
76	銀鈴3-5	やさ笑	福田紫雲	水垂るる花藻み髪にこころよき朝風たえず君をふくかな	
77	銀鈴3-5	やさ笑	福田紫雲	密の香ややわき光や春の戸にわれらつつしみ神の名とはむ	

78	銀鈴3-5	やさ笑	福田紫雲	朝あけや生駒葛城こむらさき黄金田越えて子がうたもきく（以下三首管面にあそびて）	
79	銀鈴3-5	やさ笑	福田紫雲	真清水は紅き葉のせて音たてず谷間たにまを徐かにめぐる	
80	銀鈴3-6	やさ笑	福田紫雲	山の奥にこだまいよいよ神さびてわれおごそかにうた誦しまゐる	
81	銀鈴3-7	まり歌	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	世もゆるぐ大きき力も憚かるに幽かによぶと嬉し秋の日	
82	銀鈴3-7	まり歌	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	うつつなう泣けばかよわし御名にして生きむ命とさむる期もあれ	
83	銀鈴3-7	まり歌	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	黍刈りし楊が下の御転寝（をんまろね）木枯としも夢はよるらし（戦地なる君に）	
84	銀鈴3-7	まり歌	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	まり歌を我にをかしと聞きませし人の二十（はたち）を京に相見ぬ	
85	銀鈴3-7	まり歌	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	何やらの名も負はせて白菊と我が住む門に秋はすぎぬる	
86	銀鈴3-8	光海	前田木風	瑞風のまろき頬吹く稚子抱き昨日に見たる君が妻ぶり	
87	銀鈴3-8	光海	前田木風	よき君のよき歌よき譜まゐるとて美ごと新星いざみ供せむ	
88	銀鈴3-8	光海	前田木風	夢にして君を恋ひにし知りたりし百八十神もこれは容さむ	
89	銀鈴3-8	光海	前田木風	額白くみたれ藻染の片袖を御髪五尺に何舞はむ君	
90	銀鈴3-8	光海	前田木風	我となくみ袖はらひて殿ぬけて京を出づれば秋の風知る	原文「ならひて」→「はらひて」に修正（書入により）
91	銀鈴3-11	袖	二葉：蔵田二葉	枕してみ袖に笑まん日は知らずかくれて呼ぶに美はしとのみ	
92	銀鈴3-11	袖	二葉：蔵田二葉	夕寒き風をいたみておん肩に袖まゐらする桔梗細道	
93	銀鈴3-11	袖	紫瀾：尼川紫瀾	七尺は神のたびにし丈とこそ小さきかひなまかくにおそれじ	
94	銀鈴3-11	香草	山本明星（出雲）	君が名とわが名きざみておほ天のかの黄金戸は今ゆ栄えなむ	
95	銀鈴3-11	香草	片山蘆水（石見）	ほこりがのまなざしやがてくだちなばめしひ雌鳥のさすらふがごと	
96	銀鈴3-11	香草	立田紅翠（松江）	ふと胸しにぬび入りける夢の香のわれにさびしきおもひはこばむ	
97	銀鈴3-11	香草	尼川紫瀾（石見）	そのひかり冷たき耳に天降りきて共鳴すべくめざめしや石（「銀鈴」に）	
98	銀鈴3-11	香草	尼川紫瀾（石見）	ゆるされて裁ちしや袖のこむらさきひれふる風は天の香に吹く	
99	銀鈴3-11	香草	近藤月村（石見）	たゆたひに三年秘めこし我がなげきよべの夢うら心もとなき	
100	銀鈴3-12	香草	近藤月村（石見）	またの期に語らば興はおほからめ一夜旅寝の夢のとどろき（紫瀾の君に）	原文「旅寝のとどろき」→「旅寝の夢のとどろき」に修正（書入により）
101	銀鈴3-12	香草	天涯の孤客（松江）→井川(恒藤)恭	花被ぎ野に金星をふしめ見て夢とも座せり春の花王（はなぎみ）	
102	銀鈴3-12	香草	天涯の孤客（松江）→井川(恒藤)恭	ひとつ野に春を生ひたる糸にしなり天へのともぞむらさきの蝶	

103	銀鈴3-12	香草	天涯の孤客（松江）→ 井川(恒藤)恭	かうやうの思ひは深く胸に秘め夕日に小笠かたむけて行け	
104	銀鈴3-12	香草	山下あき子（石見）	このおもひこの恋歌に美しうかの金星と世をかざりてむ	
105	銀鈴3-12	香草	河野素陽（石見）	ふりそでの六尺長き舞姫や京は水よき女よき所ぞ	
106	銀鈴3-12	香草	田邊馬笑（石見）	夢よびてこの世詩の国秋老いぬ我を我としいざ出でたたむ	
107	銀鈴3-12	香草	大屋桂水（石見）：大 屋左一	うらぶれの我にはゆるせ鈴ふりてふりて友よぶ秋の野の虫	
108	銀鈴3-12	香草	大屋桂水（石見）：大 屋左一	現それまぼろしきなり涙なり乳子笑む夢よ永久（とは）にさめざれ	
109	銀鈴3-12	香草	大屋桂水（石見）：大 屋左一	ゆるぎては玉とくだけて花とちる海がをしへの犠牲（にえ）や栄あり	
110	銀鈴3-12	香草	大屋桂水（石見）：大 屋左一	ひかりてはきえてはまたも闇に入る螢にも似む我が詩（うた）の霊	
111	銀鈴3-12	香草	河野翠瀲（石見）	いつの日にわれはこの里竹おほく竹の風さく室におかれし	
112	銀鈴3-12	香草	河野翠瀲（石見）	おのづからこの歌成りぬ譜もなりぬ知らずいづれにわが恋は成る	
113	銀鈴3-12	香草	三東如月（石見）	輝やかに華雲湧きぬおほ富士や神のみ子具し立つよこの君	
114	銀鈴3-12	香草	三東如月（石見）	美はしき郷に教へて詩の神のよざしのままに児等みちひかん	原文「よすし」→「よざし」に修正（書入により）
115	銀鈴3-12	香草	三東如月（石見）	銀鈴や音もほがらにかざしつ神に詣でのこの道まゐる	
116	銀鈴3-13	花環（新凉会 松江支部）	坂本笑風	君にまゐる白百合の香に歌かかむミレをまねびしこの絵筆もて	
117	銀鈴3-13	花環（新凉会 松江支部）	稲田紫園	山の端に片破月のかかるとき天地（あめつち）ゆれと木枯よふく	
118	銀鈴3-13	花環（新凉会 松江支部）	金本征帆	紫の朱の花環と君が身の燃ゆる血汐よ永久（とは）にさめざれ	
119	銀鈴3-13	花環（新凉会 松江支部）	西枯荻	花にして消えなばいとど幸ならめ露のほこりとわれを讃ぜむ	
120	銀鈴3-13	花環（新凉会 松江支部）	西枯荻	冷けき小さき蕞（かめ）をいだく身も雄姿なれば天日は見る	
121	銀鈴3-13	瑞樹（新凉会 浜田支部）	須田紫萍	みちびきのみ笛いみじう遠鳴りて神の玉戸に小羊のむれ	
122	銀鈴3-13	瑞樹（新凉会 浜田支部）	森岡蹄花	月の夜の君琴よぶか欄に立ち我は李白を高呼びてまし	
123	銀鈴3-13	瑞樹（新凉会 浜田支部）	河野素陽	とどむべき君歌なしや曾心の律は成らさり秋雨の宿	

124	銀鈴3-13	瑞樹（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	さゆらぎの瑞樹のもとにうまいしてエデンの夢に天をおもはむ	
125	銀鈴3-13	瑞樹（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	みとびらにふれし小指はしびれたりうたの子そぞろ幼なきを愧づ	
126	銀鈴3-13	瑞樹（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	芸の子の今さびしらの興を得て鑿もてまゐる天つ御柱	
127	銀鈴4-1	春の庭	多田東岳	ここに日を御夢はつひにさめまらずしむよ痛手にすさぶ木枯	原文総ルビ
128	銀鈴4-1	春の庭	多田東岳	それとなくのらすにも似て木枯のふきゆく末に耳をそばだてぬ	原文総ルビ
129	銀鈴4-1	春の庭	多田東岳	ここにしてとはのみ夢やいかならん七尾風よ雪は乗せくな（以上、み墓にて）	原文総ルビ
130	銀鈴4-1	春の庭	多田東岳	霊凝りてかくてなりにしこの扉小ひさわが歌指さきて染めむ（旅順落ちぬ）	原文総ルビ
131	銀鈴4-1	春の庭	多田東岳	平和（やはらぎ）の福音たかき筆の香や酔てはここに君がみ名よぶ（画家ベンス チャギンをしぬびて）	原文総ルビ
132	銀鈴4-1	春の庭	蔵田二葉：蔵田信子・ 蔵田のぶ子	新らしうはごくまるべき生得つと希望（のぞみ）にもえぬ小ひさ我がたま	原文総ルビ
133	銀鈴4-1	春の庭	蔵田二葉：蔵田信子・ 蔵田のぶ子	はらからが小肩ならべて行くといま燭美はいう天にさす道	原文総ルビ
134	銀鈴4-3	春の庭	蔵田二葉：蔵田信子・ 蔵田のぶ子	物みなに怖ぢぬ力を今たぶとさだかに泌みし天のおん声	原文総ルビ
135	銀鈴4-3	春の庭	蔵田二葉：蔵田信子・ 蔵田のぶ子	まちていま千とせに得てし春の国石うつかぜにゆるがしむべき	
136	銀鈴4-3	春の庭	入澤涼月	若うして歌に生あり命あり何のまよはしさて幸がある	原文総ルビ
137	銀鈴4-3	春の庭	入澤涼月	草の宿歌ある興の湧きぬるもさびし朝睡（あさい）の衾にたえぬ	原文総ルビ
138	銀鈴4-3	春の庭	入澤涼月	才もなくわが世罵る我ながら虫のなくごと小さき声する	原文総ルビ
139	銀鈴4-3	春の庭	福田紫雲	おほ旨のいと畏こさにためらへばあなたはふれの花かうなぢに	原文総ルビ
140	銀鈴4-3	春の庭	福田紫雲	君と我とふたりしあらむ世ならばと夜すがら泣きて成りにける歌	原文総ルビ
141	銀鈴4-3	春の庭	福田紫雲	春の夜の楽に酔ひてぞまろび寝ぬ夢よこのまま君にも覚むな	原文総ルビ
142	銀鈴4-3	春の庭	福田紫雲	潔うして高きは神に似しものが世を導びくに負ふ名尊とむ	原文総ルビ
143	銀鈴4-3	春の庭	河野翠激	桃さかば里おのづから輝きの紅ならぬ色おひぬべし	原文総ルビ
144	銀鈴4-3	春の庭	河野翠激	降る雨の小枝小枝に泌み入りて桜は春の精と咲き出ぬ	原文総ルビ
145	銀鈴4-3	春の庭	河野翠激	君ありて奇しやつねにも詩は成りぬそもそも春は何いろを帯ぶ	原文総ルビ
146	銀鈴4-3	春の庭	河野翠激	むらさきに靄は流れよ夕はえ野あこがれ姿わが魂も往け	原文総ルビ
147	銀鈴4-3	春の庭	河野翠激	はる風はよく花咲かす力あり君がみ魂もさそひ来よかし	原文総ルビ
148	銀鈴4-5	うきくさ	立田紅翠（松江）	清興の奇しみの力の鑿歌に神代ながらの扉（と）は開かれぬ	
149	銀鈴4-5	うきくさ	立田紅翠（松江）	相見ては何時うつくしの紅に笑むと楼の宵月み袖ひかへぬ	
150	銀鈴4-5	うきくさ	立田紅翠（松江）	山茶花の雨たそがるる救世経ややつれし人の心さそひ来	
151	銀鈴4-5	うきくさ	助村董月（浜田）	紅梅は君がたびける蕾なりかくて三日経て笑みぬ香みちぬ	

152	銀鈴4-5	うきくさ	助村董月（浜田）	このままにさびし潮にまかれ行かばそこに吾等がよき国あらむ（万年が鼻に立ちて）	
153	銀鈴4-5	うきくさ	片山蘆水（美濃）	我いでて君をめぐると成りし恋断ちなば空に虹とかからむ	
154	銀鈴4-5	うきくさ	片山蘆水（美濃）	夕月に白梅小路春寒のそぞろ心や人に添ひぬる	
155	銀鈴4-5	うきくさ	片山蘆水（美濃）	こは夢か愛の羽衣七彩の巻かれて往なむに袖たびける	
156	銀鈴4-6	うきくさ	森山翠楊（安濃）	みなし子が淋しうよれる暗黒（やみ）の戸にふと得し大父（ちち）の聖き御影	
157	銀鈴4-6	うきくさ	森山翠楊（安濃）	ゆくりなうめぐり合ひてははらからと聖旨（みむね）かしくむ幸も得にける	
158	銀鈴4-6	うきくさ	山本明星（大東）	宵々にくしき夢よぶかよわさの胸のわか草花に生ひ立て	
159	銀鈴4-6	うきくさ	山本明星（大東）	思ひ多しされど手とるによしもなき兄よ都にいく日生ひたる（梅南兄に）	
160	銀鈴4-6	うきくさ	立石洲洋（八束）	新月（にいつぎ）のひかりいかにと君よ見る恋はひとしほ胸いたましむ	
161	銀鈴4-6	うきくさ	前田木風（米子）	御手とりて二人語らば足るものを世に追ふかげの恋にやはあらぬ	
162	銀鈴4-6	うきくさ	前田木風（米子）	君知らず恋に生ひしは我も知らず芙蓉の色のいづれ惑ひし	
163	銀鈴4-6	うきくさ	中村秋泉（神戸）	よろこびは千とせ幸ある初春や里居の君をことほぎまつる	
164	銀鈴4-6	うきくさ	中村秋泉（神戸）	とことには運命はかなう生い立ちしこの子が幸は神のみ許へ	
165	銀鈴4-6	うきくさ	大屋桂水（邑智）：大屋左一	弱くとも小（いささ）玉扉（たまど）は美（うま）し扉は汝にこそ開け勇め小羊	
166	銀鈴4-6	うきくさ	大屋桂水（邑智）：大屋左一	燃え燃えて火柱となれ雲となれ凝りて天降りて冬野をかざれ	
167	銀鈴4-6	うきくさ	大屋桂水（邑智）：大屋左一	よし人は狂い男の子と言はばいへ世の春生まれ犠牲（にへ）と笑むべき	
168	銀鈴4-6	うきくさ	大屋桂水（邑智）：大屋左一	来し方の負ひし運命（さだめ）に血はかれぬ涙に笑ふ十九（つづ）の狂女（くるひめ）	
169	銀鈴4-6	うきくさ	大屋桂水（邑智）：大屋左一	萍（うきくさ）の草のしげみに身を避けて真珠や生まむ恋の玉貝	
170	銀鈴4-6	征矢（新凉会 浜田支部）	野田ゆきを	よろこびは今あふれけるみ教への高きに倚れと君宣りましぬ	
171	銀鈴4-6	征矢（新凉会 浜田支部）	須田紫萍	なにとなくさだめさびしき水仙に君をしぬびて成りぬこの歌（翼白の君の病床に）	
172	銀鈴4-7	征矢（新凉会 浜田支部）	伏谷敏子	薄づき夜緋桃はな咲く下蔭にわれ若うして人の歌誦す	
173	銀鈴4-7	征矢（新凉会 浜田支部）	森岡蹄花	夜は更けぬ月かたぶきぬおほ空や星のひとつに思ひかよへよ	
174	銀鈴4-7	征矢（新凉会 浜田支部）	助村董月	花といふ花ことごとく光おびて美しく朝のおごり示すよ	
175	銀鈴4-7	征矢（新凉会 浜田支部）	河野素陽	春風に二人してつく手毬唄君が十五もよき恋を成せ	

176	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	河野素陽	我が歌は雲と現じておほ空を馳せ行くがごと偉大（おほい）なれかし	
177	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	河野素陽	美しくし我ら詩の子がつどひをば神とこしえに守りたまふべし（支部を設けて）	
178	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	しばし今秘めて封じてほほ笑まむ小さき靈（たま）守れ紅梅つぼみ	作者名「増部」→「増野」に修正
179	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	そぞろ我が成りしこの賦は神たびぬ間にはやらじ春の夜の夢	作者名「増部」→「増野」に修正
180	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	くろがねの鎚のこは手をはぐれつつはごくまれにし愛のみ翼	作者名「増部」→「増野」に修正
181	銀鈴4-7	征矢（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	聖書（バイブル）にかをりゆかしき梅の花白きを愛づる我となりにし（以上二首 病榻詠）	作者名「増部」→「増野」に修正
182	銀鈴4-7	春屋（新涼会 松江支部）	金本征帆	弱き子の世にたたかはん力なしに剣にかへてこの歌まゐる	
183	銀鈴4-7	春屋（新涼会 松江支部）	稲田紫園	崇き花彩ある雲のたなびきて春はつきせぬ輝きおびぬ	
184	銀鈴4-8	春屋（新涼会 松江支部）	坂本笑風	若き血のわかきゆらぎの夢さめてかくて悶えて入らむ詩の領	
185	銀鈴4-8	春屋（新涼会 松江支部）	西枯荻	天の譜を乙女の胸の弦に秘めてかくれましたる神にやはあらぬ	
186	銀鈴4-8	春屋（新涼会 松江支部）	西枯荻	み手により天めぐり来し我靈の凝りてや成りし歌か一律	
187	銀鈴4-8	銀箭（新涼会 米子支部）	佐々木春濤	破れ垣に花咲き出でぬ春の雨木蓮剪（き）ると君うらわかき	
188	銀鈴4-8	銀箭（新涼会 米子支部）	佐々木春濤	人や何運命（さだめ）の海の片帆船潮のゆるきに真帆あげて見む	
189	銀鈴4-8	銀箭（新涼会 米子支部）	前田木風	ざれ歌も興や春の夜橋にしてみ肩ならべて遠き灯を見る	
190	銀鈴4-8	銀箭（新涼会 米子支部）	前田木風	若き子の君ゆりおこす春の宵袂ふれてやさくらこぼれぬ	
191	銀鈴4-10	三江追悼集	河野素陽	更くる夜の君をしなげく我が歌ぞ天の御座に君聞こすべき	原文総ルビ
192	銀鈴4-10	三江追悼集	福田紫雲	天の座にとこ安らけき君はしも戦のうたに神を泣かしむ	原文総ルビ
193	銀鈴4-10	三江追悼集	大屋桂水：大屋左一	犠牲（にえ）を栄（はえ）と神にちかひし七年は『君が旅順の終焉（をはり）』 にぞ見る	原文総ルビ
194	銀鈴4-11	三江追悼集	蔵田二葉：蔵田のぶ 子・蔵田信子	雄々しかる足らひおぼえて往にましし御靈（みたま）を泣くとうたに聞こさむ	原文総ルビ

195	銀鈴4-11	三江追悼集	蔵田二葉：蔵田のぶ子・蔵田信子	かくてこそ天にはそはむ一人ぞとたふれし友に喜ばれぬる	
196	銀鈴4-11	三江追悼集	河野翠澁	白梅や精やいと花天のぼる足ると笑みつつ君天のぼる	原文総ルビ
197	銀鈴4-11	三江追悼集	河野翠澁	やさしうも奮ひ立ちつる君なれば詩の常花は天にかざらむ	原文総ルビ
198	銀鈴5-1	梅の戸	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	大母（はは）慕ひ泣くべき室と『詩』によらんきのふ巢立し小ひさ雛鳥	原文総ルビ
199	銀鈴5-1	梅の戸	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	その胸に奇しき力の物よぶと思ふにもなど神をわするる	原文総ルビ
200	銀鈴5-1	梅の戸	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	とぶ蝶の行方追はんと来し野辺にあえな人よと袖なれにけり	原文総ルビ
201	銀鈴5-1	梅の戸	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	得べき世に又古へのあるべしと惜しからぬにも省みらるる	原文総ルビ
202	銀鈴5-2	四月賦	岩崎酔芳	ひきしひきし琴柱の折れぬ夜をほめて二人し添へば物美しくしき	
203	銀鈴5-2	四月賦	岩崎酔芳	衣縫ふによるによるしき桃の昼日向ぼこりの睡気えたへぬ	
204	銀鈴5-2	四月賦	岩崎酔芳	名はきかず真情（まごころ）こめし手の指に力おぼゆる愛着の執	
205	銀鈴5-2	四月賦	岩崎酔芳	髪すくに日長ほほゑむ椿さく紅の香をふく四月となりぬ	
206	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	森岡蹄花	夢にしてこの子が得たる物や何転ずる円き玉と見ゆるに	
207	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	森岡蹄花	かをりぬる夢か春野の色なして霞をなして想像（おもひ）湧きこし	
208	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	河野素陽	たまはりし美しく夢のにひ衣被ぎまありぬ春のあけぼの	
209	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	河野素陽	おほけなくもうまし我歌選に入りて天のおん扉（と）に刻されてける	
210	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	冠たび天なる栄をゆるされて彩羽まとはむよき折もこそ	
211	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	若草にまろばむもよし春の風紫霏は身をおほへなほ	
212	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	伏谷敏子	行く君をみ袖に怨じ倚りし戸や月影ゆらぎ梨吹雪しぬ	
213	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	伏谷敏子	花の香や水あたたかき春の野の胡蝶が夢も神にかよへば	
214	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	野田ゆきをを	恋成りてもだえの律も覚えけるかくてぞとはの夢にこもらん	
215	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	野田ゆきをを	事はみな天のみ旨に副ふべきとみ眉静かに動きぬる人	

216	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	園子	恋はそれ紅き真白き春花の中にしつひの地はもとむとぞ	
217	銀鈴5-3	夢（新涼会浜田支部）	園子	このままに籠めむ秘めよとあけがたの夢はみ神の奪ひ去にけん	
218	銀鈴5-5	白影	穴戸梅軒（岩代）	あたたかきやさしみ胸にいだかれてうまひの稚児と我笑まれける	
219	銀鈴5-5	白影	古瀬露香（大原）	笹の雨しばし机にまどろめば詩神やいづこ夢円かなり	
220	銀鈴5-5	白影	土谷紫仙（大原）	平和（やはらぎ）のその美はしき犠牲（いけにえ）とさくら背負ひて出でし武者振	
221	銀鈴5-5	白影	田邊馬笑（邑智）	銀鈴は鶯姫が讃に似てここよ詩の国ほがらかに鳴る	
222	銀鈴5-5	白影	田邊馬笑（邑智）	美しくうみ髪梳りて糸柳春うららけく風になびきぬ	
223	銀鈴5-5	白影	野田ゆきを（浜田）	ラケットを持つわが右手（ゆて）に梅ちりて香りはみちぬ身は天のもの	
224	銀鈴5-5	白影	野田ゆきを（浜田）	菊さきぬあふげば月に香もあり秋のまろうどよき歌を誦せ	
225	銀鈴5-5	白影	野田ゆきを（浜田）	ふくろふや杉の木立に月淡しあさまし秋に人をねたみぬ	
226	銀鈴5-5	白影	山下石泉（邑智）	人送る花のあしたのひと時をゆるせ鶯詩（うた）はあざらり	
227	銀鈴5-5	白影	山下石泉（邑智）	願くば胡蝶となりて春の夜を花の女神にみ詩（うた）聞くべき	
228	銀鈴5-5	白影	立田紅翠（松江）	われとわがつくりし笑みのいつはりに女かなしき緋牡丹の花	
229	銀鈴5-5	白影	立田紅翠（松江）	鑿の手に像（すがた）はなりぬ黄金扉や春よそぼひの一門くぐる	
230	銀鈴5-5	白影	立田紅翠（松江）	かなしみの潮が巻くに任せよと名はたまひたる処女（をとめ）なるべき	
231	銀鈴5-5	白影	立田紅翠（松江）	うつし世にただひと時をゆるされてはばかりあらぬ恋もしるべし	
232	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	瘦肩に御袈裟かけたる若き僧経誦す声の春にくもりぬ	
233	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	ゆるやかに春の夕日を背にあびて京を南へ白鳩（はと）のかへれる	
234	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	朧月明日は銚子へ下り船今宵限りか利根の船唄	
235	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	詩にあきて春の夕に我やみぬ鸚鵡しつかに春の譜うたへ	
236	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	絹の絵に光もつ子の掌天の御神よ芸術（たくみ）をめるせ	
237	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	われ病まで歌に寝ねたる朝空を生駒葛城花雲ながる	
238	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	大倭永久（とは）の光の美はしく彩雲栄ゆる春のみ園や	
239	銀鈴5-5	白影	前田木風（米子）	そとみよる蘇生（かへり）の風にほほ笑みて枕かくしぬ春のおぼろ夜	
240	銀鈴5-5	白影	山本明星（大東）	天降る君がみ霊のおん供と五色の旗に花吹雪する	
241	銀鈴5-5	白影	山本明星（大東）	み夢してわが面影を見ませしを若きおもひの君にふれてか	
242	銀鈴5-5	白影	山本明星（大東）	何祈る愛にもえたるおん眸聖壇の白百合微動（ゆら）ぎ出でぬる	
243	銀鈴5-6	白影	山本明星（大東）	藤なみの花のそよぎに鳥籠の緋房もゆらぐ春のやは風	
244	銀鈴5-6	白影	梅原梅窓（八束）	かがやかば孔雀の彩とかがやかむふたび我に栄（はえ）甦る	
245	銀鈴5-6	白影	梅原梅窓（八束）	訪ひよれば光明（ひかり）の国へ導くとたびしみ旨に畏こまりぬる	
246	銀鈴5-6	白影	梅原梅窓（八束）	春雨は恋のみ神がたくみにてしづかに花を葉をそだてける	
247	銀鈴5-6	白影	佐々木春濤（米子）	天地の御力凝りてなりし子になにゆゑせまる『のろひ』なるらし（病床にふして）	

248	銀鈴5-6	白影	佐々木春濤（米子）	ひと花の落つる響におどろかるさばき来るよと安からぬ身や	
249	銀鈴5-6	白影	佐々木春濤（米子）	草堂に春の雨ふる夕ぐれや真白き花の夢とこぼれぬ	
250	銀鈴5-6	白影	佐々木春濤（米子）	美しと思ふに我に夜の夢や白き影して魔はおそふらし	
251	銀鈴5-6	白影	鈴木暁星（那賀）	生れ得て千年よき夢美しくう歴史かざると身はほこるべき	
252	銀鈴5-6	白影	鈴木暁星（那賀）	名と栄（はえ）はおぼかた人にまゐらせてあかぬ思ひに我は春経ん	
253	銀鈴5-6	白影	鈴木暁星（那賀）	新らしき天のみのりを伝へんと鶯なれば野にうまれ来し	
254	銀鈴5-6	白影	内田白百合（松江）	堤半里若草もえて花さきて春を胡蝶の舞に酔へとや	
255	銀鈴5-6	白影	内田白百合（松江）	死か生か神の秘めますおん胸の小琴にふれて清き音をきけ	
256	銀鈴5-6	白影	内田白百合（松江）	物みなを空（くう）と果かなむ人あはれ神による子の春や永久（とこしへ）	
257	銀鈴5-6	白影	内田白百合（松江）	御怒りの焰追ふてふ旋風（はやて）にも地なるとがとはに残れる（とがは消ゆべきにもあらず）	
258	銀鈴5-6	白影	立石洲洋（八束）	南（みんなみ）の雲井のよそに君ゆくと涙に破（や）れぬ春のわが夢	
259	銀鈴5-6	白影	河野素陽（浜田）	おほらかに召されてまゐる一人ぞと春の夕をかしこまれける	
260	銀鈴5-6	白影	河野素陽（浜田）	春の夜や奇しくも我の譜はなりぬ胸の小琴の美しさゆらぎ	
261	銀鈴5-6	白影	河野素陽（浜田）	めくらみぬ恋の痛手にめくらみぬくらむ我眼になほ紅の色	
262	銀鈴5-6	白影	河野素陽（浜田）	春の野に二人しあらんものなればなどさびしらを告げまゐらせむ	
263	銀鈴5-6	白影	河野素陽（浜田）	さかしらの狸が舞は今日ぞとておくれればせにも狐参んずる	
264	銀鈴5-6	白影	米村水聲（松江）	美しと春夕つづく海原に双（つがひ）鷗を見てもありにき	
265	銀鈴5-6	白影	米村水聲（松江）	わが歌とくらべも見むと連翹のさ庭に来ては鶯のなく	
266	銀鈴5-6	白影	米村水聲（松江）	園にたてばあえかなる頬（ほ）に花散り来われやうたひて草に寝てまし	
267	銀鈴5-6	白影	米村水聲（松江）	み手とりて董つみにし春も昔四つの袂の色あせぬ、今	
268	銀鈴5-6	白影	米村水聲（松江）	美（うま）し子の聖旨（みむね）かしこみ今日得たるよろこび祝ぐと鶯のなく	
269	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	立石洲洋	おぼせ君さはおぼさずやおのづから春風恋の譜をはこび来る（笑風兄に）	
270	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	立石洲洋	こは夢か今うけまつるみ教のみ声と知るに雲をへだてぬ（枯荻兄に）	
271	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	立石洲洋	弱き子がみ階（はし）を近くさいはいやさもらひなれんさてかくのごと（征帆兄に）	
272	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	坂本笑風	若うして十四巷のさすらひを母あやぶみしみなさけおもへ	
273	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	金本征帆	低唱の君が詩そぞろ興惹くに紫雲我巻き楽鳴り出でぬ	
274	銀鈴5-7	低唱（新凉会 松江支部）	金本征帆	人もあらぬひと間紫蘭の香に満てば琴おのづから鳴りも出づべき	
275	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	佐々木春濤	若き子の悶えぬ恋ひぬめしひては火をふく山の石ところばむ	

276	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	佐々木春濤	鶯がよき音ほがらに囀づればねたみあるべき我小野の鳥	
277	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	田中雪兔	今は去る身春の花野へともなひて君が御袖に涙のこさむ	
278	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	田中雪兔	白鳩のふとわが胸にしぬび入り鳴きぬと見てし夢や月さす	
279	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	前田木風	ねがはくば我が名と君が名とならべ石にきざみて千歳秘めむ	
280	銀鈴5-8	火柱（新凉会 米子支部）	前田木風	思はれむほのほともゆる君が胸われを入るにまたあまりある	
281	銀鈴5-10		大屋桂水：大屋左一	戦慄（をののき）のそはよみがへるみ聖旨（さとし）と旧衣（ふるぎぬ）ぬぐに ほほ笑まれぬる	
282	銀鈴6-7	袖模様	山本明星	ゆく春のなやみ寂しきゆふ雨や桐の花且つ散りぬゆふ雨	
283	銀鈴6-7	袖模様	山本明星	世をわびず人をも恋はじ思はじと思ふにだにも涙ながるる	
284	銀鈴6-7	袖模様	山本明星	さはいへどなみだ流れてとどまらず流れしあへず君をこそ恋へ	
285	銀鈴6-7	袖模様	山本明星	絹団扇緋房ゆららにながやかに、光琳振の絵はほめまん	
286	銀鈴6-7	袖模様	山本明星	舞姫が衣桁にかけし萌黄衣のたのたゆたの袖模様かな	
287	銀鈴6-9	透き影（新凉 会浜田支部）	松本泣花	行くや春恋にもへぬる白鳩の胸さきて見む思ひとし云へ	
288	銀鈴6-9	透き影（新凉 会浜田支部）	後藤孤星：後藤藤朗	奇しき香のわがあたたかき胸にみつ桂かざして舞はむといへや	
289	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	河野素陽	うら若きをとめと生れ恋知りつ奇しきなやみも身におぼえける	
290	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	伏谷柴雨	そとよりて人の小琴の音にしのお門べかをるや木蓮の花	
291	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	須田紫萍	云ひしらぬくしき力のあるがごとわが魂ゆらぐ白百合の花	
292	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	増野翹白：増野三良	春の血にゆらぐおもひの面影か桜はきみがやさ笑に似る	
293	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	増野翹白：増野三良	魂さそふ青葉がおくの夢の宮白裳の神が影も透き見ゆ	
294	銀鈴6-10	透き影（新凉 会浜田支部）	増野翹白：増野三良	まどろめば蝶とすぎぬるうまし夢藤のとびらに怨ながきかも	
295	銀鈴6-11	君を思へば	前田木風	おぼろ灯にうつる木蔭の若きひと遠目に見つやおばしまの君	
296	銀鈴6-11	君を思へば	前田木風	若駒や君が姿の遠のきて香具山おろす初夏の風	
297	銀鈴6-11	君を思へば	前田木風	ひたはせて浅間の洞の火の口に入りてし死なむ君を思へば	

298	銀鈴6-11	君を思へば	前田木風	おん夢か寝ざめの姿やさ面程よき頃に詩（うた）の譜たまへ	
299	銀鈴6-11	君を思へば	前田木風	舞姫が江戸むらさきの裾模様桜月夜のともしびはゆる	
300	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	み名呼べば怖きやうにも胸せまりただに眼を据へ君を見護りぬ	原文総ルビ
301	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	恋せしめ君こそやさしわがまみに彫られて去なぬあえなみ姿	原文総ルビ
302	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	寂しけれど涙あふれぬ夕なりやがては君と手とり寝ぬべき	原文総ルビ
303	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	真珠手にわがうたよしとめでましぬ悔は遠鳴り白沫立つ日	原文総ルビ
304	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	海人と生ひて磯にまろびて恋知らぬ醜男なれば君は知らずも	原文総ルビ
305	銀鈴6-12	白沫	藤田紫雲	初夏風君がうなぢに柳ふき遠きかなたも水ゆるぐ朝	原文総ルビ
306	銀鈴6-14	丹碧	碧雲：奥原碧雲	青葉わか葉南大門のまたるすぎ仁王の像に小手あはさるる	原文総ルビ
307	銀鈴6-14	丹碧	碧雲：奥原碧雲	公麻呂が鑄のなごりいまに見る慈眼たふとき金銅蘆遮那仏（国中連公麻呂は大仏の鑄工也）	原文総ルビ
308	銀鈴6-14	丹碧	碧雲：奥原碧雲	金色の後光まばゆきろしやな仏仰ぐにしのぶ奈良の大御代	原文総ルビ
309	銀鈴6-14	丹碧	碧雲：奥原碧雲	讃ずるに言葉もしらず良弁が鑿の香に酔ふ雨の三月堂	原文総ルビ
310	銀鈴6-14	丹碧	碧雲：奥原碧雲	金泥の御経たふたき厨子のうち鑿の香とはに古おもほゆ	原文総ルビ
311	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	田中雪兎	筆取りて詩成らぬ春のもだえより金星空にいく夜かぞへし	
312	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	田中雪兎	舟を遣る湖畔の月や夏の宵櫓に和し友の笛吹きにける	
313	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	松下素蝶	頬照らす灯しづかにそむきまゐらせて柳の街をゆきすぎにけり	
314	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	松下素蝶	花いかだみ門を西へ流しては君にまゐると唄のこし行く	
315	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	前田木風	くれないに鳥の血吐きぬ岩躑躅似けるほこりと恋たたへつも	
316	銀鈴6-14	やなぎ街（新涼会米子支部）	前田木風	我いつも絶えずし君がみ名となへ夢見心地の路辿りぬる	
317	銀鈴6-17	簾裡	内田白百合（松江）	さらばとてうちうなづきつ雨の橋聞き分けよくも君は分れぬ	
318	銀鈴6-17	簾裡	内田白百合（松江）	海棠やさても風情の似たる哉つねにも雨はふりそそげかし	
319	銀鈴6-17	簾裡	米村水聲（松江）	おもはれて待てとし云はば百宵も千夜も待つべし花をしとねと	
320	銀鈴6-17	簾裡	米村水聲（松江）	あるは風あるは雨をもよびおこす石とならばややけし夏野の	

321	銀鈴6-17	簾裡	米村水聲 (松江)	夕もやはつつみぬ遠き小野の火と花のやうなるわれら二人を	
322	銀鈴6-17	簾裡	米村水聲 (松江)	こもり居やひと日円らの瘤なでて行く春惜むホ匂はなりにし	
323	銀鈴6-17	簾裡	井上清軒 (邑智)	春は来ぬ梅の花笠花やかにうぐひす姫もまた浮かれ来し	
324	銀鈴6-17	簾裡	長田墓瞳 (那賀)	火をふきて七たびこの世ほろぼさむ痛手負ひては何物も見ず	
325	銀鈴6-17	簾裡	長田墓瞳 (那賀)	白磯や小ひさ素足の趾に笑み臙月夜をそと馳せにける	
326	銀鈴6-17	簾裡	長田墓瞳 (那賀)	さあらずや『みどりこぼるる葉』と『あかき京の夏花』ふさふと見るに	
327	銀鈴6-17	簾裡	長田墓瞳 (那賀)	小鼓や舞姫十たり玉殿の柱ゆらぎて月おぼろなり	
328	銀鈴6-17	簾裡	長田墓瞳 (那賀)	よろこびのをどり子四尺 (影彰子) 袖の香めでてさざめく街や	
329	銀鈴6-17	簾裡	田中雪兔 (米子)	君故に神も否みぬ年若きみ姉もすてぬ王をだに去る	
330	銀鈴6-17	簾裡	田中雪兔 (米子)	水に寝て思はず明けし短か夜や君が耳にも啼きぬほととぎす	
331	銀鈴6-17	簾裡	田中雪兔 (米子)	更科や京へ人遣る夕月夜舟はしづかに淀の川ゆけ	
332	銀鈴6-17	簾裡	立石洲洋 (八束)	竹植ゑて月待つ宵の小枕に夏の水よき音を伝へけり	
333	銀鈴6-18	簾裡	立石洲洋 (八束)	別つべき袂惜しとやほととぎす汝も啼きにけり橋のあかつき	
334	銀鈴6-18	簾裡	山下石泉 (邑智)	盲ひてはこれよき道とあへぎしを荊刺さす世かいま覚えける	
335	銀鈴6-18	簾裡	山下石泉 (邑智)	玉船や波路ゆらゆらゆれ往きて今をかぎりの海の楽聞く	
336	銀鈴6-18	簾裡	山本明星 (大原)	酌めどなほ千度かゆれどつきぬ泉これや女神の恋の乳房か	
337	銀鈴6-18	簾裡	山本明星 (大原)	窓あけて晨若葉の風を見る庭の小鳩よ人になじまぬ	
338	銀鈴6-18	簾裡	鈴木暁星 (那賀)	これをしも罪としいふや罪なりと云はば云はせつ君が手をとる	
339	銀鈴6-18	簾裡	鈴木暁星 (那賀)	君が詩は花の香に似て色に似てわが胸くしくとこふれぬるや (翠激の君に)	
340	銀鈴6-18	簾裡	鈴木暁星 (那賀)	罪なりとよし驕れりとそれもよし涙きよきは君すでに知る	
341	銀鈴6-18	簾裡	鈴木暁星 (那賀)	恋しさのやる方なくて高らかに父よと呼ばば山彦 (こだま) かへしぬ (父の墓前にて)	
342	銀鈴6-18	簾裡	内部梨雨 (大原)	あさ風に小萩こぼれし奥庭やみ手とり池の水掬ばまし	
343	銀鈴6-18	簾裡	有松暁衣 (津山)	身若うて髪のがきもめなれぬ子京のそだちぞ京の歌おくる (翠激の君に)	作者名「暁表」→「暁衣」に修正
344	銀鈴6-18	簾裡	前田木風 (米子)	春の夜の桜あかりは君によしそひよる手もてよき君巻かむ	
345	銀鈴6-18	簾裡	立田紅翠 (松江)	若き妓に手添へ舞強ひ春の宵おばしま近く酒置きにける	
346	銀鈴6-18	簾裡	立田紅翠 (松江)	野狐の小き智慧もて恐怖もて葡萄うかがふ眸にも似ざるや	
347	銀鈴6-18	簾裡	立田紅翠 (松江)	秋は草のかれ行く運命 (さだめ) もつものとしづかに笑みて君は去にしか	
348	銀鈴6-18	簾裡	立田紅翠 (松江)	海こえて来しか秋風山こえて来しか秋風我を泣かしむ	
349	銀鈴6-19	菖蒲染 (新凉会松江支部)	立石洲洋	宵祭り太鼓柏子の面白く幼な権左が詣で姿よ	
350	銀鈴6-19	菖蒲染 (新凉会松江支部)	立石洲洋	心なく遠くたもとをわけしより若き思ひの遣りどころなき	
351	銀鈴6-19	菖蒲染 (新凉会松江支部)	坂本笑風	うた誦せば合飲の葉ゆらぐ夕靄にみ声つづきて君来ましけり	

352	銀鈴6-19	菖蒲染（新涼会松江支部）	坂本笑風	湯あがりのあやめそめなす華美（はで）すがた藤色ぼかし裳のそよぎける	
353	銀鈴6-19	菖蒲染（新涼会松江支部）	金本征帆	封じたる百合の蕾の秘め歌は牧人讃ず歌なりけらし	
354	銀鈴6-19	菖蒲染（新涼会松江支部）	金本征帆	懊悩（わづらひ）やみ階（はし）による子ぬかづく子美しき子に趣味をあたへよ	
355	銀鈴6-19	菖蒲染（新涼会松江支部）	金本征帆	蓮花や朝しばらくを堂の椽尼のしめ言われて泣かしめぬ	
356	銀鈴6-20	君	河野岩雄：河野翠激	ふたつなきいのちなれども君へこそとのみに眼（まみ）のかがやきにける	原文総ルビ
357	銀鈴6-20	君	河野岩雄：河野翠激	おとなへばひそかに門の木蓮や要くぐりて君が室（ま）へこそ	原文総ルビ
358	銀鈴6-20	君	河野岩雄：河野翠激	こころみにみ籤ひきても見たかりしいく日心のむすぼうれしや	原文総ルビ
359	銀鈴6-20	君	河野岩雄：河野翠激	遠つ世の躬恒も来ると山住や静かに歌の草案じぬる	原文総ルビ
360	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	里慣れて愛想またよく大人びぬ十五とつきし君とおもふに	原文総ルビ
361	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	こころよりこころに何のかよへばか素直に笑みて頬のそまりつる	原文総ルビ
362	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	紺青に空すみ湖（うみ）もひとつ色おなじひかりの満つると思へば	原文総ルビ
363	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	朝風を紹蚊帳やはらに吹き入れつ人とそひ寝の蓮かをらしむ	原文総ルビ
364	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	あかつきや水よき里の車井にふたりし立ちぬ啼くほととぎす	原文総ルビ
365	銀鈴6-21	君	河野岩雄：河野翠激	からからと男声して夏木立君によく似し笑ひやうかな	原文総ルビ
366	銀鈴6-21	古画	大屋左一：大屋桂水	琴の手のなめら律呂（しらべ）や新嫁（はなよめ）の華奢のうすもの陸魂ゆらぐ	原文総ルビ
367	銀鈴6-21	古画	大屋左一：大屋桂水	さなり君世の所謂（いふ）罪の『美（よ）き夢』をとほにさめたと抱きて去なむ	原文総ルビ
368	銀鈴6-21	古画	大屋左一：大屋桂水	古画に見るまばら頬髭の長かるにヨハネしぬびて衿正しける	原文総ルビ
369	銀鈴6-21	古画	大屋左一：大屋桂水	襲はれぬ目覚めてもまだ消えやらぬ怖れおののぎ灯の暗き殿	原文総ルビ
370	銀鈴6-21	古画	大屋左一：大屋桂水	袖破れぬ怨は深し春の殿かの日のぞみて忍ぶれどなほ（女がうたへる）	原文総ルビ
371	銀鈴7-1	おもひ	福田紫雲	『おもひ』なき胸にやさしうひびきして寝ねられぬ夜のうた聴きたまへ	原文総ルビ
372	銀鈴7-1	おもひ	福田紫雲	火の中に棲むとし君がのらさずば求めて何におもひやはらぐ	原文総ルビ
373	銀鈴7-1	おもひ	福田紫雲	われとわが胸に問ふ間の暫らくはこの手罪ぞとのたまはぬべき	原文総ルビ
374	銀鈴7-1	おもひ	福田紫雲	琴の手は妙にみ髪は風にふき夏うす月の頬へながれける	原文総ルビ
375	銀鈴7-1	おもひ	福田紫雲	うすづきは軒に近うてしら雲はみなみへ消ゆる真夏たそがれ	原文総ルビ
376	銀鈴7-2	君なれば	立田紅翠	ほととぎす哀歌さびしき一律を楠の大樹の斧に秘めける	
377	銀鈴7-2	君なれば	立田紅翠	力なしほのぼと燃えむ火ならねばよそながらこそ君を恋ひにけり	
378	銀鈴7-2	君なれば	立田紅翠	母の乳にまろく生ひてし君なればいのちのかぎりよき恋をもて	
379	銀鈴7-2	君なれば	山本明星	更けぬれば笛のやうなる夜の神の歌ほがらかにせせらぎぬ水	
380	銀鈴7-2	君なれば	山本明星	おほみ歌誦せばゆらぎぬ魂（たま）と魂百合もゆらぎぬ天よぶ歌に	

381	銀鈴7-3	清興（初めて雑誌「銀鈴」に接して）	碧雲：奥原碧雲	白銀の鈴のひびきに我しらずしたひよる子の頬のささ笑み。	原文総ルビ
382	銀鈴7-3	清興（初めて雑誌「銀鈴」に接して）	碧雲：奥原碧雲	みどり葉の葉ずれのさやぎ人知れず夏の女神に袖ふれて見し。	原文総ルビ
383	銀鈴7-3	清興（初めて雑誌「銀鈴」に接して）	碧雲：奥原碧雲	山の気のそびらにせまる心地して鈴のひびきに人しのばしむ。	原文総ルビ
384	銀鈴7-3	清興（初めて雑誌「銀鈴」に接して）	碧雲：奥原碧雲	おちたぎつ岩根たばしる真清水のひびきに似ずやまな児銀鈴	原文総ルビ
385	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	金本征帆	才なきを悔いぬされどもむちうちてみ袂とりて従ふべきや	
386	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	福間如舟	けうとくも世つかぬ庵と僧都笑みぬ秋なり君に紅き葉たかむ	
387	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	坂本笑風	手燭（てそく）して牡丹剪るととき色の袂すずしき夜の景色かな	
388	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	久保田双蝶	岩こえてたどる磯回の藻の花の白きいかにと言問ひなれぬ	
389	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	久保田双蝶	このもだへ胸にしふかく秘めたれば神知りまさず君も斯くまた	
390	銀鈴7-3	増野翹白君と語る	紫雲：福田紫雲	みなさげや訪ひこし君に泣かれぬるうたなき友の才をあはれめ	
391	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	中津峰秋：峰秋	袂とりて母はいくさに死ねといひぬこの太刀佩きて死ねやといひぬ	
392	銀鈴7-3	石吹く風（新涼会松江支部）	中津峰秋：峰秋	年若き妻がたもとは美はしく五月雨晴れて葵咲きける	

393	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	中津峰秋：峰秋	おん神のみむるはいとも厳かに青葉めぐらし虹とこ巻きぬ	
394	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	中津峰秋：峰秋	夏の山夕越えくれば水の里若葉の里と名負ひし里や	
395	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	やさ眉のひそみまたなく艶なりと青葉がくれにささやきし人	
396	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	胸のおもひ我とおほひて野に立てば石吹く風も面白きかな	
397	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	うつし世に恋成らざりし魂ならば星のひとつよ紫に射せ	
398	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	ひと知れず涙恋ふるや少女子の掬ばば満ちむ胸のさかづき	
399	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	風薫る袖師が浦や松の間に君を乗せたる白帆うかびぬ	
400	銀鈴7-4	石吹く風（新涼会松江支部）	立石洲洋	百合折ると水をわたりて岩根道君をまねきぬ櫛若葉かな	
401	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	伏谷柴雨	なになれば君がみ歌になかれぬるそぞろ棹さす初夏の川	
402	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	松本泣花	鷗舞ひ茜にほへる夕潮に似たるをもひと鳴れ胸のうち	
403	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	河野素陽	白沫のとび散るがごとこの思ひおほみ心をさわがせまつる	
404	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	後藤孤星：後藤藤朗	春の夜の鳥羽絵に似たる人ふたり京路に見たるうす月夜かな	

405	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	後藤孤星：後藤藤朗	五月雨の灯影ちひさく宵ふけて花ほの白きやどりかな	
406	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	うつつなうみかげしたひてさすらひぬ七年若きおもひもえては	
407	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	なつ花の白きめぐらし殿たてて幔幕うちて君を舞はせむ	
408	銀鈴7-5	白藻の影（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	み手とれば白藻のかげのみなそこに君がやさしき瞳うつりぬ	
409	銀鈴7-6	ほの見し日	米村水聲	透き綾の帳のうちにたつ人をほの見し日より恋そめにける	
410	銀鈴7-6	ほの見し日	米村水聲	百合の香をゆかしみ草にぬる宵や櫛木立に青靄ながる	
411	銀鈴7-6	ほの見し日	米村水聲	水楼や青芦もれてすず風の宵寝の人の髪ふきにけり	
412	銀鈴7-6	ほの見し日	米村水聲	月夜よし草の戸君が訪ひまさばうちにとまをせ門の水雞よ	
413	銀鈴7-6	ほの見し日	高瀬淡嶺	絵行燈のざれ絵の謎に人かへさず旅のやかたの夏の夜更けぬ	
414	銀鈴7-7	ほの見し日	高瀬淡嶺	あららぎや月にさびれしいく年を怪鳥廂に美（うま）し巢つくる	
415	銀鈴7-7	ほの見し日	高瀬淡嶺	楡の香にしばし髪とく若き君と野をゆく我に吹く青あらし	
416	銀鈴7-7	ほの見し日	高瀬淡嶺	石ぼりの女神天華の香にゑひて夢みるごとき夕月夜かな	
417	銀鈴7-9	鼓	蔵田のぶ子：蔵田二葉・信子	相乗りて桃みちよぎる馬車の人物つつましようおはしぬと見る	原文総ルビ
418	銀鈴7-9	鼓	蔵田のぶ子：蔵田二葉・信子	はげいとうや時雨に似たる風の音に君を怨じて泣きし日もあり	原文総ルビ
419	銀鈴7-9	鼓	蔵田のぶ子：蔵田二葉・信子	百合の香やおばしま近うさもらひてかぜ待つ人のよきかたちかな	原文総ルビ
420	銀鈴7-9	鼓	河野岩雄：河野翠激	ほの白く花に雨するあかつきをならびておはせ秋の人ふたり	原文総ルビ
421	銀鈴7-9	鼓	河野岩雄：河野翠激	風そよと戸をうつ宵の山やどりちひさき君が息も秋なり	原文総ルビ
422	銀鈴7-9	鼓	河野岩雄：河野翠激	秋風やよそへて君も恋ひまつる紫苑とよぶに秋かぜふきぬ	原文総ルビ
423	銀鈴7-9	鼓	大屋左一：大屋桂水	あさ霧やむらさき小茄子うるはしうよき夢見てかほほゑみにける	原文総ルビ
424	銀鈴7-9	鼓	大屋左一：大屋桂水	おん国にひびけと強う鼓（こ）やうたむうつ手のちから弱しともまた	原文総ルビ
425	銀鈴7-9	鼓	大屋左一：大屋桂水	雨の日を君おどろかし歌強ひて牡丹なりぬとかざしかへらむ（翠激に）	原文総ルビ
426	銀鈴8-1	袖几帳	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	南窓や舞楽遠音に詩を作る風よき頃ぞ君も招ぜむ	原文総ルビ
427	銀鈴8-1	袖几帳	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	西風や月をよぎりて苦船の夢見る人に子語るひとに	原文総ルビ

428	銀鈴8-1	袖几帳	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	うたはみな御光なれば憧れて天へとややによりぬ走りぬ	原文総ルビ
429	銀鈴8-1	袖几帳	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	思ひわびぬ野分する日を北国の君に沈たく人なき日ぞと	原文総ルビ
430	銀鈴8-1	袖几帳	蔵田のぶ子：蔵田二葉・蔵田信子	今朝ひらく蓮の音きくと君さそひ花壇回りぬ霽する中を	原文総ルビ
431	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	梅原梅窓	おほらかにあれよと歌のみをしへを待せし夕戸の師にかしこみぬ	
432	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	加藤青波	あかつきや鞍馬を過（よ）きて大原女花のひと弁（よ）もまた夢に似る	
433	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	鈴木暁星	ぬかづけばここにも崇きおん啓示（しめし）夢かへりゆけ稚児の昔へ	
434	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	原田青鈴	朝風やよべ来し君をそとゆりて蓮のみ池にみ手しひまつる	
435	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	伊藤曲水	白がねの波おもしろう夜はふけて淡路が島に霧にかくれぬ	
436	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	赤木諷軒	神杉のさても静けきおんやしる落葉ふみて鶴一羽あし	
437	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	佐々木春濤	浜やかに姉とまきける緒鼓の千鳥が鳴くをみだれと云ひぬ	
438	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	古瀬露香	めでまさば朝八彩の露の香と生ひむとこしへみうたたびませ	
439	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	山本明星	たへがたくまた誦しまつるおぼみ歌夢やうにもわれをまきぬる	
440	銀鈴8-3	銀波（新涼会大東支部）	山本明星	相倚るに『たらぬ身』とのみ声小さうおん手はたびぬ必ずよ君（某に）	
441	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	うす霏をへだてて君とほの見ゆる河原につみぬ花撫子を	原文総ルビ
442	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	鳴る海のあなたに人はおはずべしおはさずとてもなつかしきかな	原文総ルビ
443	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	磯千鳥五丁へだててまたききぬ聞なる舟の櫓もきく夕	原文総ルビ
444	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	有明の月は家に入りおん方の玉の頬を射る海の楼かな	原文総ルビ
445	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	夕汐はひたよせ磯の岩かげに花藻ただよひ遠鳴く千鳥	原文総ルビ
446	銀鈴8-4	夕ちどり	福田紫雲	芦の葉は水にひたりてをとめ子の棹に汐わくよき夕かも	原文総ルビ
447	銀鈴8-4	金雲（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	児がかへの地蔵よこぎる青芦や翡翠啼きよる嫁島のくれ	
448	銀鈴8-4	金雲（新涼会浜田支部）	増野翹白：増野三良	旅伏山天馬を御しておん神のつどひます夜か茜華やぐ	

449	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	城見ゆるみどり葉かげやうみのくれいにしへの香もしたひてゆけな	
450	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	夕波や靄によき譜もころばせて夢のせゆかん湖の透宮（すきみや）（以上、碧雲 湖辺の夕にあくがれて）	
451	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	増野翹白：増野三良	讃ずるとみ兄したひて秋の戸に菊の冠捧げまゐらむ	
452	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	松本泣花	おもひては寝られぬ秋のながき夜を籠のこほろぎうまし歌誦せ	
453	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	松本泣花	うるはしき君が想をのせ来しや銀杏に栄ゆる金色の雲	
454	銀鈴8-4	金雲（新涼会 浜田支部）	後藤孤星：後藤藤朗	おん声は山の戸もれし駒鳥のしらべと聞きぬほがらかにして	
455	銀鈴8-5	金雲（新涼会 浜田支部）	後藤孤星：後藤藤朗	神藤ややはらの草に臥す鹿と春日の巫女にむつみしや君（翹白兄の旅に）	
456	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	坂本笑風	さやか夜月のみとのをそとぬけて銀河わたらすみ神を見たり	
457	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	中津峰秋：峰秋	野の夕村の童のしばぶえに岡をめぐりておん扉（と）によりぬ	
458	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	中津峰秋：峰秋	月姫の銀簪（かざし）砕けてさと散りて野の白露の玉と飾りぬ	
459	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	福間如舟	新らしう詩に生るべきみさとしも不才なればと三たびいなみぬ	
460	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	福間如舟	濃き霧や世はとほ落ちよ身まきてはたゆたひあるな詩人と生ひぬ	
461	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	立石洲洋	君往くと夢は破れぬ秋にしてわすれますなの初嵐かな	
462	銀鈴8-7	しば笛（新涼 会松江支部）	立石洲洋	生華のかをり恋しむ瞑想や几帳に秋のおとづれにけり	
463	銀鈴8-8	ささ枕	伊藤曲水	君が琴とわがふく笛と虫の夜や萩の小窓に月さしにけり	
464	銀鈴8-8	ささ枕	立石洲洋	とつ国の恋物語なつかしみ学士の君を巻く十たりかな	
465	銀鈴8-8	ささ枕	山下石泉	秋一夜たびし『いたみ』としほらしく胸はいだきて雨ききにけり	
466	銀鈴8-8	ささ枕	高瀬淡嶺	水引の紅美しく、朝明を露めでて行く人にこぼれぬ	
467	銀鈴8-8	ささ枕	高瀬淡嶺	肩に散る落葉（もみぢ）に耳をかたづけぬ天よりひびく音もするやと	
468	銀鈴8-8	ささ枕	高瀬淡嶺	秋九月愛宕祭りに鈴つけて提灯さげて人とならびぬ	
469	銀鈴8-8	ささ枕	立田紅翠	桜がり蒲団ゆたかの山駕籠に更衣おはしぬ水に沿ふ道	
470	銀鈴8-9	ささ枕	立田紅翠	永劫に二なき眸と黒髪とはだへは君にゆるされしもの	

471	銀鈴8-9	ささ枕	立田紅翠	天地に照る日雨の日風の日のあるごと胸のやすからぬかな	
472	銀鈴8-9	ささ枕	立田紅翠	若うして詩歌ひいづるおん才の君に添ふべく低き名やわれ（水声の君にかへし）	
473	銀鈴8-9	ささ枕	福間如舟	ひと花の君へと黄菊香を持たばよしとおぼさばみ歌たまはむ	
474	銀鈴8-9	ささ枕	福間如舟	なほもよる恋ふ身うつつと君まけば芙蓉ひらきて星かがやきぬ	
475	銀鈴8-9	ささ枕	福間如舟	秋の庵寂寞として夜を深みよりより黄なる花の香もしぬ	
476	銀鈴8-9	ささ枕	福間如舟	ぬかづけばいしくも草の香のゆらぎ野の秋にして人を酔はしむ	
477	銀鈴8-9	ささ枕	米村水聲	さは君がみ名を胸なる彩甕に秘め得てよりぞまどひそめきや	
478	銀鈴8-9	ささ枕	米村水聲	こほろぎや秋ぐさめぐる家の中にわれ住みなれぬ二人の親と	
479	銀鈴8-9	ささ枕	米村水聲	空候（くど）に姫がおんぞの裾のさとふれて鳴れるものにか草の鈴虫	
480	銀鈴8-9	ささ枕	米村水聲	十八の秋行く日なり白花に雨する日なり戸に歌かきぬ	
481	銀鈴8-9	ささ枕	米村水聲	いつの日か野にあひやがてはくれたる君によく似し人とあひけり	
482	銀鈴8-11	波	多田東岳	彩雲に希望をのせて山ひとつかなた飛びゆく鳥の数よむ	原文総ルビ
483	銀鈴8-11	波	多田東岳	わびしさは秋の夕べの竹の宿君をよせきて語る室なき	原文総ルビ
484	銀鈴8-11	波（以下亡き友を想ひて）	多田東岳	北東隔て二丁の父と友読経よろしき中央の我が宿（父の墓は東の丘、友の墓は北の阜、其間僅かに二町をへだてて中央に我家あり）	原文総ルビ
485	銀鈴8-11	波	河野翠漱	君思ふ思はず沈我、み手による刹那怨みもなげきもありや	原文総ルビ
486	銀鈴8-11	波	河野翠漱	とこ春や百夜四たりの楽人の女たちなるまとみに侍る	原文総ルビ
487	銀鈴8-11	波	河野翠漱	晴る日をと降る日と水の舟がかり三日御坊に、夜も寝ねたれば	原文総ルビ
488	銀鈴8-11	波	千代延松灣：千代延春圃	島の寺鐘の響きの末消えて船はあしまの靄にくれゆく	原文総ルビ
489	銀鈴8-11	波	千代延松灣：千代延春圃	萩散りぬ虫の音にたえぬ高殿の琴の音やみて月細りゆく	原文総ルビ
490	銀鈴8-11	波	千代延松灣：千代延春圃	藻の花のかをりただよふ磯の朝沖の白帆は靄のなかなり	原文総ルビ
491	銀鈴8-11	波	大屋桂水：大屋左一	黄金の波のたゆたひ日は入りぬまかせて往なむ終焉（をはり）もかくや	原文総ルビ
492	銀鈴8-11	波	大屋桂水：大屋左一	招かれて水晶殿のあかつきを人とかたりぬあをうみさして	原文総ルビ
493	銀鈴8-11	波	大屋桂水：大屋左一	牛を追ふこの里夏はふかみどり、人みな若うおん神に似る	原文総ルビ
494	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	恋すれば物に狂ふや忘れてはわれよりわれに文かきて見る	原文総ルビ
495	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	山棲や月をし見れば海こひし海をし恋へば君はおぼろに	原文総ルビ
496	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	さきの日に人の恋ひける若やぎをみづから思ひさびしや在りぬ	原文総ルビ
497	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	やはらかうふたりが魂は抱きけり笑とゆらぎの胸のみそのに	原文総ルビ
498	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	雅（やさ）文字やみ文いだけば黒髪影とし見ゆれ胸はゆらぎぬ	原文総ルビ
499	銀鈴9-6	恋すれば	川上櫻翠	ものいふにいらへしもせず笑もせぬ人と住まひぬ山に二とせ	原文総ルビ
500	銀鈴9-7	恋すれば	川上櫻翠	こよひまた心たゆたひ君を見て十日の月をめでてかへりぬ	原文総ルビ

501	銀鈴9-7	恋すれば	川上櫻翠	山の夕なほありし世の君しのび小雨に摘みぬ百合と桔梗と	原文総ルビ
502	銀鈴9-7	恋すれば	川上櫻翠	あなさびしいくたび秋のうれひへば相見し春のむかし帰らむ	原文総ルビ
503	銀鈴9-7	恋すれば	川上櫻翠	切に思ふ斯かる夕に頬をつたふ涙しなくば胸の裂けまし	原文総ルビ
504	銀鈴9-11	金矢	多田東岳	山なれど谷の音きけばまぼろしに浮きぬ浮かびぬ君がある磯	原文総ルビ
505	銀鈴9-11	金矢	多田東岳	山一つ金矢射ぬかぬ朝明や谷をおぼろの湯気窓にくる	原文総ルビ
506	銀鈴9-11	金矢	多田東岳	爪立たば見えもすべきを松一里思ひある磯ふみがてに過ぐ	原文総ルビ
507	銀鈴9-11	金矢	多田東岳	この波の何処へつづく秋日和三五反唄のせてでる	原文総ルビ
508	銀鈴9-11	金矢	西枯荻	人はみな白百合呪ふ歌うたひ喪服つけたる暗き街かな	原文総ルビ
509	銀鈴9-11	金矢	西枯荻	人の名をあまた刻みし二の鳥居三の鳥居や花崗岩（みかけいし）にて	原文総ルビ
510	銀鈴9-11	金矢	西枯荻	馬の上にそうびかざして霧を行く黒髪ながき南部少女（をとめ）よ	原文総ルビ
511	銀鈴9-11	金矢	高城七星	木屋町や柳が中のおぼろ月木遣をうたふ宵の程かな	原文総ルビ
512	銀鈴9-11	金矢	高城七星	夕陽（せきやう）は無台（ぶたい）にならぶ参籠の数十人を紅葉に照りぬ	原文総ルビ
513	銀鈴9-11	金矢	高城七星	堀川や紅の雨する友僊の若衆たちは番傘さして	原文総ルビ
514	銀鈴9-11	金矢	米村水聲	東ゆ赤丹色してさす汐に千鳥のさはぎ海の夜あけぬ	原文総ルビ
515	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	淀舟やしらしらあけの西窓の夢みる人に千鳥なくな	原文総ルビ
516	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	汐ざみや柳にたちぬ夕千鳥きくと磯辺の人三五人	原文総ルビ
517	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	おん胸にひそめるものを知りがたし秘鑰（ひやく）たまはむ吾にあらねば	原文総ルビ
518	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	船頭のいさかひやみてだみ声のふなうた海に霧する夜かな	原文総ルビ
519	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	木枯や一山どよみ四日頃の月は光りぬ古塔の上に	原文総ルビ
520	銀鈴9-12	金矢	米村水聲	一人居の淋しさなれぬ、初冬の時雨れて後に月さす頃を	原文総ルビ
521	銀鈴9-12	金矢	三島溪雲	すめる夜の虫のやれ譜をもたらし秋風そぞろ愁さそふや	原文総ルビ
522	銀鈴9-12	金矢	三島溪雲	沈みゆく夕日ながらに葡萄葉の軽う落ちきぬ小窓の君に	原文総ルビ
523	銀鈴9-12	金矢	三島溪雲	ちひさなる淋しきものを得てしよりの皆かをるわが世となりぬ	原文総ルビ
524	銀鈴9-12	金矢	蔵田信子：蔵田二葉・蔵田のぶ子	詫しむと君にかこちし日も思ひ、罪とかぞへて御前に伏しぬ	原文総ルビ
525	銀鈴9-12	金矢	蔵田信子：蔵田二葉・蔵田のぶ子	秋の夜やマルタと育つくはし女とつくられにけり聖壇すゑて	原文総ルビ
526	銀鈴9-12	金矢	蔵田信子：蔵田二葉・蔵田のぶ子	袖とりて愛すとうたひやさ人に罪強ひたりし日もありぬ去年（こそ）	原文総ルビ
527	銀鈴9-12	金矢	蔵田信子：蔵田二葉・蔵田のぶ子	秋の堂牧師のきみを向つ座に八人（やたり）ならびて聖書（ふみ）きく夜かな	原文総ルビ
528	銀鈴9-13	金矢	蔵田信子：蔵田二葉・蔵田のぶ子	御胸の底のちまたに響かぬや亡滅（ほろぶ）日せまるどよみの楽の	原文総ルビ
529	銀鈴9-15	水の里（新涼会浜田支部同松江支部）	河野素陽	冬ちどり砂浜道を行きがてに君とならびて聞く遠音かな	

530	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	河野素陽	水樓や千鳥が歌をたまへとて紅葉ながしの紅絹（もみ）まみらする	
531	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	福間如舟	涙もておほみなけに寄りまつる弱き子なればおほひてあれな	
532	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	福間如舟	行く秋を今のさだめを泣かれぬるみ啓示（さとし）追ふにまどひぬるかな	
533	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	森脇桃村	金色（こんじき）の美しさまよ銀杏の葉得べくはゆかむ君がかたへに	
534	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	森脇桃村	南椽に机して書く小春日や雲のわよひと歌なりぬれば	
535	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	坂本笑風	いもうとに声のよく似し十七の女といふにただなつかしき	
536	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	坂本笑風	笛の音やもみちかつ散る宿にしてもだへあればぞかなしと泣きぬ	
537	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	後藤孤星：後藤藤朗	しろがねの綱ゆらゆらと月姫は鳳輿（ほほよ）ゆたかに訪れにけり	
538	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	後藤孤星：後藤藤朗	川べりに鼓うたきく青簾君を背にして涼風よびぬ	
539	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	立石洲洋	あふけなくもみ光たびぬ詩も成りぬさいはひなりや恋も成りける	
540	銀鈴9-15	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	立石洲洋	驕楽のま屋は飽きぬくれまちて月や如何にと君をし訪はぬ	
541	銀鈴9-16	水の里（新涼 会浜田支部同 松江支部）	松本泣花	朝あけや島の少女（をとめ）のやさうたの青波わたりて来しよ館に	

542	銀鈴9-16	水の里（新涼会浜田支部同松江支部）	松本泣花	秋ふけて霜ばしらす朝の野にきぬぎぬわぶる人と名負ひし	
543	銀鈴9-16	水の里（新涼会浜田支部同松江支部）	増野翹白：増野三良	矢を負ひておもひ燃えけり瑠璃鳥のかけにかくる少女（をとめ）といへば	
544	銀鈴9-16	水の里（新涼会浜田支部同松江支部）	増野翹白：増野三良	ねがはくば秋をかざると指そめよ森に殿あむ小蜘蛛の如く（孤星兄にかへし、君絵の才あり）	
545	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	奈良すぎて神代の巻はうかがひぬうつつに恋ひし天の香具山	
546	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	旅ぞぞろ塔にのぼりてほのぼのと眉にあふぎぬ大和彩雲	
547	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	古杉や木立がおくの朱の宮ゆ男鹿まねけば小躍りて来る	
548	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	芸術や仏かがやく奈良の代を春日の巫女のうたにまたみる	
549	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	国宝（みたから）と色にも蒼（さ）びぬ盧舎那仏ころ千年（ちとせ）にあこがれしむる	
550	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	奈良に行かばみ冠まり集誦して上古の芸の美も讃へませ	
551	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	たたへよる大極殿の朱の廊にかしこつたなき詩（うた）彫らしめよ	
552	銀鈴9-18	七つの灯	増野翹白：増野三良	ああ古りし比叡のおほ山加茂の水歴史に趣味の巻しのばしむ	
553	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	おばしまに晩鐘ききぬ清水や厨子に彩する堂のともしび	
554	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	うるはしき御袍細太刀檜の扇うつら牛車に藤氏召しける	
555	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	眉染めて桜かざして永き日を詩歌あそびし遠世を思ふ	
556	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	京の女が日傘して行く仁王門丹碧見ゆる青若葉かな	
557	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	雛に似る祇園の宵の扇売女小唄やさしう『召せ夏忘れ』	
558	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	古伽藍や鴨の流れや舞姫や友禅名所京に生ひし子	
559	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	人麿の沓のかほりをしぬびけり藻塩やく子と旅ゆく人と（以上十五首京奈良の旅に歌へる）	
560	銀鈴9-19	七つの灯	増野翹白：増野三良	水一里野菊真白の川ぞひややさ唄小六里に名を得ぬ	
561	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	おぼろ夜やさざめく街の灯をぬけて人とならびぬ絵師がやどりへ	
562	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	ためらはじめゆるしたびぬ怖れじと二人しよれば美しくきかな	
563	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	魔が刷毛に成りし墨絵か暗黒に哀愁おひてくるふ高潮	
564	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	火の室に焼かれていなむ君恋ふと濃紅（こあか）にもえぬ花撫子の	
565	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	花街や欄にさざめく人十人（とたり）紅屋の妻に散る桜かな	
566	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	さびしさをみづからもとめよろこびて荆棘（いばら）が中に笑みし日もあり	
567	銀鈴9-19	七つの灯	立田紅翠	つれなさや流離にあひしおん方と逢はぬ五月の障子をしめぬ	
568	銀鈴9-19	七つの灯	古川雲溪	きぬぎぬや小雨に明けし四條橋黄なる露しぬ柳と人に	
569	銀鈴9-19	七つの灯	古川雲溪	夜の京や背高き人の影にそひ伏目にすぎぬ吾は山そだち	

570	銀鈴9-19	七つの灯	古川雲溪	梅雨晴れの夕雲うつる江はよろし矢がすり着たる小舟の人も	
571	銀鈴9-20	七つの灯	古川雲溪	岡の辺や鶯きくと立つ人に梅の林に朝の日さしぬ	
572	銀鈴9-20	七つの灯	古川雲溪	山の宿やはら朝風三日の月照しぬまる寝のうるはし人に	
573	銀鈴9-20	七つの灯	後藤孤星：後藤藤朗	絵行燈や七つの灯して雨の宵女どうしが芝翫をかたる	
574	銀鈴9-20	七つの灯	後藤孤星：後藤藤朗	菊うゑて秀才まねびて弟が浪速の水の興話す夜か	
575	銀鈴9-20	七つの灯	後藤孤星：後藤藤朗	春昼やさすらひ人と京びととかたへ五町の菜の宿にして	
576	銀鈴9-20	七つの灯	後藤孤星：後藤藤朗	燭の火は奈落に生ひししろがねの蛇の三匹が血を吸ふかたち	
577	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	み名やさし恋しみ歌の慕はしき雨の小窓にみ姿おもふ	
578	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	来ませしか真萩めぐれる道にして吟声ゆるうみ影も見えぬ	
579	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	世に泣かる人に泣かるをやまましぬ幸多き身と思ひし君の	
580	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	悶ふとや君導かむすべ知らばよべ西窓に涙流れじ	
581	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	夢うつつさびしう聞きぬ磯千鳥はた鐘ゆるき大海のくれ	
582	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	君の手に詩（うた）の秘扉（ひめと）は啓（ひら）かれて銀鈴なりぬあこがれの朝	
583	銀鈴9-20	七つの灯	山本明星	夢にしておん手はたびぬいだかれぬさめざれとはに夢なつかしき	
584	銀鈴9-20	七つの灯	立石洲洋	地なる恋天なる人にまゐらすと虹渡りますみ神あふぎぬ	
585	銀鈴9-20	七つの灯	立石洲洋	青あしに朝日ゆらめく水の国歌の三とせにわが恋なりぬ	
586	銀鈴9-20	七つの灯	立石洲洋	みさとしに天童天降る秋にしてやはらぎみちぬ詩（うた）のおん国	
587	銀鈴9-21	七つの灯	福田如舟	ながらふる二の世ゆ詩（うた）の才さし胸をいだきてうつむかれぬ	
588	銀鈴9-21	七つの灯	福田如舟	会ひなばと涙つつみてさすらへる二十年行脚のわれとも見ませ	
589	銀鈴9-21	七つの灯	福田如舟	夢みては翹たびぬと笑まれぬ醒むる期なくば何なげくべき	
590	銀鈴9-21	七つの灯	福田如舟	芸術の犠牲（にへ）とたびにし一人ぞとぬかづく絵師の爰む秋の朝	
591	銀鈴9-21	七つの灯	福田如舟	里わたりみな水きよき小車と音めでて行く初秋の風	
592	銀鈴9-21	七つの灯	菅原まさ勇：菅原紅雨	おく露の奇しき光明（ひかり）は消え去りぬ秋草小野に朝風にして	
593	銀鈴9-21	七つの灯	菅原まさ勇：菅原紅雨	紅葉のごと織（やさ）しき手もて心もてよる児いだける美しびとよ	
594	銀鈴9-21	七つの灯	大塚戀華	歌もなきちひさき身なり君まつとこほろぎ聞きて涙流れぬ	
595	銀鈴9-21	七つの灯	古瀬露香	千歳もかくと誓ひし身を措きて君つれなくも措きて往きにし	
596	銀鈴9-21	七つの灯	藤本晩花	みいくさに死ねや弟みづからは母を奉じて里にこもらむ	
597	銀鈴9-21	七つの灯	藤本晩花	み手にしてうるはしき子と生ひたちぬたまたま罪の名負ひにけれど	
598	銀鈴9-裏表	短歌	河野翠漱	金泥に高山かざる初日の出こぼれ桜の彩しぬ水も	原文総ルビ
599	銀鈴9-裏表	短歌	佐々木朝風	里は老いよ山は古びよ三冬の安き睡も我に適へば	原文総ルビ
600	銀鈴9-裏表	短歌	大屋桂水：大屋左一	大海や朝莊殿の響きして楽鳴り出でぬおほん光に	原文総ルビ
601	銀鈴10-1	相思	高城七星	ぐれしあの神話が中の花叢か二人に咲けり相思の春に	原文総ルビ。原文「ぐれしあ」傍点あり
602	銀鈴10-1	相思	高城七星	人ゆゑに死をもいなまぬ荒浪や瞳はもえぬ海人が子なれば	原文総ルビ
603	銀鈴10-1	相思	高城七星	夜の霧は綿のやうにも灯をおほひ船は寝入りし港町かな	原文総ルビ。原文「錦」→「綿」に修正
604	銀鈴10-1	相思	高城七星	帝王の威か春宵のさくら散る男なれどもけふが日死なむ	原文総ルビ

605	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	君見つや見ずや雪する冬の日も時じく胸にうつるみかげと	原文総ルビ
606	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	東に我をいたはる人ありと忘れて恋ふる夕もありぬ	原文総ルビ
607	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	胸いたけば昨日とすぎし青春の面かげめきし響さそひぬ	原文総ルビ
608	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	霜月や二人並びて甲板に母を語りぬ渡島（おしま）訛りと	原文総ルビ
609	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	人一人ゆゑに或日は聖手（みて）故に今日は思はぬ世と観じぬる	原文総ルビ
610	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	山の家に紅友仙の棲しぬと姉にほこりし子を恋ふ日かな	原文総ルビ
611	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	辻町の酢やと石屋の女房同士（どし）国の河内を語りて行きぬ	原文総ルビ
612	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	弟と洋琴するなる二の姉に運座も強ひぬ朧夜なれば	原文総ルビ
613	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	たびて皆我に成りぬる力さへ君を忘れぬ日追はぬ世かな	原文総ルビ
614	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	沈たきて恋人まつと我むねは天を思ふにひまなき世かな	原文総ルビ
615	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	冬晴やひがし隣につとよりて鶯ほむる人もきこえぬ	原文総ルビ
616	銀鈴10-2	霜月	蔵田二葉：蔵田信子・蔵田のぶ子	今日はしも聖顔するうき人と晒（わら）ひたまふをよろこびぬべき	原文総ルビ
617	銀鈴10-3	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	磯守の三郎	魂いづこそは遠のきてみなぞこの知らず藻の宮くし媛（め）が胸に	
618	銀鈴10-3	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	磯守の三郎	夕づつや棹さす波にあくがれて雲のあなたに城見しか君	
619	銀鈴10-3	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	磯守の三郎	追分と裸形（らぎょう）をほこる海男（いさりを）を待つ蜃（あま）の女が蘆火焚く宵	
620	銀鈴10-3	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	磯守の三郎	藻の花の華鬢にしたるやさ乙女のよき唄のせて藻荇舟来る	

621	銀鈴10-3	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	磯守の三郎	ゆめなりや花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女がうなぢ	
622	銀鈴10-3	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	磯守の三郎	楽湧きぬ真珠抱く女が波の穂の靄に捲かれて舞ふ夕かな	
623	銀鈴10-3	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	磯守の三郎	銀漣に鷗舞ふなり混沌の匂ふを君と丘に居て見る	
624	銀鈴10-3	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	磯守の三郎	春潮の海松の林に尾鰭ふりむつがたりする小さき鯛かな	
625	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	後藤孤星：後藤藤朗	吼へぬべきけはひに似たり大海の真昼現ずる怪形の雲の	
626	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	後藤孤星：後藤藤朗	潮鳴はうみ鱗族（うろくず）の軍勢が今しどよめくかちどきと見る	
627	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	後藤孤星：後藤藤朗	千鳥なく潮の遠音にひかれ来てそぞろ磯回をめぐる月の夜	
628	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	後藤孤星：後藤藤朗	貝やぐら沖の青海にわれ築きて金龍に乗る姫をむかへむ	
629	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	後藤孤星：後藤藤朗	『潮浴みて藻の花かざす海姫』と真球とる子があらはをほこる	
630	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	松本掬雨	玉舟に棹して二人夕ぐれを七彩うつる潮めぐるらむ	
631	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	松本掬雨	松かげや浜の祠にたたづみて鰯ひく女のうたききたまへ	
632	銀鈴10-4	花藻玉藻 日 本海の女王に ささげまつる	松本掬雨	薄月は島にかくれて夜の潮に白裳の神の琴の音ぞする	

633	銀鈴10-4	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	森脇桃村	砂浜や網すく蟹のかたはらに大錨あり小蟹匍ひ出ぬ	
634	銀鈴10-4	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	森脇桃村	磯の夕玉よする音と歎乃のひびきて胸によき譜かなづる	
635	銀鈴10-4	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	森脇桃村	帆のかけと鷗と蒼き海を見て藻汐やく子の幸たたへけり	
636	銀鈴10-4	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	森脇桃村	拾ひたる色よき貝に耳あててたのしき海の詩（うた）をきくかも	
637	銀鈴10-4	花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる	森脇桃村	美しき罔象（みつは）の姫の夢趁ひて白き藻がくれ白鳥の泣く	
638	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	幾萬の犠牲（にへ）の力や何になりしこの太刀はやも飽けの戦	原文総ルビ
639	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	戦は捷ちぬ祖国はかたまりぬ歌讀するになどたじろかる	原文総ルビ
640	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	たじろかる小ひさひびきの我が歌も国うたはむに楽そろひきぬ	原文総ルビ
641	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	そろひきぬ扶桑固より靈の国彼さげしめば精いや疑りぬ	原文総ルビ
642	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	いや疑りぬ鉄百鍊の堅き国さらでも久しこご自我の声	原文総ルビ
643	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	自我の声さば膝つきて戦ひて我に宿りの賊懲しめむ	原文総ルビ
644	銀鈴10-5	戦捷の国家	多田東岳	懲しめむ靈の戦士の人たりとかくてほかなる人敬まはむ	原文総ルビ
645	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	舞姫の息吹（いき）か紅屋の屋上にかぎろひ立ちぬ京の春の日	
646	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	春の海彩の布帛の透きかげに蔵人侍る水神の裳かな	
647	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	漕ぎ出づる水棹の雫手にうけて海の紺青の色疑ふや	原文「紺青を」→「紺青の」に修正（第11号誤植訂正により）
648	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	舞衣の傘して過ぎし余香と見ませ雪に咲くなる白梅のはな	
649	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	頸まく御手と白百合わななけりいぶき薫するシユレムの花野	
650	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	馬槽にふします聖子（みこ）の相形と牡丹は咲けり賤が垣根に	
651	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	うつつなく御遊に侍り天人の舞樂見のごと御手しぬ今宵	
652	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	冬の夜やひとり燃えぬるこのおもひ吹雪と舞ひて星と凍てまし	
653	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	とはに秘めん外の丹塗の玉手箱あけてかひなき御胸と知れば	
654	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	柏木や葉守りの神の白綾の被衣を思ひぬ雪のふる日に	
655	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	梅の香や包む小袖のほころびてもどきわづらふ春の七人	
656	銀鈴10-8	彩霞	牧岡馨子：牧岡けい子	われのごと薄き被衣の天乙女人まつらしのおぼろ月かな	

657	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	松本掬雨	梅の戸に天童彫ると鑿とりぬ伶人千たり靄にまかれて	
658	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	森脇桃村	白馬（あをうま）に千たりの猛者が鞭あてて水晶殿に馳すと雪降る	
659	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	森脇桃村	瑠璃盤に玉をまろばす音としもみ空にうなる凧（いかのぼり）かな	
660	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	森脇桃村	黄鳥（うぐひす）に文箱まみらせ思ふこと鸚鵡に告げむ春雨の窓	
661	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	森脇桃村	君よぶにかすむ遠山こだましぬ京へ一里の桃木立かな	
662	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	後藤孤星：後藤藤朗	樺の木に赫日さしぬ五万年太古のままの青葉をもれて	
663	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	後藤孤星：後藤藤朗	西の国の大寺九月の施餓鬼会や乞食等群す太鼓うちつつ	
664	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	後藤孤星：後藤藤朗	山の日や禰宜も交りて在はずべし紅葉焚いては酒くむ三人	
665	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	貝摺の文箱結びし桃、肩に、かつぎの女房いづちへまゐる	
666	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	そのみ袖かくれて笑まむ日もあれや破羽ゆだぬる蝶のさまして	
667	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	み瞳は金の燭とる星の子のくしき冠りの玉とし見ゆる	
668	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	かげろふや鳥羽絵に似たる京の街塔たつあたり金泥にして	
669	銀鈴10-9	陽炎（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	鶯のささなく里の椿の戸うたにやさしきみ兄をおもへ（翠激兄を訪づれて）	
670	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	高城七星	あけぼのの霧むらさきに河姫が劇をそのまま年立ちにけり	
671	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	野津さくら	平和（やはらぎ）の歌声ながら響しぬ玉の宮居のあけぼのの空	
672	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	三島溪雲	笛とれば紅植かつ散るうす月に灯ともしのみなゆらぐ宵	
673	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	久保田双蝶	あら海や白鳥むるる岩の上自由うらやむ曙にして	
674	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	久保田双蝶	薫ずるは清き思ひのささやきか梅にも似たるけだかさよ君（洲洋兄に）	

675	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	中津峰秋：佛丈	巖の神の詠とぬかづきぬ骨に泌み入る三冬の風	
676	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	中津峰秋：佛丈	狂ほしき胸のほむらの消よかしと吹雪野走（は）せぬ何物も見で	
677	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	福間如舟	やせたりなはたちひさなり朧なり詩（うた）の野をゆく影になかる	
678	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	福間如舟	きえのこる御堂のともし風すると小袖かざして泣きぬ冬の夜	
679	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	坂本笑風	栄ゆる日を君が笑ひとかしくみぬとはの生命（いのち）はこの日より得し	
680	銀鈴10-10	紅花（松江支部同人）	坂本笑風	雪の夜やしづかに寝ぬる小雀の明日しのばれぬ吾にも似ると	
681	銀鈴10-11	紅花（松江支部同人）	立石洲洋	鶯の遠ほのききて湖の南を行くに酔はれぬるかな	作者名「立田」→「立石」に修正（第11号誤植訂正により）
682	銀鈴10-11	紅花（松江支部同人）	立石洲洋	さかしらの世にもあるかな、両極の氷ひろごり天地を蔽へ	
683	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	わが窓に来てなにごとかささやぎて過ぐるがごとき夜の嵐かな	
684	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	花折りて詩心ありやをととの母こまらする物の言ひぶり	原文「花折りし」→「花折りて」に修正（第11号誤植訂正により）
685	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	うたはむに興もわきこぬこもりみやづく日にはわれと泣かるる	
686	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	水仙に霜ばれ寒き竹の椽しはぶきしつづ君訪ひましぬ	
687	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	菅笠に意宇山くれて町へ入る湖畔を二里の夕月夜かな	
688	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	散紅葉さびしき中にみめぐみを讃ふるとき杉のひとむら	
689	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	響なう魔が手のごとも冷やかに夕潮われにひたよすと見ぬ	
690	銀鈴10-12	散紅葉	立石洲洋	夕づく日こもりぬ出づる頃ほひを花のあかきがしぼみて落ちぬ	
691	銀鈴10-13	散紅葉	菅原紅雨：菅原正男	紅の雨する中を七人の女いそぎぬ白百合に似る	
692	銀鈴10-13	散紅葉	菅原紅雨：菅原正男	春風の髪に袂に夕月夜二人へ吹きぬ紅梅の花	
693	銀鈴10-13	散紅葉	古川雲溪	月夜町名妓ひさぎく踊すと人はつどひぬ京屋がまへに	作者名「溪雲」→「雲溪」に修正（第11号誤植訂正により）
694	銀鈴10-13	散紅葉	古川雲溪	しめり来る樓のつづみや春雨は柳に降りぬ灯の紅き街	作者名「溪雲」→「雲溪」に修正（第12号誤植訂正により）
695	銀鈴10-13	散紅葉	古川雲溪	雨あがり踏むはゆかしき若草途おぼろの月に君待ちいでぬ	作者名「溪雲」→「雲溪」に修正（第13号誤植訂正により）
696	銀鈴10-13	散紅葉	上羽緑葉	鬼草よ刺ある草と人は避けぬ薊と生ひしさだめ泣かるる	
697	銀鈴10-13	散紅葉	上羽緑葉	やくがごと熱き情よ、あやしまる書きます筆のよく焼けざりし	
698	銀鈴10-13	散紅葉	立田紅翠	きぬぎぬや戸に入りがてのおん君がみ髪にかざす紅桃の花	

699	銀鈴10-13	散紅葉	立田紅翠	樺多き林を思ひ人おもひ都なじまぬ蝦夷の君かな	
700	銀鈴10-13	散紅葉	立田紅翠	呪詛（のろひ）とやそれ甘んぜむ稚草にまろびて寝ねむやさし羊と	
701	銀鈴10-13	散紅葉	立田紅翠	合宿や北国人が熊狩の話よ、置きし酒冷えにけり	
702	銀鈴10-13	散紅葉	立田紅翠	ふる里よ春よ牧場よ若駒を魔が率て行くと夢見て泣きぬ	
703	銀鈴10-13	散紅葉	藤本晩花	母病むと雪する道を年若の使を具して夕急ぎぬ	
704	銀鈴10-13	散紅葉	藤本晩花	雪ふれば大地闇なる色に入り明日なき様の日と知られける	
705	銀鈴10-14	散紅葉	内田枯竹	地のけがれいとひて霧は天に去ぬあこがれ人よ涙しぬぐへ	
706	銀鈴10-14	散紅葉	内田枯竹	何者か胸にこもりぬ冥想れば嘲あらむ世とかへり見よ	
707	銀鈴10-14	散紅葉	福間如舟	しつらひて草の笛手に野に立てば雲垂り山の精降り立ちぬ	
708	銀鈴10-14	散紅葉	福間如舟	五千丈（世もやけうせよ）うつつ見る紅蓮の床にわれも身なげぬ	
709	銀鈴10-14	散紅葉	松園閑人	紅梅やよしあるさまの門構へ名刺ちひさし女文字して	
710	銀鈴10-14	散紅葉	松園閑人	我為といふにはあらぬ文使も春の夜なればなつかしきかな	
711	銀鈴10-14	散紅葉	松園閑人	灯のゆらぐに雛風召すと袖もて掩ふ三の君かな	
712	銀鈴10-14	散紅葉	大屋左一：大屋桂水	波の穂のそのまま凍りぬ白珊瑚とこしへかざる身と生れなば	
713	銀鈴10-14	散紅葉	大屋左一：大屋桂水	遠江杉の大樹の下蔭を禰宜の供して君とゆくかな	
714	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	雨する日うぐひす飼へる白揚の家のあるじに來し使かな	
715	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	菜の花の七丁にして家ありとをしへたまへる老尼の君よ	原文「尻」→「尼」に修正
716	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	春の水ぬなは摘む子のたもとより風ふきにけりあたたかうして	
717	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	つつましき御達ばかりが金屏に連歌してます春の雨かな	
718	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	夕月や馬に乗りたる美しくの少年に散る山さくら花	
719	銀鈴11-1	春曙集 1- 春	河野翠激	春風は河をわたりて里すみの尼がいほりにそよ吹きにける	
720	銀鈴11-2	春曙集 1- 春	河野翠激	われ生れて霞する日の山あそび遠八重ざくら見てありぬよし	
721	銀鈴11-2	春曙集 1- 春	河野翠激	扇つかへ白き手さしぬ舞の人ほりする歌は興へたまへな	
722	銀鈴11-2	春曙集 1- 春	河野翠激	春の雨落花する日の河やなぎ橋をこえたる美しくき人	
723	銀鈴11-2	春曙集 1- 春	河野翠激	知らぬ花あまたかぞへし野の春の日はむらさきにさすと思ひぬ	

724	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	おぼろ月まる寝ふたりの片袖にさくらふぶきす草の家かな	
725	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	ふくよかに朝髪ゆひし十六の妻とおもへば何しひぬべき	
726	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	思ひあまり文すとよれる几（つくへ）にも桃が香おくる春の風しぬ	
727	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	つつましきおんかたちなり帰るさのなみだばかりは美しくうして	
728	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	花さく日なよびやかなるすがたして流れをこえぬわが思ふひと	
729	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	ふと覚めぬ君がよびしに似てあれば扇にふける春の夜のかぜ	
730	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	水の音白き藤さくあづま屋の柱に立ちぬ物語りして	
731	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	そひぶしの黒髪めでであるほどにいねぬさうじに月のさすまで	
732	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	二十すぎし人を思ふと髪ながきをとめの泣きぬうぐひすかごに	
733	銀鈴11-2	春曙集 2一 恋	河野翠激	やよひ月ともし火もせずなよびかに袖をかさねて待ちたまひしや	
734	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	春の雨傘して添ひぬおん母に驚きくと泥（ひぢ）する路を	
735	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	『聖手（みて）おもひ海原おもひ君おもひ端座する日』と文してやりぬ	
736	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	王城のごとしと言ひぬ船びとは裏日本（うらひのもと）の吹雪をめでて	
737	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	うぐひすは二の声あげぬ北国の文せぬ人を思はせつげに	
738	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	遠鳴の潮ききつつ花まちぬ来世思はぬ人に侍りて	
739	銀鈴11-5	うぐひす	さきくさ	『宿縁の果よな能なき御方』と出雲の翁も我を相すや	
740	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	寒月や氷魂がくれ白熊の吠ゆるきくごと身うちふるひぬ	
741	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	葡萄酒あふるる胸の玉杯をみ口によせぬ酔ひみだれては	
742	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	薄化粧ほどよき紅の若むらさきみ袖屏風を吹くよ春かぜ	
743	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	彩がめの新酒あふれて精霊（たま）まきぬ脈ときみ手のふれし刹那に	
744	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	舞姫がかざす扇の小がくれに微（ほそ）き音たてぬ恋の春笛	
745	銀鈴11-5	うぐひす	牧岡馨子：牧岡けい子	氷山の崩づるるとき響して浪にゆられぬ春の大船	
746	銀鈴11-7	うつろ舟	古川三尺（舞鶴）	君とわが涙は金の甕（もたひ）して神に捧げむいと聖ければ	原文「捧げる」→「捧げむ」に修正（第12号誤植訂正により）
747	銀鈴11-7	うつろ舟	古川三尺（舞鶴）	大いなる悲しみおぼえ春の夜の桜がもとに人を怨じぬ	
748	銀鈴11-7	うつろ舟	古川三尺（舞鶴）	春の夜を愛欲あらぬ人ならば独木船（うつろぶね）してやらむと云ひぬ	

749	銀鈴11-7	うつろ舟	古川三尺（舞鶴）	夜な夜なに君とわか魂おほ天へ金蝶とこそ舞ひのぼるなれ	
750	銀鈴11-7	うつろ舟	山本明星（出雲）	みづうみの汐の香ぬるき舟の宵歌よきほどの月まちにけり	
751	銀鈴11-7	うつろ舟	山本明星（出雲）	春雨の降る日こだちに人形とまる寝してけるをとめ子ぶりよ	
752	銀鈴11-7	うつろ舟	山本明星（出雲）	春の雨女師匠にしたがひてけいこ鼓の宵更けにけり	
753	銀鈴11-7	うつろ舟	坂本笑風（松江）	むらさきの円緒雪する杜の路木履いたはし君の来ましぬ	
754	銀鈴11-8	うつろ舟	坂本笑風（松江）	いささ川流れをくみてうらぶれの絵の具とく子と我なりにけり	
755	銀鈴11-8	うつろ舟	前田木風（伯耆）	おぼろ夜を見知りし人に笑はれて君と別るる花づつみかな	
756	銀鈴11-8	うつろ舟	前田木風（伯耆）	もやめぐる町家のなかの青柳にもてあそばれぬ春の夜の月	
757	銀鈴11-8	うつろ舟	前田木風（伯耆）	椿ちる小家よろしき嵯峨の里京のひと在り春の雨して	
758	銀鈴11-8	うつろ舟	前田木風（伯耆）	うす月や梅の戸にふる淡ゆきをめでておはする都びとかな	
759	銀鈴11-8	うつろ舟	福間如舟（出雲）	みすまるの五百個（いほつ）の珠か天姫が纏くに光れる星やあけぼの	
760	銀鈴11-8	うつろ舟	福間如舟（出雲）	はれやかにいま光り射ぬ曙のみ空ゆ遠く幾矢ひきける	
761	銀鈴11-8	うつろ舟	竹林坊（邇摩）	木下蔭顔ふせ祈る『おん母の病癒えよ』のあえかさや君	
762	銀鈴11-8	うつろ舟	立石洲洋（出雲）	飛ぶ蝶の翅しあらば花に香にさては雲に酔はましものを	
763	銀鈴11-8	うつろ舟	立石洲洋（出雲）	七彩の雲おもむろに東の海より出でぬ白光（びゃっこう）おびて	
764	銀鈴11-8	うつろ舟	増野翹白（浜田）：増野三良	川ぞひやこぼれ桜に頬をうたれ駕籠にゆられてゆく春の月	
765	銀鈴11-8	うつろ舟	増野翹白（浜田）：増野三良	舞ひぬれば伽羅のかをりは紫の糸よりひきぬ京小袖かな	原文「小袖」→「小袖」に修正（第12号誤植訂正により）
766	銀鈴11-8	うつろ舟	増野翹白（浜田）：増野三良	扇とり『さらばみゆるし候へな胡蝶の舞に衣ほこらめ』	
767	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	能海紫星	街道や電燈あまた居並びてひるのやうなる夜をつくりけり	作者名「能美」→「能海」に修正
768	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	野津さくら	おごそかや階をのぼりて絵馬堂の鹿毛に世ならぬ姿かしこむ	
769	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	田中采山	春園に君がみ手とり逍遙のまぼろしほのに幾日へてけむ	
770	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	松原葉櫻	上乃木（かみのぎ）や人参畑のかたかげにあかき花咲き冬は来にけり	
771	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	長谷川涼風	提灯は人にもらひぬ凍る夜をあんまの笛のかすかなる街	
772	銀鈴11-11	勿告藻（松江支部同人）	久保田双蝶	世は終に夢のまことの身となりぬわれと泣きぬる学士もあれば	原文「われも」→「われと」に修正（第12号誤植訂正により）
773	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	清迺舎	下り汽車駅鈴ききてあけぼのをならびておはす都びとかな	

774	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	船木波秋	またさらに濃青（こあを）の空を春の野をほめては行くか優し七人（ななたり）	
775	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	三島溪雲	怪鳥鳴く迷宮めきしこの山に持住とわれは四年老いぬる	
776	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	中津峰秋：佛丈	似ずや我吹雪枯野を捕はれの鞭にえ堪へでなく小羊と	
777	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	福間如舟	賜びにしを古りし詩想（おもひ）とまた泣きぬ甦らむ期なきうたの運命（さだめ）か	
778	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	坂本笑風	むらさきの濃紅（こあか）の花に新らしき匂は添ひぬおん君が園	
779	銀鈴11-12	勿告藻（松江支部同人）	立石洲洋	奇しみ手に美（うるは）し幕は開かれぬ酔心地なる春宵の夢	
780	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	朧月の木の間をもるうす靄に天女ぶりなる裳ひきぬ君は	「以下京の舞妓に代りてはるを歌へる」
781	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	桃さかば源氏車に市松の幔幕ひいて鼓はうたむ	
782	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	宮詣で鳥居のそばに八十眉の禰宜在はしける白梅の花	
783	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	さくら狩り扇柏手を強ひられて雛たまへと興じけるかな	
784	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	清水の塔のあたりに出づると袖に灯をおひ月をまつかな	
785	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	増野翹白：増野三良	彼岸会や古代鬘結び日傘してみ寺詣での下京の町	
786	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	森脇桃村	美しき歌よむ君が朝髪に海棠ちりぬ三径の庭	
787	銀鈴11-12	内裡雛（浜田支部同人）	森脇桃村	罔象女のゑまひに似たり隠沼に奇鳥きて鳴くしのびの声は	
788	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	後藤孤星：後藤藤朗	月と帆とねむるがごとき春の海藻の香かよひぬ磯曲の人に	
789	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	後藤孤星：後藤藤朗	のりあひは若狭の人と京の人花売る嵯峨の女も交り	
790	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	河野素陽	ばん傘と蛇の目とならぶ祇園町柳に春の雨ふりけりや	
791	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	河野素陽	あらし山桜ふぶきす夕月に狩衣したる三五の人よ	

792	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	河野素陽	春の海からに通へる船頭が腕（かひな）そよふくあかつきの風	
793	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	松本掬雨	銀盤にましろき珠のまろぶごとと波を出でけり春の夜の月	
794	銀鈴11-13	内裡雛（浜田支部同人）	松本掬雨	燭かこみ花のやうなる女たち平語きく夜の春の月かな	
795	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	眼をとどし裸形の人に矢放ちて興がる世ぞと火は投げられぬ	
796	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	こよひ八つ火の雨すると高塔に叫ぶをききぬ木枯の暮	
797	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	みことばに火の室くぐる百日のわれにも来むとたちろきし日や	
798	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	聖手（みて）はなれ独り行きてはつまづきぬ血にじむ額に泣きぬ冬の日	
799	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	ききえぬも見えぬもうれしつたなきは凡夫が性と聖手（みて）あふぐかな	原文「つおなき」→「つたなき」に修正（第12号誤植訂正により）
800	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	手はなちてかへりみするにほほ笑みて物言ひたげの相形や君	
801	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	『をちかたの音たてぬ鶴』に譜あはせて御光たたふ人なつかしむ	
802	銀鈴11-14	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	大河内香よき葉稲を右に見てむつがたり行く白衣の人	
803	銀鈴11-15	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	薫風や波しぬ広田朝なぎの海と水底の宮殿（みや）おもひ出ぬ	
804	銀鈴11-15	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	紅かつぎうす光するあかつきのうばらが香して行く二人かな	
805	銀鈴11-15	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	淡紅の花降る里に朝日して光りぬ水のよきひびきかな	
806	銀鈴11-15	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	白蓮華紅きは紅の香放ちてけじめほこらぬおん国なれば	
807	銀鈴11-15	くれなゐ	大屋左一：大屋桂水	白薔薇のかほりに泌むとよりも来ば騙りいなまぬ夕月夜かな	
808	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	潮鳴りや鷗舞ふみてみなぞこの（乙）迷宮恋ひし貝にならばや（三）	
809	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	魚ねむる玉藻のうへの春の月（三）白鳥の背にうすあかりして（乙）	
810	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	椿の戸ゆらぐ鬢香のよき君に（乙）まろうど来しと告げぬうぐひす（三）	
811	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	みつしほに二人がきよき恋凝りぬ（三）真珠かがやく花珊瑚かげ（乙）	
812	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	八瀬の女も交りぬ花の大原や（乙）比枝の法師も三五の人も（三）	
813	銀鈴12-4	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	連歌すと今宵公達具鞍の（三）駒して来たり連翹の宿（乙）	
814	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	花笠や鳳凰縫ひし玉簾の（三）みくるまきしる西嵯峨の里（乙）	
815	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	えもわかぬ鳥の声しぬ木がくれに（三）君と別る夜のさびしさよ（乙）	
816	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	夜な夜なを龍女まゐりて灯すと（三）翁かたりぬ鳥のみやしる（乙）	
817	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	鳳凰の彩のしだり尾なよびかに（乙）相思の人を巻きにけるかな（三）	
818	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	あけぼのや夢のなかなる人しひて（乙）三瓶をめだぬならびて欄に（三）	
819	銀鈴12-5	みつしほ	磯守の三郎 磯の乙女	潮どよみ魔女が月よぶさびしみと（三）闇はせまりぬ頬をよせたまへ（乙）	
820	銀鈴12-5	残燭	菅原紅雨：菅原正男	うらぶれてさびし運命（さだめ）に泣く人の涙こりてや星と懸れる	
821	銀鈴12-5	残燭	菅原紅雨：菅原正男	幾度か捨てぬよき歌成らざればみ文かたしきなきぬを思へ	
822	銀鈴12-5	残燭	菅原紅雨：菅原正男	真闇にもそれと小窓の灯のごとくおぼろに胸に君を点じぬ	
823	銀鈴12-5	残燭	菅原紅雨：菅原正男	残燭や淡きおもひの春なればいかに遠ひとみ歌おこさせ	

824	銀鈴12-5	残燭	菅原紅雨：菅原正男	きぬぎぬの君やなほある見かへれば花散るかげよ立てり臈に	
825	銀鈴12-6	真木柱	千代延春園：千代延松灣	臈夜や梨地すりたる文箱もちて稚子鬢禿の柳を出づる	5頁に「本社同人千代延松灣は号を春園と改めたり」とあり
826	銀鈴12-6	真木柱	千代延春園：千代延松灣	二人が名星のみ国に花と咲けと羽に記して鳩放ちやる	
827	銀鈴12-6	真木柱	千代延春園：千代延松灣	歌筆にさびしき恋もうつさばや梅ちる道の臈夜にして	
828	銀鈴12-6	真木柱	千代延春園：千代延松灣	池にさくむらさき藤よ口籠りの恋つつましき乙女のやうに	
829	銀鈴12-6	真木柱	立石洲洋	初午や白髪のをちともなひて君は辿りぬ九段の坂を	
830	銀鈴12-6	真木柱	立石洲洋	南山は遠ほの見える紫の雲ながれけり春のあけぼの	
831	銀鈴12-6	真木柱	藤本晩花	春風は紅梅に吹き鶯のよき音に吹きぬ南よりして	
832	銀鈴12-6	真木柱	藤本晩花	永久（とこしへ）に花咲かしむる常楽の世界と知りぬ歌ある人を	
833	銀鈴12-7	真木柱	藤本晩花	白梅の香しぬみ手巻く片時よかたみに胸の馥郁たれば	
834	銀鈴12-7	真木柱	中津峰秋：峰秋	延暦の事みなふりし洛中や殿上人のくるまきしりぬ	
835	銀鈴12-7	真木柱	中津峰秋：峰秋	洛東や不夜の街々桜さくながめと云ひぬ京の子なれば	
836	銀鈴12-7	真木柱	中津峰秋：峰秋	羽子板の似顔ほめたるよき人は添乳するなり春の雨かな	
837	銀鈴12-7	真木柱	坂本笑風	春雨や海気おぼろに立ちこむる珊瑚の島の雌雄の葦鹿よ	
838	銀鈴12-7	真木柱	坂本笑風	ひんがしや桜の丘に鼓して欧州ぶりの薬師もありぬ	
839	銀鈴12-7	真木柱	竹林坊	おのづから生ひし両翅よ金蝶は花ちる里の人をめぐりぬ	
840	銀鈴12-7	真木柱	竹林坊	紅のわが血を見ませみ名思ふかた時ながら涙こぼるも（人に）	
841	銀鈴12-7	真木柱	福間如舟	千行の涙し敢てぬぐはざれかくてみづから慰め得れば	
842	銀鈴12-7	真木柱	福間如舟	蟬とけてこりたるごとき朝の湖（うみ）風して立ちぬ小さき船かな	
843	銀鈴12-7	真木柱	福間如舟	葉柳に淡煙こむる春雨やうつら病者のごとしと云ひぬ	
844	銀鈴12-7	真木柱	山本明星	だくうたせ乗ると木馬にまたがれる若き美男に散るさくらかな	
845	銀鈴12-7	真木柱	山本明星	春雨や清涼殿の幕のふき天華くだると桜ふぶきす	
846	銀鈴12-7	真木柱	山本明星	朝ぎりの中行く船によく似たる雲のうがひぬ交野の春よ	
847	銀鈴12-7	真木柱	小笹琴風	人はあらず傾むく軒の片かげにさくら咲けり日は紫に	
848	銀鈴12-7	真木柱	小笹琴風	みちしほや漕ぎいでにける三反の帆船にねむる思はれびとよ	
849	銀鈴12-8	真木柱	木村秋浦	ぬかるみや灯なきに泣かれぬるわが世もかくとおもひてはなほ	
850	銀鈴12-8	真木柱	木村秋浦	河添ひの里の三村は麦青う甦りにしかたちとおぼせ	
851	銀鈴12-8	真木柱	河野翠澱	弥生月さくらのかげに物ありと怖ぢしを思へ君が十五に	
852	銀鈴12-8	真木柱	河野翠澱	恋するや思ふやただに慕へるや刹那のみ手もうただひぬれば	
853	銀鈴12-8	真木柱	河野翠澱	ああ半夜春の雨するしめやかさ君を思ふに又なき時か	
854	銀鈴12-8	真木柱	河野翠澱	ひとたびは恨みぬさはれ一瞬によるこびみちぬ胸のそこより	
855	銀鈴12-8	真木柱	河野翠澱	敢て問ふ大悪日のわざはひのいたるも我をなほ思ひ得や	

856	銀鈴12-8	真木柱	河野翠激	ゆゑしらずただに見てける瞬間に新柳のごと芽生ひけらしも	
857	銀鈴12-8	真木柱	河野翠激	春雨に濡れてこし人いたはると束の間ながら母をそむきぬ	
858	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	森脇桃村	隠沼の花藻の中によき人のまろね姿よ春の月さす	
859	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	森脇桃村	花姫に召されて風の走るらし羅の裾長うむらさきにして	
860	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	河野素陽	春の日は今うつらし綾なして金泥なして森にかかりぬ	
861	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	河野素陽	春の月おぼろに照りて榛の木はさながら立ちぬ巨人の形	
862	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	松本掬雨	白蓮や池をめぐれる朝靄の凝りて化ぬらし水汲みをとめ	
863	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	松本掬雨	春月やうすら赤地のきぬまとひ花にまぎれて舞はむといひぬ	
864	銀鈴12-11	みだればな 1—浜田支部 詠草	増野翹白：増野三良	月姫は翡翠の玉の枝香炉に羅の袖ひきぬ九輪の塔に	
865	銀鈴12-12	みだればな 1—浜田支部 詠草	増野翹白：増野三良	摺り裳ひき●鼓（かつこ）舞ふ七乙女ならべるなかに藤原の子も	●：印字により判読不能
866	銀鈴12-12	みだればな 1—浜田支部 詠草	増野翹白：増野三良	『玉輿に召されてとつぐ雛よ』と相したまへり古井の尼の	
867	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	舟木波秋	春の日や君とたづさへ陽炎のもゆる野あまた行きかへりする	
868	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	中津峰秋：峰秋	口籠りて胸はおどりぬ頬はもえぬ懸想の君よまのあたりして	

869	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	三島溪雲	馬にして詩（うた）よむ春の大野原小鳥なく日を君は帰りぬ
870	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	福間如舟	花かざし青野を行くに水緩う春光充ちぬ天を仰ぐに
871	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	坂本笑風	朝な朝なうつむき姿なまめかし墓に詣でのうら若き人
872	銀鈴12-12	みだればな 2—松江支部 詠草	立石洲洋	おもむろに地球はなるる雲なれば怪形をなして彩はなちける
873	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	二十五年妖と嗤笑（わら）ひし他人（あだびと）をわが影と見し驚きの日や
874	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	みむねなり、蛮奴が国の醜俗（しこぶり）と祖父（ぢぢ）がほこりの鎗は焚きしが
875	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	毒杯をふくみぬ鮮紅（あけ）の血を吐きて蛇の呪詛（のろひ）を世にさけぶ夢
876	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	『憂愁』は黄葉の銀杏を七めぐり翅を伸して山こえてけり
877	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	『活動』は彩衣よそひ遠世より天馬の白（あを）に跑うたせ来し
878	銀鈴12-13	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	涙の子に乳房ふくませ大海は真夏日なかを眠りにつきぬ
879	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	『歓楽』はつばさたたみて湖のほどり立ちぬと見たり白藤（ふぢ）の散る宵
880	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	楯火たく煙の末ゆ笑みて立つうすあを衣君に似し人
881	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	『静寂』の来てははぐくむ隠れ沼の夏の夕のちさき波かな
882	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	おほ海の天路はづれゆうすべにの衣して馳せ来君が使か
883	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	七村を騎士の美少とうたはれむ一日あらばの春の日の夢
884	銀鈴12-14	うすあを衣	大屋左一：大屋桂水	いそがしう地獄をめぐる色旒のうしろにつづくわが魂のかげ
885	銀鈴13-3	紫涙	七星子：しちせい	紅の浪木すげ風する山あい之家にやどりて君をおもひぬ
886	銀鈴13-3	紫涙	七星子：しちせい	たはむれに見てもおはせな寝ねがての衣につつむは美はしき珠
887	銀鈴13-3	紫涙	七星子：しちせい	愛らしき小鳥のやうに怨言をことなく云ひぬおもはれ人は
888	銀鈴13-3	紫涙	七星子：しちせい	鮫の歯の白きが下に珊瑚とる人こそおもへ磯をし行けば
889	銀鈴13-3	紫涙	内田枯竹	菜の花は窓にせまりて三反の田より吹き来し春の風かな
890	銀鈴13-3	紫涙	内田枯竹	菜の花や川を隔つる山吹の黄なる眺を人ほめにけり
891	銀鈴13-3	紫涙	松田松葉	春の夜やおもふに君はかかる時かかる恋もわづらひまさむ
892	銀鈴13-3	紫涙	松田松葉	近江路や梅に鋸する老人にもものまなびする旅の君かな
893	銀鈴13-3	紫涙	松田松葉	灌仏やきざはしくだる七人のみけき返してふく朝の風
894	銀鈴13-3	紫涙	松田松葉	木蓮にあめ降る日なり所花寮や若き僧よぶおんけはひかな
895	銀鈴13-3	紫涙	松田松葉	おぼろ月南の椽に我よびてものいふ人をにくむと云ひぬ

896	銀鈴13-3	紫涙	藤本晩花	きぬぎぬや紅帯べる暁星とみ胸をさしてもの言ひし人	
897	銀鈴13-3	紫涙	千代延春圃：千代延松 灣	文箱解き薔薇（うばら）にそへしくれなゐの女文字見る朧夜なれば	
898	銀鈴13-3	紫涙	千代延春圃：千代延松 灣	おん神の怒りましてか雲裂けてノアの日のごと大雨するかな	
899	銀鈴13-3	紫涙	千代延春圃：千代延松 灣	春の海安きねむりの稚児（うましこ）に乳をそへたまふのどけさに似る	
900	銀鈴13-3	紫涙	竹林坊	女云ひぬ心いたらぬ身なればに忘れたまひしなつかしき君	
901	銀鈴13-4	紫涙	竹林坊	つよき事言ひて分れし一瞬の昔をなけるよはき身なれば	
902	銀鈴13-4	紫涙	竹林坊	象の背に笛もてあそぶ南洋の椰子の木蔭にまた君想ふ	
903	銀鈴13-4	紫涙	菅原まさを：菅原紅雨	眼と眼其瞬間にして我が胸は花の大なる一輪を得ぬ	
904	銀鈴13-4	紫涙	菅原まさを：菅原紅雨	おん胸の血潮到るやみ文とれば刹那わが手にせまるおののき	
905	銀鈴13-4	紫涙	河野翠激	夏花の中に在せりあめつちに二なきかたちと相愛びとは（東岳の君にとて）	
906	銀鈴13-4	紫涙	大屋左一：大屋桂水	わがために鼓は徹はれて先立つと泣きし日繰りぬ初夏の風	
907	銀鈴13-4	紫涙	大屋左一：大屋桂水	道守は牢屋やぶりの相ありと通行（とほ）る否みぬ夕時雨かな	
908	銀鈴13-4	紫涙	大屋左一：大屋桂水	わが胸に萎まぬ華の佛を夢のごと見ぬ若木立かな	
909	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	天上の宮居に侍り篋篋（くご）ききて夢みる心地桜日和は	
910	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	胸の扉は紫摩黄金の彩羽もて彩らむとも惑ひそめきや	
911	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	永却に人は思はじ南洋のパナナの香する島にまるびて	
912	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	きりぎしや尖塔たてて大濤（おほなみ）に鷗むると君も招ぜむ	
913	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	現なく花守る屋よ翹生ひて思ひの弓に君を射てまし	
914	銀鈴13-6	ひつじ草	ましの翹白：増野翹 白・増野三良	隠り沼の羊草なり白き花かほるままにも思ひもえける	
915	銀鈴13-7	白鳥 1-松 江支部詠草	福間如舟	並み懸る星と船なる灯と照りぬ静かなる夜の天地にして	
916	銀鈴13-7	白鳥 1-松 江支部詠草	福間如舟	春に似し人ゆゑ遠き夕雲の空をも思ひ日もなつかしき	
917	銀鈴13-7	白鳥 1-松 江支部詠草	三島溪雲	相見てはいふに言はぬにすべしらずあやしきままに恋成りにけり	
918	銀鈴13-7	白鳥 1-松 江支部詠草	舟木波秋	瑠璃鳥の翼と春も日和しぬ霞へだつる遠山ながら	

919	銀鈴13-7	白鳥 1—松江支部詠草	中津峰秋：佛丈	たとふれば真珠に似たるおん眸とこわか草のやさしくもあれ	
920	銀鈴13-7	白鳥 1—松江支部詠草	坂本笑風	恨みむに君には春の若ければおのづからにも身も責めてける	
921	銀鈴13-8	白鳥 1—松江支部詠草	立石洲洋	春の日や君もみませるおんうたげ蛮奴が国もさながらぞよき	
922	銀鈴13-8	白鳥 1—松江支部詠草	立石洲洋	やごとなの黙示に胸の開けては樂もほがらに鳴り出でぬべき	
923	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	河野素陽	夢に見る海のさましてうす霞せまるをめでぬ君とならびて	
924	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	河野素陽	紺青の光みなぎる蒼穹（おほぞら）に宝塔うかぶわがおもひかな	原文「草冠+穹」→「穹」で入力
925	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	後藤孤星：後藤藤朗	春の山かすみよぎりぬさながらに白狐率てゆく魔の媼かな	
926	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	後藤孤星：後藤藤朗	のたまひぬ「誓たがへじ醜国の怪鳥に胸はよし食まるとも。」	
927	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	森脇桃村	花あかり木かげを洩れて白玉の宮に侍すると酔ひぬおぼろ夜	
928	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	森脇桃村	君が家はうす紫に躑躅さく小山を右に白樺のもと	
929	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	森脇桃村	雨する日玉琴つくる連翹は黄金（こがね）の弦にのせぬ春の譜	
930	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	松本掬雨	絵すだれに白光おびて月さしぬよりて立たせる君が黒髪	
931	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	松本掬雨	白裳して若葉のかげに月めづる天女ぶりなり白藤の花	
932	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	増野翹白：増野三良	うつくしき詩人よ君よ琅玕の宮に侍りて湖譚ふとや	
933	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	増野翹白：増野三良	初夏風きよらにすきて濃き藍の湖に棹さす君おもふかな	
934	銀鈴13-8	白鳥 2—浜田支部詠草	増野翹白：増野三良	たたへます湖の透宮白鳥のいねむる春の夜をこひしむ	
935	銀鈴13-11	落椿	牧岡けい子：牧岡馨子	ほととぎすあざみ一声西さりぬ待つ人おそき短か夜のまど	
936	銀鈴13-11	落椿	牧岡けい子：牧岡馨子	ほととぎす春のうれしき一夜にさびし緋のきぬ裂くひびきして	
937	銀鈴13-11	落椿	牧岡けい子：牧岡馨子	去年も聞き今宵も聞かむほととぎすぬれて君待つ卯の花かげに	
938	銀鈴13-11	落椿	牧岡けい子：牧岡馨子	夕闇を落つる椿のさびしらに審判（さばき）の御座も思ひて泣きぬ	

939	銀鈴13-11	落椿	牧岡けい子：牧岡馨子	見まさずや君恋ふ胸にひしひしと鬼のやうなる人のせめぐを	
940	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	忽然とわれあり切に恋ひぬれば魂は東に紅（にじ）の環なして	原文総ルビ
941	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	あこがれは羅馬の花を一めぐり流離の国に霜柱しぬ	原文総ルビ
942	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	楠木の薰り吹きこす南風に吹かれ思ひぬ君が在る里	原文総ルビ
943	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	乳児（ちご）だくにふさはぬほどのわが妻が質素（ぢみ）を好みの六月の風	原文総ルビ
944	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	あやうげに露の玉ゆる甘諸畑を心急ぎぬ物怖ぢつつも	原文総ルビ
945	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	大巷魔の横行し乱調の楽なりどよむ君見しきはに	原文総ルビ
946	銀鈴14-1	懸想の巻	牧岡けい子：牧岡馨子	発電のふしぎに怖ぢし土蚕とも申せ挫折（おれ）し子故知らざれば	原文総ルビ
947	銀鈴14-5	そよ風	森脇桃村	み瞳は天降りし華星（ほし）の煌めきか森の古沼に蓴菜（ぬなは）摘む君	
948	銀鈴14-5	そよ風	森脇桃村	此二人笠篋とる神の傍らに玉の環なせる花と咲きなば	
949	銀鈴14-5	そよ風	森脇桃村	初夏や藻の花かほる水棲に青簾して風めでたまへ	
950	銀鈴14-5	そよ風	小川董月	藻のかほり月の白きに帆立貝遠き島辺へ我等のせゆけ	
951	銀鈴14-5	そよ風	小川董月	野の朝千華の露を奇し玉と愛つつまるべ霽こむる日に	
952	銀鈴14-6	そよ風	後藤孤星：後藤藤朗	み仏の生れます朝と菩提樹の白花さくに似たる吾が胸	
953	銀鈴14-6	そよ風	後藤孤星：後藤藤朗	あさあげや蓮池をめぐる伶人のみ髪（ぐし）より吹く初夏の風	
954	銀鈴14-6	そよ風	後藤孤星：後藤藤朗	人と行く小路の宵や紫の藤さく家に薄あかりして	
955	銀鈴14-6	そよ風	亀山暁花	初夏や蛩狩せしふる郷の昔をおもひ君おもふかな	
956	銀鈴14-6	そよ風	磯守りの三郎	出雲不二聖りさびたる朝雲に天馬走るとあこがれ給へ（右碧雲湖辺の友天籟恭君に）	
957	銀鈴14-6	そよ風	磯守りの三郎	笛すさぶ牧童（わらべ）は君よ夏花のあかきは我と野に笑みし人	
958	銀鈴14-6	そよ風	魔の子黒百合	野にまろびわがふく笛のすずしさよ翅もつ子は花に寝に来よ	
959	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	西方の楽土おもへる仏弟子もひとつの罪はいなみたまはじ。	原文総ルビ
960	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	頬白は鳴かぬ日もあれ山あひの小野のつかさに君おもふかな。	原文総ルビ
961	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	夏の月夜殿のゆめのいつかたに待ち得しものかああほととぎす	原文総ルビ
962	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	ゆるらかに是の音しのびに水にこえて白けし吹きぬはつ夏のかぜ。	原文総ルビ
963	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	まよはしか妙香くゆりあけぼのの夢の気うつらせまるとおもふ。	原文総ルビ
964	銀鈴14-7	豊旗雲	河野翠漱	やみがたき法悦かはた王冠のさづけか瞬時なみだながれぬ。	原文総ルビ
965	銀鈴14-9	簾障子	松田まつば：松田松葉	連翅や瀟洒めきたる八畳にかなりや飼へり末のいもうと	
966	銀鈴14-9	簾障子	松田まつば：松田松葉	かたときの夢とおもふと君いひぬ別る夏の雨の或る日に	
967	銀鈴14-9	簾障子	松田まつば：松田松葉	隣室のおもはれ人は午すぎをかたりみ給ふ五月雨の宿	
968	銀鈴14-9	簾障子	松田まつば：松田松葉	ゆゑしらず菖蒲きるにも力なき病氣（わづらひ）すなり近江の国に	
969	銀鈴14-9	簾障子	一笑子：三明一笑？	ほととぎす住きにし人の面影を扇に思ふ欄の刹那よ	
970	銀鈴14-9	簾障子	藤本晩花	さみだれのしとしと迫る窓にして君をむかへぬあわたたくも	
971	銀鈴14-9	簾障子	木村秋浦	ひたよする光の波のあふるべき期もあるらむと闇も否まじ	
972	銀鈴14-9	簾障子	木村秋浦	夕靄は山瓶をまきぬ野をまきぬ吾ぞとけ行きて靄と君まけ	

973	銀鈴14-9	簾障子	千代延春園：千代延松灣	春昔忘れな草と胸にして生ひぬそれより培ひければ	
974	銀鈴14-9	簾障子	千代延春園：千代延松灣	夕鐘や松葉牡丹の細道を雨乞つづく真憂（まなつ）の寺へ	
975	銀鈴14-9	簾障子	千代延春園：千代延松灣	君が魂我魂合ひて西方によるや水脈曳く真闇の星の	
976	銀鈴14-9	簾障子	菅原紅雨：菅原正男	淡靄は見返る君がみ姿をこめぬ相思のをはりはかくと	
977	銀鈴14-9	簾障子	菅原紅雨：菅原正男	雨そそぐ薔薇（そうび）よ君がみ手とりて思ふと云ひし刹那のごとく	
978	銀鈴14-10	簾障子	菅原紅雨：菅原正男	険路なり幸なき我ら連れたちて歩むとすればまたも躓く	
979	銀鈴14-12		翠激：河野翠激	つばくらはも花ちる里を恋ひぬるや高萱そよと伸羽（のしば）みなみへ	
980	銀鈴15-1	葉月集	奥原碧雲	牡丹ちる夕有髪 <small>の</small> 雛僧にあやにく誦せしうたぬすまれし	原文総ルビ
981	銀鈴15-1	葉月集	奥原碧雲	くれなゐに緋にむらさきに恋に名に色ふさはしき温室（むろ）の夏花	原文総ルビ
982	銀鈴15-1	葉月集	奥原碧雲	風清し欄による子の水色の紹蚊帳の裾にふさはしの夢	原文総ルビ
983	銀鈴15-1	葉月集	奥原碧雲	蚊やり火に人なつかしき宵やみをゆきすぎがたきゆふ顔の宿	原文総ルビ
984	銀鈴15-2	葉月集	奥原碧雲	うるはしき七色虹のかげのごと人なつかしきあけぼのの空	原文総ルビ
985	銀鈴15-2	葉月集	三明一笑：一笑子？	白百合をひとえだるとときりぎりしに日すがらあさりゐたまふ君よ	原文総ルビ
986	銀鈴15-2	葉月集	三明一笑：一笑子？	待ちわぶる子ありとゆふべひんがしに文してやりぬ堪へがたければ	原文総ルビ
987	銀鈴15-2	葉月集	松田松葉	おもふ夜はさびしけれども窓おしぬ萩ふく風のなつかしくして	原文総ルビ
988	銀鈴15-2	葉月集	松田松葉	ききなれぬ人の声して夜の街をあまた行くなり事あるらしく	原文総ルビ
989	銀鈴15-2	葉月集	松田松葉	初秋風、み堂につづく数人のうすら赤地の五條袈裟ふく	原文総ルビ
990	銀鈴15-3	葉月集	千代延春園：千代延松灣	青葉若葉海のいろせる森の上に白帆のごとく二十日月（はつかづき）しぬ	原文総ルビ
991	銀鈴15-3	葉月集	千代延春園：千代延松灣	さびしさに我たたずめばほととぎすああ鳴き過ぎぬ大野の果を	原文総ルビ
992	銀鈴15-3	葉月集	千代延春園：千代延松灣	夕月夜ぶだうの露のこぼるるや君は小窓によりておはさむ	原文総ルビ
993	銀鈴15-3	葉月集	千代延春園：千代延松灣	六月の強雨のあとの朝晴の日は薄黄しぬ菖蒲さく池	原文総ルビ
994	銀鈴15-3	葉月集	福田紫雲	おほ夏や湖の最中に白帆しぬ君はかいなを手枕にして	原文総ルビ
995	銀鈴15-3	葉月集	福田紫雲	夏の月高樓てらす朝あけを蚊帳してききぬ初ほととぎす	原文総ルビ
996	銀鈴15-4	葉月集	河野素陽	雲の峯破船のさまし天上に立ちぬ風なき八月の昼	原文総ルビ
997	銀鈴15-4	葉月集	河野素陽	朝かぜは青田そよがし裏町をすぎて来りぬわが寝る蚊帳に	原文総ルビ
998	銀鈴15-4	葉月集	森脇桃村	きりぎりす媛がやさしき恋歌を金の籠（こ）に入れたまひしかとも	原文総ルビ
999	銀鈴15-4	葉月集	森脇桃村	しめやかに蚊遣くゆれるあづま屋にみづ色ぎぬの人とかたりぬ	原文総ルビ
1000	銀鈴15-4	葉月集	河野翠激	ああ十歩前に君見ぬ天くだけ地（つち）ながると思ふばかりに	原文総ルビ
1001	銀鈴15-4	葉月集	河野翠激	君が家君が花摘む野のあたり白くさびしくさす秋の月	原文総ルビ

1002	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	君を見ぬとある夜の街植木屋の灯かげに立ちて居たまひし哉	原文総ルビ
1003	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	名香はわが身よりする思ひ出の花うつくしく咲ける刹那に	原文総ルビ
1004	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	君おもふうれしきときよほととぎすしら蓮舟に靄ながれけり	原文総ルビ
1005	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	竹結ひてほどよき構へみなな屋の萩さく庭に君を見しかな	原文総ルビ
1006	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	こころいま野のざれ骨を秋雨のうてるがごとし思ひすてつる	原文総ルビ
1007	銀鈴15-5	葉月集	河野翠激	大牛のほゆるに似たり思ひ出の日よ悪性の胸鳴りのして	原文総ルビ
1008	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	陰陽師つづれ袖して古寺の楼門に立つ秋の風かな	原文総ルビ
1009	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	濡髪や玉藻花藻の海底にうろくづめでてたすあえかさ	原文総ルビ
1010	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	物乞のさすらひ人と肩ならべ秋の野行くに月さす夕	原文総ルビ
1011	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	朝の秋うろこ雲はる大空のやや破れけり人のかたちに	原文総ルビ
1012	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	遠世にも同じ涙の君あらば昨日を泣くとなげかぬ我も	原文総ルビ
1013	銀鈴16-4	ぬれ髪	福田紫雲	冬枯の空に似し身とひとり居て泣きぬ去年なる君よぶ日かな	原文総ルビ
1014	銀鈴16-4	霧	松田きよし	花桐や網干す家の棟をいで夕月さしぬさすらひの日よ	
1015	銀鈴16-4	霧	松田きよし	神門（かんど）より荒き男きたるくれ方を据風呂たてぬ白けしの花	
1016	銀鈴16-4	霧	松田きよし	鶏頭に秋の雨ふる山寺の法音ゆるにけふも日暮れぬ	
1017	銀鈴16-4	霧	松田きよし	君が家夕雨ごとにきりぎりす蚊帳に来鳴くと忘れぬ日かな	
1018	銀鈴16-4	霧	松田きよし	叔母の家は町をはなれし白壁の蔵に霧する河岸にして	
1019	銀鈴16-5	秋の雨	松本掬雨 花守乙女	天上の宮居に宵の灯ともすと（掬）立つや白樺靄する丘に（乙）	
1020	銀鈴16-5	秋の雨	松本掬雨 花守乙女	秋の雨縹の野路の桔梗は（掬）紫玉を布くとひたふしぬるも（乙）	
1021	銀鈴16-5	秋の雨	松本掬雨 花守乙女	瑠璃鏡のごとしと云ひぬもろ人は（掬）百合さく山の泉をめでて（乙）	
1022	銀鈴16-5	秋の雨	松本掬雨 花守乙女	十日月宵寝のひとの夢問ふて（掬）飛鳥のさまに吹きぬゆふかぜ（乙）	
1023	銀鈴16-6	愁思	菅原まさを：菅原紅雨	いつはりとうたがひいだく乱心のうちはかなげの子を棄てたまへ	
1024	銀鈴16-6	愁思	菅原まさを：菅原紅雨	歓楽は春の夜のごとさざめきぬつづく愁ひの日を知らざれば	
1025	銀鈴16-6	愁思	菅原まさを：菅原紅雨	黙然と君は対しぬもの言はぬ敗者の胸の美しくきかな	
1026	銀鈴16-7	愁思	菅原まさを：菅原紅雨	真夏日なか大焦熱の大苦難せまるがごとしああ君おもふ	
1027	銀鈴16-7	愁思	菅原まさを：菅原紅雨	かかる日のありと思せと文したる昨日をおもふ不覚の恋よ	
1028	銀鈴16-10	蓼花	森脇桃村	ともすれば大涛襲ふ船の日も丹の頬して居し若さを思ふ	
1029	銀鈴16-10	蓼花	森脇桃村	ほの見しは夕靄せまる層楼に海見ておはす黒髪の人	
1030	銀鈴16-10	蓼花	森脇桃村	秋の雨小さき音してそば降りぬ恋物語するかのやうに	
1031	銀鈴16-10	蓼花	森脇桃村	小さき河蓼の花散る野の中を流れぬたへずむつがたりして	
1032	銀鈴16-12	百重波（しのめ会詩稿）	小村香雨	海の風吹き入る楼の蚊帳越しに寝ながら仰ぐ夏の夜の月（以下稲佐にてうたへるうちに）	
1033	銀鈴16-12	百重波（しのめ会詩稿）	小村香雨	ひく男波よする女波と抱き合ふやひひく恋の譜ねたしと聴く夜	
1034	銀鈴16-12	百重波（しのめ会詩稿）	小村香雨	青潮のめぐる小島に苦屋してふたりし棲めは鷗もより来	

1035	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	三島溪雲	よき人は八月かほる南風に白帆してまつよろこびの日を	
1036	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	三島溪雲	いつはりかあはれなる日をすがりては悪（にく）まぬ人をうらみて泣きぬ	
1037	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	三島溪雲	かかる夜は忘れむものの堪がてにむねこそ裂かめ人をし恋へば	
1038	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	梅原梅窓	百重波鳥目（ひがめ）眇目の世にあきし霊をみちびけ寥しの国へ	
1039	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	梅原梅窓	雲湧いて人の心の垢膩（くに）すべてすすぐとばかり夏の大雨	
1040	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	梅原梅窓	草籠を追ひて花請ふ姫君が抜くをほほゑむ子が聖思ひ	
1041	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	福田紫雲	初秋や五挺櫓たてて黄金の海をあさりぬ龍女も来よと	
1042	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	福田紫雲	耳かたむけて虫の声とふ幼なめく君に三五の月ほのてりぬ	
1043	銀鈴16-12	百重波（しの のめ会詩稿）	福田紫雲	秋の夜や瞽者と手をひくそひ人のうたあはれみし浜のまちな	
1044	銀鈴17-1	伊豆に遊ぶ	平野萬里	山高く四方を閉ざし水の音かすかにきこゆ雲のぼる朝。	
1045	銀鈴17-1	伊豆に遊ぶ	平野萬里	山にして老ほほけたる水車、かたりことりと日を暮し居る。	
1046	銀鈴17-1	伊豆に遊ぶ	平野萬里	ほととぎす、汝（し）が声に似る短命の子を友として来しや、山へは。	
1047	銀鈴17-1	伊豆に遊ぶ	平野萬里	風落ちし湖の上、さかしまに天城うつりて動かぬ真昼。	
1048	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野翠澁	夏の雨南の海の瑠璃盤を馳せぬ巨人の一万騎かな	
1049	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野翠澁	ゆらゆらの短艇（はしけ）にのりて大海を君と流れぬ夏の夜霧に	
1050	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野翠澁	投錨す賊船五艘夏の月椰子より高さ無人の島に	
1051	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野翠澁	ほととぎす聞きぬ真闇の大海に下りし天のすくひの声と	
1052	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野翠澁	夏の海いとおごそかにたそがれぬ尊きものをつつめるごとく	
1053	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	三明千鳥（千鳥・千鳥 子）	靄はれて藻の花かをる初夏の大海を吹く朝の風かな	
1054	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	西岡荻雨	藍ときしばかりにはれぬ夏の海白鳥はしる南の方へ	

1055	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野素陽	龍の宮すは大事あり遠巻けと大雷雨する八月の海	
1056	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	河野素陽	君とわれいくたび聞きぬほととぎす海の方より風ふく夕	
1057	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	増野翹白：増野三良	夕づく日はつ夏の海揺曳す君が手による刹那のころ	
1058	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	増野翹白：増野三良	さくら貝蝶貝となり濃き藍の海にし君と二人住まばや	
1059	銀鈴17-3	夏の海 平野 萬里選	増野翹白：増野三良	夕夕や追分ほこる海人の子を持つらし磯に女が焚く蘆火	
1060	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	増野翹白：増野三良	雛菊の花こそ咲けれ筒井づつ振分髪の君おもふかな	
1061	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	増野翹白：増野三良	秋の朝浄土のここちわだつみは法音たてぬ寂光のして	
1062	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	後藤孤星：後藤藤朗	信濃路をまひるいそぎぬ商人と猿曳く人のざれ言を聴き	
1063	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	後藤孤星：後藤藤朗	まどへるやわづらひぬるや口籠（くごもり）の面たれてあう秋の野の花	
1064	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	後藤孤星：後藤藤朗	雨の日の雲にほの見る紺青の空か君見ぬ人ごみにして	
1065	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	後藤孤星：後藤藤朗	悄然と秋の日くれぬ大空は野に迷ふ子の面にも似て	
1066	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	後藤孤星：後藤藤朗	「時ぞ来ぬ汝等甲へ」と森林の杉に今宣る木枯のかぜ	
1067	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	松本掬雨	秋の風野に吹く音を八乙女の摺裳曳くやと思ひけるかな	
1068	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	小川堇月	夕月夜沙魚（いさな）とる子が苦舟に酒宴すらしだみごゑのして	
1069	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	いと妙に楽鳴り千花かほるかな尺をへだてず君と語れば	
1070	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	紅粥（ひさ）ぐ媼が家の屋上に灰色雲し冬の日暮れぬ	
1071	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	君見ねば淋びしき心地憔悴の翁冥途をたどるとやうに	
1072	銀鈴17-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	悪性の魔が雄たけびか刻々にこころ怖ぢしむこがらしの風	
1073	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	木村秋浦	また思ふ我が世も人の世もかくは泣かるる宵ぞ灯をたまへ君	
1074	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	木村秋浦	此ふたどせ憂愁ひしひし小やみなう我にせまりぬ怪形の相よ	
1075	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	木村秋浦	あけぼのや瑞雲のぼり七彩の虹をつくりぬ君おもふ時	
1076	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	森脇桃村	癪を病むしら髪ほけたる老人のよろめき思ふ街の夜の笛	作者名「脇村」→「森脇」に修正
1077	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	森脇桃村	乞食（かたる）らが群する寺の大門に銀杏散るなり黄ばむ秋の日	作者名「脇村」→「森脇」に修正
1078	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	森脇桃村	凧や病みし衰へし白髪のお翁いまはの呻吟（うめぎ）のやうに	作者名「脇村」→「森脇」に修正
1079	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	松田松葉	朝の月屋も虫なく君が家の城壁めける木立を思ふ	
1080	銀鈴17-7	銀鈴社詩稿	松田松葉	山の寺水をいでたるかたちして芙蓉はさきぬありあけの月	
1081	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	松田松葉	ゐなか家は庭につづける畑なかに染物はせり秋のかぜふく	
1082	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	山本潜龍	夜もすがら悶えぬ果ては世に一の愛（めで）ぴとをしもうらみぬるかな	
1083	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	山本潜龍	何の魔ぞ虎毛の駒に鞭うちて襲ふと見たる木枯のかぜ	
1084	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	河野翠激	君恋ふる夜ごろいくたぶ残忍のすがたを胸に思ひうかべし	
1085	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	河野翠激	ああされば野往く枯瘦の影と見よあやしきまでに忘れ得がたし	

1086	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	河野翠激	なにゆゑにとがめたまふや人ふたりひとしきやうにうつくしむ身を	
1087	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	河野翠激	秋のかぜわが浅ましき輕薄のこころむちうち遠鳴りゆくよ	
1088	銀鈴17-8	銀鈴社詩稿	河野翠激	このこころむちうちたまふ先人にとすればそむき走りけるかな	
1089	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	疑ひの雲霧はらひわが鏡君をうつしぬいとなごやかに	
1090	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	心さびし君を見ぬれどにこやかに語るといへどおもひ飽かずは	
1091	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	君見ねば荒涼（すさ）まじさはれ対つ座は俯居（うつみ）しらぬ頬丹摺りながら	
1092	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	影のごとこの身まとひて黄泉の谷誘（ひ）くかと恐れうき人おもふ	
1093	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	両頭の蛇のさまして愛慾と恐怖とめぐる胸の大野は	
1094	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	秋の雨しづく蛇の目破れ傘に肩身しばめて暗き街入る	
1095	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	香のつよき花に埋れて溝渠は二人の間（あい）に横はりぬる	
1096	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	わがおもひ胸にどよみぬいつの日か道をしたまふとざし開きて	
1097	銀鈴18-5	銀鈴社詩稿	牧岡けい子：牧岡馨子	み目やさし心うへよき人をゆゑ我れと悪夢に病みもこそすれ	
1098	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	後藤藤朗：後藤孤星	白斑の牛どもあまた群れゆくと雪消の遠（をち）の山見る日かな	
1099	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	後藤藤朗：後藤孤星	大象の力もつ子もよわよわと曳かれゆくなりむつまじき日よ	
1100	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	河野素陽	枕して聴きぬ遠鳴る潮の音としたしきさまの千鳥のこゑと	
1101	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	河野素陽	冬の月夢よりさめて母恋ひぬこころ凍れる夜にもあるかな	
1102	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	森脇桃村	秋風は裸公孫樹（いてふ）の二の枝と町の地蔵のみ袈裟吹くかな	
1103	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	森脇桃村	北の海すごき音して冰山のくづるごとし刹那のこころ	
1104	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	森脇桃村	「われ等いと剛の者よ」と冬の野の蕭殺に立つ雄々し松杉	
1105	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	西岡秋雨	うちつけに云ひもかねたる夕よりうき髪いたくみだれけるかな	
1106	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	西岡秋雨	花ちる日うす紫の霞より君が前髪ほの見ゆるかな	
1107	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	木村秋浦	世な咀ふ無信の人と光得し祈願の人とわが胸に来て	
1108	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	木村秋浦	ものかげの暗きに怖ぢし心地して初めて君を恋ひし日おもふ	
1109	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	美しくしき罪のむくひか百萬の悪鬼逼りて喰むよとおもふ	
1110	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	ああ君よつれなし人とあくまでに憎めいささか罪うすらがむ	
1111	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	危うかりきかかる陰阻をともしひて迪（たど）らむとしぬ瞬時の思ひ	
1112	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	薄倅の身を泣きまさむ専念にわが冷酷をむちうちたまへ	
1113	銀鈴18-10	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	木枯はみ胸にふきぬわがこころ冷えよとばかり悲しきゆふべ	
1114	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	山本潜龍	わがうれひ君がみなげき音にたててよよとし泣きぬ冬の夜の灯は	
1115	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	山本潜龍	ともすればおもかげ夢む日をへだて忘れし恋の君と思へど	
1116	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	山本潜龍	富士のみね王者のさまに光明の真なかに立ちぬ初日する時	
1117	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	増野翹白：増野三良	険峻の谷をへだてて白蘭の花こそかをれなつかしきかな	
1118	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	小川董月	まつ宵は風のおとにもなつかしき君が来べしとおもひつつ寝ぬ	
1119	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	小川董月	野も山も芥のなかの朽舟もこがね色して初日のぼりぬ	
1120	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	中村秋泉	檜林霜おく道を小急ぎて往きぬ後朝の二十二夜月	

1121	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	松田月浪	春の磯木立めぐれる君が家に銀の雨する昼恋しけれ	
1122	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	松田月浪	時雨する大森林のなかにしてかすかに磬（かね）の音きこゆなり	
1123	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	松本掬雨	君に似る菊おほく植へおんこ糸を忍ぶと籠にすずむし飼ひぬ	
1124	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	松本掬雨	宵月は青地の綾に白ぎくを花紋に染めしかたちして居ぬ	
1125	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	磯の少女：磯の乙女	あな不覚恋の甘酒（みき）としいつはりの濁酒に酔ひて永遠（とは）を病みふす	
1126	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	河野翠激	この日また遠びと思ひ痛ましきわが恋ごころ涙ながれぬ	
1127	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	河野翠激	七尺のながきみ髪（ぐし）よ夕月は俯居の君が頬にさしにけれ	
1128	銀鈴18-15	銀鈴社詩稿	河野翠激	物おもふころよさびしき閨の月落髪ひろひ夜あけぬるかな（女に代りて）	
1129	銀鈴18-22	青玉	梅原梅窓	黄金扉にみ輦入るとうつくしき天馳使鳥わたるなれ	
1130	銀鈴18-22	青玉	加田白梅	夕しぐれおち葉にさせる落日のなかにおはするさびしき人よ	
1131	銀鈴18-22	青玉	三島溪雲	哀愁の涙ぞおつるおもかげはかかる時にもほのに影すれ	
1132	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	小川石櫻	みづ色の衣は召さね高どのに月見る人をうつくしむかな	原文総ルビ
1133	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	小川石櫻	天つ宮春たつらしも白き花間なくとぶなれ師走の空に	原文総ルビ
1134	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	翹白：増野翹白	せせらぎの水にしあれど青海の君がみ胸をつらぬきぬべき	原文総ルビ、「め胸」→「み胸」に修正（書入により）
1135	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	後藤藤朗：後藤孤星	白臘の清き衣して一やうに並みつらなりぬ冬の万象（ものみな）	原文総ルビ
1136	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	須崎隆一	竹多き里の蒿屋の小障子に灯火さして梅かをるかな	原文総ルビ
1137	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	春子	君に燃ゆつけぎの船の帆に書きてかなしき恋を流し遣りなば	原文総ルビ
1138	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	春子	おはぶれに昔の人のよびも見ぬうち羞しきみけしきなれど	原文総ルビ
1139	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	森脇桃村	夕月や梨の花ちる野の家に灯火もせず君待ちて居ぬ	原文総ルビ
1140	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	森脇桃村	おち方に鐘なるごときひびきて破馬車過ぎぬさびしき街を	原文総ルビ
1141	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	和久南江	こころいま君を思ひぬ火吐く山そらに勢（きほひ）の猛なるごとく	原文総ルビ
1142	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	吹雪する夜なりわかれし日を思ひてつめたき床に涙するかな	原文総ルビ
1143	銀鈴19-1	銀鈴社詩稿	菅原紅雨：菅原正男	冬の園わが蕭條の胸に似しさびしき態を写すと見ゆれ	原文総ルビ
1144	銀鈴19-5		河野翠激	このいのち君と語る日つゆばかり惜しとおもはず信じたまふや	
1145	銀鈴19-5		菅原紅雨：菅原正男	ほととぎすたかなしき音になきぬ千とせへだつる君をおもへと	原文「くだつる」→「へだつる」に修正（書入により）
1146	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	あきたらず思ふと云いて反逆の雑兵あまた立ちぬ我が胸	原文総ルビ
1147	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	すでに君を恋ふるといへどとある日の清き心にまた人を見ぬ	原文総ルビ
1148	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	うぐいすは海のあなたのあげばのの国に啼くなり我等さびしき	原文総ルビ
1149	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	戸は霧す君がこがねのさし櫛ににほへる髪のうちつくしきかな	原文総ルビ
1150	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	春の雨女つくれるいにしへの日記よみながらうたた寝をしぬ	原文総ルビ
1151	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	君おもふ長き年月腐（あざ）れたるわが残骸に降れよ春雨	原文総ルビ
1152	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	来る日も髪に香たき我が君は天女のごとく在りぬかたへに	原文総ルビ
1153	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	忘るるにあらず束の間懈怠（けたい）なしされどみづから君を疑ふ	原文総ルビ

1154	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	うちとけて物は云ひませ何となくあかずぞ思ふ春雨の家	原文総ルビ
1155	銀鈴20-1	銀鈴社詩稿	河野翠激	早や一步まへに何者かちどきをあげてせまりぬいかにかはせむ	原文総ルビ
1156	銀鈴20-2	銀鈴社詩稿	三島溪雲	大野分破鐘のごとき乱調に終日吹きぬ片側街を	
1157	銀鈴20-2	銀鈴社詩稿	八重垣郷人	くろ髪はあえかにうつれのぞき見て鏡のうちをうらやめる人	
1158	銀鈴20-2	銀鈴社詩稿	舟木柳村	春の風君より吹くやねがはくば鶯よしとみちびき給へ（洲洋兄へ）	
1159	銀鈴20-2	銀鈴社詩稿	鈴木暁星	ほまれてふ権威も知らずわが心盲目（めしひ）のごとし君に堪へねば	
1160	銀鈴20-2	銀鈴社詩稿	小川石櫻	雑木の黄ばめる幹に時雨してあめつち暗し古きけしきに	
1161	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	嵯峨の里人	とも知らず若き女のうるはしき心の国は早くすさべり	
1162	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	舟木波秋	君一語壮美をほめぬいにしへの様と霧ふる中の湖畔に	
1163	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	福間如舟	枯蘆は音しぬ春の水の隈やはらの風は南より吹き	
1164	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	須崎隆一	春の雨道をいそげる人妻の袖にしづくし美しくしや降る	
1165	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	春子	人呪ふ古き社の大杉に凶（まが）の夜すがら嵐するかな	
1166	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	春子	みこころは敵のみ廟（たまや）このいのち仰せ畏こみささげまゐらす	
1167	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	すみれ女史	雪解の水の早さにく度か書きてもなげぬ君おもふ歌	
1168	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	立石洲洋	わだつみの大きところに白光はさせりと思ふああ威なるかな	
1169	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	立石洲洋	うちつけに物は申さむ白き蝶花より花に酔ひめぐるなり	
1170	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	蕭殺の冬の野にある大木に乱調子しぬ夕ぐれの風	
1171	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	戦慄す野分の朝の枯木みな剣のかたちし禁（いま）しむるかな	
1172	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	町女房煙草のむ人黒髪のよきひとつどふ春の夜の家	
1173	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	森脇桃村	野の末の氷れるごとき森の沼の白き花かや人づれななる	
1174	銀鈴20-5	銀鈴社詩稿	後藤藤朗：後藤孤星	また今日も北氷洋の中にして小人と語るわびしさに居る	
1175	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	あたたかきみ胸に生ひて美しくにほへる花よ恋草といふ	
1176	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	愚かにも物怖ぢすなる君とのみ思ひてありぬ果敢（ほか）なごころに	
1177	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	憂愁はまる寝ふたりを十重二十重かこみぬ涙こぼる冬の夜	
1178	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	北海にひと日浴みして君に燃ゆ熱き心も棄てなむとしぬ	
1179	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	よろこびぬ憂ひぬ泣きぬおののぎぬこの恋ごろもはたいかにせむ	
1180	銀鈴20-9	銀鈴社詩稿	菅原まさ男：菅原紅雨	ああ今宵とはの別れと美しくしき涙は降りぬ君と我とに	
1181	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	橘蝶妻	清浄の冠よそほひわが君に禱らぬ間なし恋の新生	
1182	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	橘蝶妻	春の風日傘つづける舞姫の袖よりたかく蝶飛べるかな	
1183	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	八重垣郷人	冬の野とさびしうつけぬおごそかに神のたまへるわが心ゆゑ	
1184	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	濱村仁子	春の月人のかたへに祈祷（いのり）する木かげの君がみ頬にさしけれ	
1185	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	田口韻芳	秋の小野毒とも知らずふくみたる花のひとよのことはりを知る	
1186	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	岩崎醉芳	そそり立つ岩のかけはしひく虹の偉なるをたたへ涙するかな	
1187	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	岩崎醉芳	たえ間なき恨みに追はれわが息の駛せて成りしや春の夕月	
1188	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	旭山芳子	常春の海の青を見るこちして夢かのやうに君おもふなれ	
1189	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	春子	千仞の深きに落ちぬこころ今さびしきもの外（ほか）をおもはず	

1190	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	朝日山薫：朝日山錦水	君が家は低き山そばそのわたりほのむらさきに汐ぐもりしぬ
1191	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	朝日山薫：朝日山錦水	いとまなく君が涙のそそげばか青みぬちさきわがこころの芽
1192	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	朝日山薫：朝日山錦水	荒涼の胸なる埴も美しくき花咲かしめぬ君おもふゆゑ
1193	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	朝日山薫：朝日山錦水	君とわが胸にちひさき相愛の花のたをたをひと日咲きぬれ
1194	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	菅原正男：菅原紅雨	うつぶして袖も朽ちよとひた泣きぬ希望（のぞみ）のいろに春日くゆれど
1195	銀鈴21-3	銀鈴社詩稿	菅原正男：菅原紅雨	時としてわが愛着の執念を断たむと思ふ日もありしかな
1196	銀鈴21-11		菅原紅雨：菅原正男	春の雨降りぬ病む子が憂恨の涙に似たるしめやかさにて
1197	銀鈴22-3	春雨笠	月森神来	ああ涙汝れこそ語れわが胸の言葉につきぬあつき思を
1198	銀鈴22-3	春雨笠	月森神来	君を見てわれ戦（おのの）きぬ我を見て君涙しぬ月出つる時
1199	銀鈴22-3	春雨笠	月森神来	いま胸は草かれはてし秋の野を鐘の音まよふさびしさに在り
1200	銀鈴22-3	春雨笠	月森神来	秋の雨思ひ出いたしわかれの日君が頬（ほ）にみし涙おぼえて
1201	銀鈴22-3	春雨笠	月森神来	あが歌はたとへば恋に乙女子のくごもるに似むあはれみたまへ（翠激の君に）
1202	銀鈴22-3	春雨笠	春子	鯨波（とき）のごゑせまるが如し君見つる刹那の胸のやすからぬかな
1203	銀鈴22-3	春雨笠	春子	ひたよする潮の如きときめきをおぼえ心春の夜の街
1204	銀鈴22-3	春雨笠	福田紫雲	うち若き胸よ日にげに堪へがたき痛みぞ覚ゆ君おもふゆゑ
1205	銀鈴22-3	春雨笠	福田紫雲	夜もすがら魔性が来る心倦み胸さわぎしぬあはれ死ぬべき
1206	銀鈴22-3	春雨笠	後藤藤朗：後藤孤星	はつ夏や円葉（まろは）やなぎの蔭にして若鮎めでぬ多摩川の里
1207	銀鈴22-3	春雨笠	後藤藤朗：後藤孤星	おどろ髪すごき黒衣の形相に棕櫚みな立てりたそがれの里
1208	銀鈴22-3	春雨笠	後藤藤朗：後藤孤星	御朱印船風や待つらむ錨して啞の舟子も博うちて居ぬ
1209	銀鈴22-3	春雨笠	東波	富も名もさびしくよわき黒の珠あつき涙に輝きは見む
1210	銀鈴22-3	春雨笠	東波	みすがたは春の戸による美しくきみ声を孕め聞かむたのしき
1211	銀鈴22-3	春雨笠	服部紫葉	燈台の青き光はよりそへる二人が面に照りぬ春の夜
1212	銀鈴22-3	春雨笠	服部紫葉	君つひに百合とくだけぬありし世のみすがた思ひわが心泣く
1213	銀鈴22-8	五月藤	森脇桃村	初秋や草の戸近くむしろして博うつ人にさしぬ夕月
1214	銀鈴22-8	五月藤	森脇桃村	二十年春秋経たる氷塊もひと時に消ぬみ息かかれば
1215	銀鈴22-8	五月藤	森脇桃村	春の雨君がしのびに人をよぶ声としききぬ心たのしき
1216	銀鈴22-8	五月藤	森脇桃村	蝶ふたつ帆に似てゆきぬ若草の青き芽したる野のまひる時
1217	銀鈴22-8	五月藤	小川石櫻	夜の霧榛の木立にしらしらと月のぼるとき君や来ません
1218	銀鈴22-8	五月藤	服部紫葉	白百合はほのにかをりてせせらぎのほりに立てり君がすがたと
1219	銀鈴22-8	五月藤	石橋汐波	夏の夜に涼しきかぜのふくごときよろこびおぼえ君を見るかな
1220	銀鈴22-8	五月藤	ゆめみる人	わが心はつ夏の日天地のすがたに清くわかみどりしぬ
1221	銀鈴22-8	五月藤	ゆめみる人	いま遠く近くちまたのどよめきを聴きぬ若葉のきりぎしにして
1222	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	別れしゆ消息絶えぬみ姿のやつれまししを夢に泣くかな
1223	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	あなさびし今が消えなむすびつ火の一縷ののぞみ絶え絶えにして
1224	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	徂く春をひとりたれこめ物思ふつたなき性とあざみたまふか
1225	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	一道のひかりのぞみてわれ生くと誰にか告げむ胸のひめごと

1226	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	楽しみは運命（さだめ）にかこち世にそむきほろびし恋の墳墓訪ふのみ	
1227	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	悄然と涙ながしぬ睦語る期ありやなしやはかなき恋に	
1228	銀鈴22-8	五月藤	菅原正男：菅原紅雨	とかくして春の光りつ老いぬらむ君をあやぶむ五月雨の家	
1229	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	丘の家青き風吹く夏の大野を眺め君と在るかな	
1230	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	夏の海目路にせまるや遠国の君を迎ふるよろこびに似て	
1231	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	なつかしき思ひ出すなり初夏の青簾つりたる郷の家	
1232	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	雪降りぬ因幡の国の山脈はああ一時の涅槃のさまに	
1233	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	うら淋し思ひに暮れぬ大海の底に沈める玉にしも似て	
1234	銀鈴23-5	夏の海	倉光活林	髪なびげ湖上に並ぶ家家の青きすだれを思ひ出づる日	
1235	銀鈴23-9	葵の葉	森脇桃村	美はしき君がみ手とり故郷の夏野の末に在りぬ日を経て	
1236	銀鈴23-9	葵の葉	森脇桃村	一語なくああ立つこの日君とわが幾歩の間に風かほるかな	
1237	銀鈴23-9	葵の葉	森脇桃村	繭買ひも馬曳く子等もはたはたと扇す木かげ草踏める時	
1238	銀鈴23-9	葵の葉	森脇桃村	髪なびげ薄き衣して少女等はひとりの君と風とめで居ぬ	
1239	銀鈴23-9	葵の葉	森脇桃村	山の温泉（ゆ）の湯気たちこむる欄干に黒髪梳る顔白き人（有福温泉にて）	
1240	銀鈴23-9	葵の葉	花あやめ	こころ今いつはりもなし君恋ふるこの手まらばいかしがし給ふ（人に）	
1241	銀鈴23-9	葵の葉	奥原碧雲	朝市や南大門のあけ方に被衣（かつぎ）の人をかいまみしかな	
1242	銀鈴23-9	葵の葉	奥原碧雲	よき人の被衣のひさしそとあげて見かへる眼のうらはしき哉	
1243	銀鈴23-9	葵の葉	奥原碧雲	薪おひて小牛ひき来る朝市や大路ほのぼの夜は明けて行く（以上、京城南大門朝市にて）	
1244	銀鈴23-9	葵の葉	奥原碧雲	王城のいらかすたれてぬり懐たるきのあたり蝙蝠のとぶ（以上景福宮にて）	
1245	銀鈴23-9	葵の葉	春子	七夕の惜しき分れのちぎりこそ地なるわれ等が恋のさまなれ	
1246	銀鈴23-9	葵の葉	春子	力なき黒髪なれど猛者等曳く權威をたたへ歌よみて居ぬ	
1247	銀鈴23-9	葵の葉	菅原紅雨：菅原正男	君恋ふるとは迷ひの今さめてよろこびみつれ心泣くかな	
1248	銀鈴23-9	葵の葉	菅原紅雨：菅原正男	宵々に君がおもかけ夢に見て泣けばいささか心なざぬれ	
1249	銀鈴23-9	葵の葉	菅原紅雨：菅原正男	わが胸の墳墓（おくつき）訪へば刻まれし君が名立てり露にそぼちて	
1250	銀鈴23-9	葵の葉	菅原紅雨：菅原正男	恋草はつひにしなへぬ温かきみの息のうちに培ひながら	
1251	銀鈴23-9	葵の葉	菅原紅雨：菅原正男	君見たるその一瞬はよろこびぬ今日の愁ひのありと知らねば	
1252	銀鈴23-10	葵の葉	椿静岩	知らぬ間に何者の来て実蒔きしや恋草青く芽ぐまむとしぬ	
1253	銀鈴23-10	葵の葉	椿静岩	風そよぎ草の香わたる夕月に君がみ窓の灯ぞほのゆる	
1254	銀鈴23-10	葵の葉	椿静岩	今宵しも君が来といふすさまじき強雨もするか胸のうつろに	
1255	銀鈴23-10	葵の葉	河野翠激	なにごとのよろこびやあるわれ答ふやうやくにして君を迎へぬ	
1256	銀鈴23-10	葵の葉	河野翠激	燈心のじじと音する夜の寂（さび）に心に帰るかなしみを追ふ	原文「じじ」傍点あり
1257	銀鈴23-10	葵の葉	河野翠激	「たやすげにのたまふがゆゑ」「さらばまた誰をか双つ恋ひむとするや」	
1258	銀鈴23-10	葵の葉	河野翠激	夏のかぜときめく胸のかりそめの誓ひを吹くやいともたふとき	
1259	銀鈴23-10	葵の葉	河野翠激	少女いふ双つ心を持ちたまふ君を不覚に恋ひし罪なれ	
1260	銀鈴24-5	紗燈集	服部紫葉	五月雨戸あけて聴きぬ深愁の声と今啼くああほととぎす	

1261	銀鈴24-5	紗燈集	服部紫葉	薄月夜なつかし人の涙かや白蠟流るたへぬ愁ひに	
1262	銀鈴24-5	紗燈集	服部紫葉	初夏や若葉がくれに野薔薇のほのにかをりぬ君思ふ時	
1263	銀鈴24-5	紗燈集	服部紫葉	憂愁の涙のごはむ我が袖に蛭いざこよ汝も燃ゆるかな	
1264	銀鈴24-5	紗燈集	花村静夫	うつくしたをやかなりや舞姫の鼓の手よりいざみ珠得む	
1265	銀鈴24-5	紗燈集	春子	風涼し草の香ほのに家（や）をめぐる興湧く友よいざ共に寝む	
1266	銀鈴24-5	紗燈集	春子	天の精地の霊夜のあで人を護ると思ふ沢のほたる火	
1267	銀鈴24-5	紗燈集	春子	二万年古りしみ堂の楠木のうつろに声す白蟻の群	
1268	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	暗がりの胸なる小野も一道の光明（ひかり）はさせり君を見しより	
1269	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	ああ君がみ声ぞのこれしかすがに心の海の波さわぐかな	
1270	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	うつくしき君を得たればわが心春の常世ののどけさに在り	
1271	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	君去ぬやあが心いま哀寂の影曳く虚（うろ）とまた墮ちぬべき	
1272	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	しめやかに春の雨ふる音に似て縷のごと尽きず恋語りかな	
1273	銀鈴24-6	紗燈集	朝日山錦水：朝日山薫	君とわが胸に生ひぬる相愛の草の芽を喰む毒蟲を忌む	
1274	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	大夏や円なる山の真清水に算かけたるふる郷の家	
1275	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	山の茶屋駕籠に憩へば遠国のおもかげ見えて奇鳥啼きぬれ	
1276	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	甘たるき味ひするや山の水白き木の花額を日の照る	
1277	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	森の沼紺の紗面にざれ絵すと金泥置きぬ天つ日の皇子	
1278	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	幾由句そこひも知らぬかなしびの毎に陥るなくさめたまへ	題「母を失ひて歌へる」
1279	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	栄や名や誰に誇ると世を待たむ我連れたまへ天のみ国に	題「母を失ひて歌へる」
1280	銀鈴24-6	紗燈集	後藤藤朗：後藤孤星	普門品馴れぬ子ながら壇かまへ木魚はうちぬ終焉を泣く	題「母を失ひて歌へる」
1281	銀鈴24-6	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	にくからず思へど「我は他人を恋ひす」と言ひぬ涙しつつも	
1282	銀鈴24-6	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	何故の悲観ぞ答ふ束の間も死の海まかる人のおそれに	
1283	銀鈴24-6	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	「哀愁」は心の野辺の暗黒を幾とせ去らず迷はむとすや	
1284	銀鈴24-6	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	強きこと云はむと待む片時も逢ひての後も心おぼえず	
1285	銀鈴24-6	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	君知るやこの悪縁とこりずまに凶の日を待つはかな心と	
1286	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	誰か知るわが半宵のたはれごと少女を憎むころならねど	
1287	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	学び得し「道」のいさめの声に怖ぢもだえぬ成らむ恋のさかひに	
1288	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	人あまた中に目だちて君ぞ行く知らずとよそひ我群を行く	
1289	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	君か否疑ひそめし誰なりや異端ゆるさぬ神のおはせば	
1290	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	ありなしの心おちみず日も月もほろべと嘆く夜を傷み泣く	題「以下藤朗の慈母を失へるに」
1291	銀鈴24-7	紗燈集	河野翠澁	ほの白きともし火暗に消なむするいまはをおもひ君に泣くかな	題「以下藤朗の慈母を失へるに」
1292	銀鈴24-7	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	ああ胡蝶昨日を忘れ今日もまた毒もつ花のいつはりに来し	
1293	銀鈴24-7	紗燈集	菅原紅雨：菅原正男	人あまたいぶかり問へり「悲歌何ぞ君に多き」と「恋に破れぬ」	
1294	銀鈴25-8	万古青濛々	後藤藤朗：後藤孤星	かたくなに何か憎まむ億劫の日も我泣くにあき足らぬ世を	
1295	銀鈴25-8	万古青濛々	後藤藤朗：後藤孤星	片町や我も交りぬ密猟の壮語を聴くと女人の中に	
1296	銀鈴25-8	万古青濛々	後藤藤朗：後藤孤星	漁士街ひねもす百舌のさへづりに似てあらそひぬ蜘蛛網をはる	

1297	銀鈴25-8	万古青濛々	後藤藤朗：後藤孤星	梁の夜を語りぬ鍛冶のわらんべと臘虎の毛皮被（き）たる男と	
1298	銀鈴25-8	万古青濛々	松本掬雨	いかづちやみ空の虹の七絃を一時に断つとわが胸に似て	
1299	銀鈴25-8	万古青濛々	松本掬雨	病みぬればいとよき夢も円ならず捕へ去ねやと祈苦しき（病の床にて）	
1300	銀鈴25-9	万古青濛々	三明千鳥：千鳥・千鳥子	金斧もて石に刻める罪なれば千歳を経ともなどか消ぬべき	
1301	銀鈴25-9	万古青濛々	三明千鳥：千鳥・千鳥子	朝の雨はれゆくけはひ万象を正しく見得る日のよろこびに（人に）	
1302	銀鈴25-9	万古青濛々	森脇桃村	きりぎりす君にわかれて行く径の石のもとより音にいでてなく	
1303	銀鈴25-9	万古青濛々	森脇桃村	こは奇しき啞となりぬれ饒弁の子なれど君と逢見たる時	
1304	銀鈴25-9	万古青濛々	森脇桃村	君見しは零余子たゆらに滴しつ秋の日岡を越えてさす家	
1305	銀鈴25-9	万古青濛々	森脇桃村	忘れじと甘き言のみ云ふゆゑに疑とよぶ鳥つどひ来ぬ	
1306	銀鈴25-10	万古青濛々	明賀溪南	「君が髪」ひそかに呼びてより添ひぬめしひぬれども香をもとむる日	
1307	銀鈴25-10	万古青濛々	明賀溪南	そよかぜの吹く日草摘むうれしさよならびて往かむ野のわが友よ（三明千鳥の君に）	
1308	銀鈴25-10	万古青濛々	菅原紅雨：菅原正男	朝がほに細き雨しぬ草の家君とわかれし日をしのび病む	
1309	銀鈴25-10	万古青濛々	河野翠激	君をおき旅だつごとし今われは心げさうに他念あらねば	
1310	銀鈴26-6	長江万里情	森脇桃村	知らずいま顔ほのほてり胸さわぐ君におもはれ在る日のやうに	
1311	銀鈴26-6	長江万里情	森脇桃村	こは夢かあらじと思ふ髪たわわ長き袖ふり来るみ姿	
1312	銀鈴26-6	長江万里情	森脇桃村	ひたひたと潮よせ来るああ君を迎ふる心地蓋し似たらむ	
1313	銀鈴26-6	長江万里情	木村秋浦	夜昼（よひる）なくおんおも影をよろこびの心の上に火の珠と置く	
1314	銀鈴26-6	長江万里情	木村秋浦	野をめぐり流れぬ秋の水一路清き枕し月山を出づ	
1315	銀鈴26-7	長江万里情	服部紫葉	亡き父のみ墓のまへに万物（まんもつ）の哀愁を知るはつ秋のかぜ	
1316	銀鈴26-7	長江万里情	服部紫葉	みなさけのみたまづさ得ぬすがれたる心の野辺に君をこそ祝げ	
1317	銀鈴26-7	長江万里情	服部紫葉	靄ふかき麓路をゆくおのおのの恋に音をなく蟲あまた聴き	
1318	銀鈴26-7	長江万里情	河野翠激	死といづれ我は扱ばむ面（ま）のあたりわが大恩の人妻を恋ふ	
1319	銀鈴26-7	長江万里情	河野翠激	言ひも兼ね少女よ汝みづからの命早うす我君を泣く	
1320	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	平らかに心を持たむ一瞬の前の覚悟を忘れ君見る	
1321	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	君知るや君が心を捕へむと一族こそりあはれ用意す	
1322	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	さまざまの悪夢をおそれ夜もすがら寝ぬ夜つもりぬ又月を超え	
1323	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	わが胸の壁に誰がせし落書ぞ消しも能はぬ憶病を知り	
1324	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	いつはりを蔵し給へり答ふ否さらばわが臍割くにまかせむ	
1325	銀鈴26-8	長江万里情	河野翠激	さりげなくよそひたまへや人々のねたみ君をも害ひぬべき	
1326	銀鈴27-7	青山忽己曙	明賀溪南	あで人よあまりに寒き心ぞといつはりも云ふ我を呪ふや	
1327	銀鈴27-7	青山忽己曙	森脇桃村	うばたまの暗き夜なれどわが心君をおもへば稲光する	
1328	銀鈴27-7	青山忽己曙	森脇桃村	ああ額に鉄鎖を措きぬ戦慄す恋ふべからざる君をおもひて	
1329	銀鈴27-7	青山忽己曙	大屋左一：大屋桂水	いたづらに後のさかえをつきぬ世を語らじみ手を今したまへば	

1330	銀鈴27-8	青山忽己曙	木村秋浦	悪性のみなぎる潮地ひびきてせまると思ふ海ゆく日かな	
1331	銀鈴27-8	青山忽己曙	木村秋浦	帷幄（あげはり）に妙楽すなりとこしへのみ扇（と）や今明く心をどりぬ	
1332	銀鈴27-8	青山忽己曙	後藤藤朗：後藤孤星	花鶯は秋の帝の宮はしら丹塗ると幹をひたすらに巻く	
1333	銀鈴27-8	青山忽己曙	後藤藤朗：後藤孤星	秋の風そばの花よりものうげに牛ひく男等の十の群ふく	
1334	銀鈴27-8	青山忽己曙	後藤藤朗：後藤孤星	大河ゆるし朝のかぜ吹く帆の中に朗々として君もうたひぬ	
1335	銀鈴27-8	青山忽己曙	後藤藤朗：後藤孤星	秋ゆくと風も木の葉も地をめぐり行道すなり若き心も	
1336	銀鈴27-9	青山忽己曙	山藤信吉	日あたりの椽にならべる鉢植の白菊愛でぬわがおもふ人	
1337	銀鈴27-9	青山忽己曙	山藤信吉	風をりをり葉蘭に来るそよぎにも忘れし人のおもかげに立つ	
1338	銀鈴27-9	青山忽己曙	山藤信吉	苔あをき石のきざはし十五段芙蓉のごとく君のぼり行く	
1339	銀鈴27-9	青山忽己曙	河野翠漱	しら玉の少女は百の愛でびとにいつかれ給ふわれ泣きて居り	
1340	銀鈴27-9	青山忽己曙	菅原紅雨	「傷ましき心の破れ」かく歌ひ夜毎われ泣く小ひさき心	
1341	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	うき人と君は恨まむ思はるる身にしてまたも他人を恋ふ	
1342	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	あはれなる少女よかくも残忍の我と知りつつなほ忘れ得ぬ	
1343	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	「刈りすてよ」「さなのたまひそ蕭殺の心に匂ふ愁の千花」	
1344	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	百余日相見ぬ嫉みとこしへに逢はじと欲りすあさましきかな	
1345	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	暗澹に世界にひとり鞭ちてさまよふごとし追憶に泣く	
1346	銀鈴27-10	青山忽己曙	菅原紅雨	ああ憂ひ嘆き喜びさまさまの夢にいだかれひととせを経ぬ	
1347	銀鈴28-1	おもひ草	月森神来	恋草は涙の雨のつちかひに尺をぬきんじ紅き花しぬ	
1348	銀鈴28-1	おもひ草	月森神来	星一つ西へ流れぬふる里に病みておはする母思ふ時	
1349	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	君みれば胸のあら野も花かをり薔薇の色の霞するかな	
1350	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	いみきらひさてまた見ればなつかしと毒の酒くむわが習ひかな	
1351	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	さな怖ぢそふる恋人よ死を強ひし炎の思きえてはやなし	
1352	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	やよ少女きて呵（さいな）みねこの罪はざんげに許りす汝が手にぞ消ゆ	
1353	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	強雨いま来とふためきて大空を去来すらしも黒雲の族	
1354	銀鈴28-2	おもひ草	月森神来	君を恋ふとしもいひえず相みてはただためらひとはや百日へぬ	
1355	銀鈴28-3	おもひ草	月森神来	枯木なす心の森も春の風ふけば花しぬ薔薇の色に	
1356	銀鈴28-3	おもひ草	月森神来	想ひ見るわが来しかたは灰色のあら野なりけり涙とむらへ	
1357	銀鈴28-8	みとりの夜	思はれ人	黄金の光りのなかに白珊瑚あまた懸れり雪の曙	
1358	銀鈴28-8	みとりの夜	思はれ人	いと清き心の玉座みそなはせ瑯玕づくり雪の大宮	
1359	銀鈴28-8	みとりの夜	思はれ人	春の風なよらに吹く日もろもろの草の芽生ひぬさても嬉しき	
1360	銀鈴28-15	江白遥聞風	玉利星夢	わが胸のなかにしてさく火の花をわれ今おぼゆやがて死ぬらし	
1361	銀鈴28-15	江白遥聞風	玉利星夢	わだつみの底つ岩根に我ひとり座して思はむ愚かなる身は	
1362	銀鈴28-15	江白遥聞風	玉利星夢	白き紅きいづれもよしと秋の花咲けるをめでて君とを行きぬ	
1363	銀鈴28-15	江白遥聞風	玉利星夢	河にそひ菊咲く小径おもかげに君こそ見ゆれ月のぼるとき	
1364	銀鈴28-15	江白遥聞風	明賀溪南	大空に初日はのぼる南天の実のたをたと紫垣による	
1365	銀鈴28-16	江白遥聞風	後藤藤朗：後藤孤星	冬の街豚の肉売る軒にたちかたるの児等は風車する	

1366	銀鈴28-16	江白遥聞風	後藤藤朗：後藤孤星	秋死にし虫が忍びの泣く声と霜夜の角を寝る床に聴く	
1367	銀鈴28-16	江白遥聞風	後藤藤朗：後藤孤星	今いつこ時といふなる大力の手中に絶えず我母を泣く（我母を忍びて歌へる）	
1368	銀鈴28-16	江白遥聞風	後藤藤朗：後藤孤星	魔の手に似、黒髪落ちて物泣きぬ地獄を去るとすさまじき街	
1369	銀鈴28-16	江白遥聞風	立石洲洋	初雪や雲こそ晴れし富士の峰光明にたち夜明けぬるかな	
1370	銀鈴28-17	江白遥聞風	菅原紅雨：菅原正男	寂寥のとらはれ人とわれ在りぬ落葉そよめく木枯の暮	
1371	銀鈴28-17	江白遥聞風	菅原紅雨：菅原正男	霜枯れし葉末に結ぶ白露に朝風するをあわれとぞ見る	
1372	銀鈴28-17	江白遥聞風	菅原紅雨：菅原正男	暗澹のともしびじじと音たてぬ何嘆くやとささやくごととも	
1373	銀鈴28-17	江白遥聞風	菅原紅雨：菅原正男	瑠璃色の天をあやどる森林の静けさに似るわが心かな	
1374	銀鈴28-17	江白遥聞風	菅原紅雨：菅原正男	薄紅の花びらにしも忘れえず君がなさけの口づけの香を	
1375	銀鈴28-17	江白遥聞風	森脇桃村	なほわれはどよめく街の人衆の中にまちりて君影趁ふ	
1376	銀鈴28-18	江白遥聞風	森脇桃村	駒なめて鼓とどろと大軍の今しも来たる海ある日は	
1377	銀鈴28-18	江白遥聞風	森脇桃村	枯れ果てし秋の大野かかりそめにだに微草（わかぐさ）の萌芽する得ず	
1378	銀鈴28-18	江白遥聞風	森脇桃村	野に行けば百千の鳥は残忍の言もてなほもわれをさいなむ	
1379	銀鈴28-18	江白遥聞風	森脇桃村	わと呻（によ）び木の葉飾ひぬ森林は大き世界の呼吸のごとく	
1380	銀鈴28-18	江白遥聞風	朝日山錦水：朝日山薫	み空よりあらたま姫は花やかに若きすがたをととのへて来し	
1381	銀鈴29-6	短詩八首	月森神来	友恋し田川のあたりあやめ咲き紫の雨静にふる時	原文総ルビ
1382	銀鈴29-6	短詩八首	月森神来	棕櫚の葉に風泣く秋の雨の夜はもののけ怖ぢて君はありける	原文総ルビ
1383	銀鈴29-6	短詩八首	月森神来	また今日も小女屠らむ酒もてこ獣の王の高き声かな	原文総ルビ
1384	銀鈴29-6	短詩八首	月森神来	わが胆を試むといひ血に逸る若人は来ぬ妖の窟に	原文総ルビ
1385	銀鈴29-7	短詩八首	月森神来	「われ死なむ」といへば君も「後れじ」と誓ひぬ秋の月の磯辺に	原文総ルビ
1386	銀鈴29-7	短詩八首	月森神来	法会の夜善女ひとりに亡き君のおもかけしのび涙しぬわれ	原文総ルビ
1387	銀鈴29-7	短詩八首	月森神来	あな光あまりにつよし眩すと妖怪（もののけ）が引くくろ雲の幕	原文総ルビ
1388	銀鈴29-7	短詩八首	月森神来	妖の群われを捉ふと軒下をめぐると高き雨滴（あまだれ）をきく	原文総ルビ
1389	銀鈴29-9	復照青苔上	森脇桃村	利鎌もて弥に生ひたる醜草を刈れと云へども「さはのたまへど」	
1390	銀鈴29-9	復照青苔上	森脇桃村	おどろまき百千の蛇は聴き取れぬあまた名を呼びおびやかしぬれ	
1391	銀鈴29-9	復照青苔上	坂本笑風	君に逢ふ清きおもひをねがはくば日記にとどめむ凶鳥よ去れ	
1392	銀鈴29-9	復照青苔上	坂本笑風	咲くや花夕さすらひのみ裳の香にわが恋衣青の彩織れ	
1393	銀鈴29-10	復照青苔上	佚名氏	君を見て早鐘すなり心の臓ああひと時も今は得堪へじ	
1394	銀鈴29-10	復照青苔上	立石洲洋	初春の風はうれひの君と我がさびしき額とそよ吹きてゆく	
1395	銀鈴29-10	復照青苔上	立石洲洋	眠る山円き峯はも春の風吹けば黄金の霧も生むかな	
1396	銀鈴29-10	復照青苔上	河野翠激	嫁が島波の遠音を琴の柱に懸けて弾くやとまたかへり見ぬ	
1397	銀鈴29-10	復照青苔上	河野翠激	黄に濁る水も機関のとどろきも汝を見る刹那安し船ゆく（以上松江紀行の歌の内）	
1398	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	夢にわが胸にしぼめる一輪の花に泣くなる黒き蝶見ぬ	
1399	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	さな云ひそ毒の酒呑み乱酔に幾日を消すたはれ男と	
1400	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	木枯は虚に眠れる小兎の夢おどろかし去りぬ地の果	

1401	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	冷かなる手もて汝が燃ゆ心臓を屠り捨てむと我は謀りぬ	
1402	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	時として心の奥の小さきもの君が名よぶをうれはしむかな	
1403	銀鈴29-11	復照青苔上	菅原紅雨	薔薇の香ほのくにほひぬむかし人われに泣かむとしのび来しかや	
1404	銀鈴30-3	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	海の音又は今さく平原の声の中にも君を忘れず	原文総ルビ
1405	銀鈴30-3	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	国訛りをかきされども美しくしき少女とゆきぬ物おもはなく	原文総ルビ
1406	銀鈴30-3	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	あな数多（あまた）長き袖振り水いろの衣きて来る湖南の女	原文総ルビ
1407	銀鈴30-4	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	少女みな真玉のごとし口々に恋がたり行く神代なる国	原文総ルビ
1408	銀鈴30-4	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	君に言ふかかめめでたき国住のよろこび分て俱に去なまし	原文総ルビ
1409	銀鈴30-4	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	ふるさとの恋を棄てよと北の海より蓬々と風われを吹く	原文総ルビ
1410	銀鈴30-4	旅詠（二）－ 松江紀行の 歌一	河野翠激	船に見る青き磯曲（いそわ）に裳をかかげ何の貝採るめめし少女子	原文総ルビ
1411	銀鈴30-5	緋の袖	菅原紅雨	紅梅は静（しづ）にうなだれ涙しぬ思出多きゆふべの雨に	
1412	銀鈴30-5	緋の袖	菅原紅雨	はてしなき海に君抱き千年も沈める吾を幸と誰がいふ	
1413	銀鈴30-5	緋の袖	菅原紅雨	「この恨みとはに忘れじ春来れど」落葉にうづむ花のささやき	
1414	銀鈴30-5	緋の袖	菅原紅雨	すがれたる君が心のくらがり花をもとむとさまよふは誰ぞ	
1415	銀鈴30-6	緋の袖	菅原紅雨	忘れえず彼の日わざめの緋の袖に涙印せしうらわかき人	
1416	銀鈴30-6	緋の袖	菅原紅雨	木蓮に雨する夜なりほのぐらき燭に対してわれひそに泣く	
1417	銀鈴30-6	緋の袖	菅原紅雨	かいまみぬ夜毎に君は青き壁伝ひて泣くを往きつ返りつ	
1418	銀鈴30-6	緋の袖	菅原紅雨	いと静（しづ）に雪する夜半をとどろきぬ胸に疾風はいく度となく	
1419	銀鈴30-7	緋の袖	菅原紅雨	今日もまた君に捧げむ料にとて赤き木の実を多にわれとる	
1420	銀鈴30-7	緋の袖	菅原紅雨	あなうたて「時」なる海の彼方にはほのに見ゆなりうたがひの国	
1421	銀鈴30-7	緋の袖	菅原紅雨	君に似る鶴ぞ来り静なるわが胸の湖に波たてて行く	
1422	銀鈴30-7	緋の袖	菅原紅雨	青き花愁に咲けり君去りて訪ふ人もなき胸の荒野に	

1423	銀鈴30-7	緋の袖	菅原紅雨	なにとなき愁にまかれこむ春も知らで過ぐべき新しきもの	
1424	銀鈴30-8	緋の袖	菅原紅雨	君吸ふと抱けばあなや黒髪を伝ひて射来ぬ白羽の征矢は	
1425	銀鈴30-8	緋の袖	菅原紅雨	免(ゆる)しませ再び浮かぬ劫暗の淵と知りつつ君すてし罪	
1426	銀鈴30-8	緋の袖	菅原紅雨	君すてしあさましわれも消息の絶ゆれば知らぬ淋しらに在り	
1427	銀鈴30-8	緋の袖	菅原紅雨	大なる幸得しと否つひにわれ深く淪(しづ)みぬ凶の淵	
1428	銀鈴31-1	春雨	菅原紅雨：菅原正男	春の雨見ずや少女が唇の嚙脂ながすと花はしづくす	
1429	銀鈴31-1	春雨	菅原紅雨：菅原正男	白き国王女のおはすおん城と爺がかたりを君もききしか	
1430	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	緋のしづく緑のしづく小さな鏡にうつし君は泣くらむ	
1431	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	「彼の歎金の征矢もて射てとらむいざさせたまへ」呼ぶにはやなし	
1432	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	とこしへに天もたらすとああ瞬時毒の一箭に消えてあとなし	
1433	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	誰ぞかかる希望(のぞみ)の色に涙して世をばそむきしそは去年(こぞ)のわれ	
1434	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	「いかでわれ汝が胸の扉(と)を焼きすてむ」叫ぶ聲しぬ炎の少女	
1435	銀鈴31-2	春雨	菅原紅雨：菅原正男	暗き国のみをもとめて二年をわれ彷徨(さまよ)ひぬ恋に破れて	
1436	銀鈴31-3	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	ふるさとの父母恋し妻ごめに八重垣つくる御祖(みおや)恋しき	
1437	銀鈴31-3	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	わが心をさなき前にたちかへる鎮まりります数のみ神よ	
1438	銀鈴31-3	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	白髪(しろかみ)の物よく語る爺に連れ神話が中の添人(そへびと)となる	
1439	銀鈴31-4	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	大己貴(おほなむち)み裔(みゑ)のひとり三千歳の年月つかふまつりぬ	
1440	銀鈴31-4	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	わが袂(たもと)神門平ひらのさむ風に吹かれ靡(な)きぬ青き霧(きり)ふれ	
1441	銀鈴31-4	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	湖(うみ)の姫(ひめ)よ山のうからの一人が珊瑚(さんご)の舟(ふね)しみ供仕(くわ)へむ	
1442	銀鈴31-4	旅咏(二)-松江紀行の歌-	河野翠澁	嫁(よめ)が島海(しまうみ)の荒男(あらい)が一念(いつげん)の恋(こい)ゆるさぬやおもひ設(ま)けぬや	
1443	銀鈴31-11	紙燭	森脇桃村	野辺(のへ)おくる白き被衣(かづぎ)の女(むすめ)達(たち)わが胸(むね)を行(い)く悲(かな)しからずや	
1444	銀鈴31-11	紙燭	森脇桃村	破(やぶ)れし甕(かみ)修(しゆ)し再び(また)甘(あま)き酒(さけ)醸(か)せと強(たか)ひぬ黒髪(くろかみ)の人(ひと)	
1445	銀鈴31-11	紙燭	森脇桃村	空色(そらいろ)の衣(きぬ)して君(きみ)は黒髪(くろかみ)を梳(か)きておはさむ七月(しちがつ)の昼(ひる)	
1446	銀鈴31-11	紙燭	森脇桃村	胸(むね)の埴土(はつち)君(きみ)み手(て)づから鋤(あ)いれよ醜草(みにくくさ)されど赤(あか)く果(み)はつく	
1447	銀鈴31-11	紙燭	森脇桃村	いまわれは灌木(くわんぼく)しげる北国(きたくに)の大野(おほの)の果(み)に沈(しず)む日(ひ)を見る	
1448	銀鈴31-12	紙燭	有井正徳	いたましき別離(わかれ)に泣(な)きし日(ひ)とかぞへ胸(むね)いだくとき細(こ)き雨(あめ)する	
1449	銀鈴31-12	紙燭	有井正徳	「さめはてよ」心の奥(おく)にかく呼(よ)ばふ刹那(せつな)またきく「死(し)に」といつれぞ」	
1450	銀鈴31-12	紙燭	有井正徳	枯(か)れし花(はな)なほ香(か)すと廃園(はいえん)にふと笑(わら)ひをもらす少女(しょうじよ)寂(さび)しき	
1451	銀鈴31-12	紙燭	甲村沙汀	ああ天(あま)に瞳(ひとみ)のうれひ何(なに)ものにかかむや君(きみ)は人(ひと)の子(こ)ならぞ	

1452	銀鈴31-12	紙燭	甲村沙汀	いま君がみ手にすがりて忍び泣く春の夜の街いざ火こそ降れ	
1453	銀鈴31-13	紙燭	紫風	「再びは恋ひせじ」といまおもひかでの花の影趁ふ蝶のあさまし	
1454	銀鈴31-13	紙燭	吉田櫻川	あはれいま見ずや「信」なき人の子のうつろの胸に刻む「偽」	
1455	銀鈴31-13	紙燭	吉田櫻川	緋の袴従者の少女の緋の袴紙燭して行く君が左右を	
1456	銀鈴31-13	紙燭	吉田櫻川	おほぞらをゆたのたゆたに錦雲の流るる見れば君の恋しき	
1457	銀鈴31-13	紙燭	吉田櫻川	しめやかに春雨すなり暗愁の涙にうつる灯の影	
1458	銀鈴31-13	紙燭	吉田櫻川	磯姫は青の褥に手を支へ鼓うつなり春のわだつみ	
1459	銀鈴32-1	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	月出づと八坂の塔を指させる玉の手近く頬（ほ）はよせしかど	
1460	銀鈴32-1	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	せちになほ君を思ひぬ上つ代に采女いらたる池の汀に	
1461	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	春の雨蛇の目して行く京の子か傘の上にもみる朱き塔かな	
1462	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	あけぼのの雲のやうなるうすものに朱き帯する奈良少女かな	
1463	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	梟のなく音さびしみおん君に抱かれていねし山あひの宿	
1464	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	雲の宵梨の花ちる山寺に経よむ若き君思ふかな	
1465	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	春日野の若葉の下の石獅子の鬣ぬらし春の雨ふる	
1466	銀鈴32-2	若葉：京、奈良の旅にてよめる	森脇桃村	春の宵水ゆく欄に簾して扇を強いし人を忘れず	
1467	銀鈴32-5	散る花	吉田櫻川	み手ふれし刹那轟くわが胸の雷といま潮鳴るをきく	
1468	銀鈴32-5	散る花	吉田櫻川	伶人のおはしまにひく春の曲水あたたかに桃の花散る	
1469	銀鈴32-5	散る花	吉田櫻川	彩雲のたなびく里に籠り居の君にまつらむ白百合の花	
1470	銀鈴32-5	散る花	吉田櫻川	君をのみわれ世に恋ふと醜の蝶あつき涙をすみれにそそぐ	
1471	銀鈴32-5	散る花	吉田櫻川	みそれつつそらに魔形の火柱のひらめく夜なり君ゆく里は	

1472	銀鈴32-6	散る花	甲村紫蝶	ああ小川尽きぬうらみに喜びに響け無窮の時を刻みて	
1473	銀鈴32-6	散る花	甲村紫蝶	春の雨緋桃かつ散る若き日を寂しと君もかこちたまふか	原文「またふ」→「たまふ」に修正
1474	銀鈴32-6	散る花	甲村紫蝶	汝が恋の終焉(をはり)はかくと夕陽は大森林のかげに没しぬ	
1475	銀鈴32-6	散る花	甲村紫蝶	羊飼ふめぐし少女の角笛の静かなる音と牧場は暮れぬ	
1476	銀鈴32-6	散る花	紫風	悲しみと喜びと相半ばして間なく戦ふ胸の巷に	
1477	銀鈴32-6	散る花	吉田櫻川	白百合のはかなき夢に涙する朝を行くかな君とならびて	
1478	銀鈴32-9	ゆく春	藤本晩花	麓路に行きまよふ子らをこのむれそを頂にわれは見てあり	
1479	銀鈴32-9	ゆく春	藤本晩花	春の宵君がまる寝のおん袖にさくら吹雪す美しきかな	
1480	銀鈴32-9	ゆく春	藤本晩花	いと華奢によそひつくせる少女らの中にましると面ほてりする	
1481	銀鈴32-9	ゆく春	有井漱花	椰子の果(み)の波間にうかぶ南の国に旅すと船は急ぎぬ	
1482	銀鈴32-9	ゆく春	有井漱花	ゆく春の若葉の雨は紫の誦経の君がみ袖に降りぬ	
1483	銀鈴32-10	ゆく春	有井漱花	丈あまる黒髪乱し狂態の少女せまると夢に戦ぐ	
1484	銀鈴32-10	ゆく春	有井漱花	ああ彼の夜紅絹にうつらふ華かの燭にそむきて端座せし人	
1485	銀鈴32-10	ゆく春	有井漱花	雲低うたなびく山の上にしてわれは寛めぬ君住む里を	
1486	銀鈴32-15	火の冤	菅原紅雨：菅原正男	美(よ)き少女醜の少女が同じ世に同じ涙をねがふおろかさ	
1487	銀鈴32-15	火の冤	菅原紅雨：菅原正男	古き葉と新しき葉と籠に入れてわれは流しぬゆく春の川	
1488	銀鈴32-15	火の冤	菅原紅雨：菅原正男	二十五年泣けとたまひし涙かやとばかり思ふ君はあらぬか	
1489	銀鈴32-15	火の冤	菅原紅雨：菅原正男	夢に見る君が瞳と今われはかの蒼空(おほぞら)の星に涙す	
1490	銀鈴32-15	火の冤	菅原紅雨：菅原正男	敗残のつはものあまた盾なめて君が紫にせまるをたけび	
1491	銀鈴32-16	火の冤	大屋左一：大屋桂水	あかつきを東にいそぐ七人は火の冕(かむり)しぬ百合の細道	
1492	銀鈴32-16	火の冤	河野翠激	ききたまへ君をめぐりて鳴る玉の妙なるひびき春の日の雨	
1493	銀鈴32-16	火の冤	河野翠激	わが王よ宮の軽砂に牡丹さく巷の子らをまた見たまふな	
1494	銀鈴32-16	火の冤	河野翠激	人々よわが黒髪に手な触れそ君ただ巻けと匂ふ七尺	原文「獨」→「触」に修正
1495	銀鈴32-16	火の冤	河野翠激	塀に添いながく歩みぬ尽くるなしいづれに一の門はひらかむ	
1496	銀鈴33-7	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	三五人屋形舟してにぎやかに鼓をうちぬ月のぼるとき	
1497	銀鈴33-7	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	なほ思ふ丹塗はげたる大寺の柱のもとに念佛(ねぶつ)する間も	
1498	銀鈴33-7	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	つれだちて湖(うみ)ぞひ行きぬ蜷うる大津乙女と比叡の法師と	
1499	銀鈴33-7	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	和泉路や花見がへりの人のせて俤ぞはしる宵月夜かな	

1500	銀鈴33-7	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	春の宵水にのぞめる匂欄に鐘をかぞへて君とならびぬ	
1501	銀鈴33-8	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	磯松の幹の間に白亜見えいさり舟見ゆ須磨の浦かな	
1502	銀鈴33-8	青き花：京、 奈良の旅に歌 へる	森脇桃村	春雨や南大門のこま犬も白き息吐くさくらが中に	
1503	銀鈴33-13	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	大海に沈む夕日を指さして泣きし若さにかへらむすべも	
1504	銀鈴33-13	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	わが恋ふる半いたらぬ君なれどなほ忘れ得ぬはかなま心	
1505	銀鈴33-13	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	何となき不安おぼえぬこの夕うすくれなみの薔薇の散れば	
1506	銀鈴33-13	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	見る日には君を疎とんじ見ざる日は切に恋しぬをかしき心	
1507	銀鈴33-14	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	この日頃恋せし人に全く似ぬひとをろかしき人さな口吸ひそ	
1508	銀鈴33-14	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	十悪の報いかあらず夜昼なく胸におぼゆる強きさいなみ	
1509	銀鈴33-14	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	七年は幾億年の心地すと泣きしは誰ぞ人妻の君	
1510	銀鈴33-14	夏木立	菅原紅雨：菅原正男	死と生と交々欲りすいたましき世界をわれは君に見いでぬ	
1511	銀鈴33-14	夏木立	吉田櫻川	春の夜や街さざめて行く人はみな君に似ぬうす霞して	
1512	銀鈴33-15	夏木立	藤本晩花	わが胸の炎の中に眼とづれば叫ぶ聲きく夜昼となく	
1513	銀鈴33-15	夏木立	吉田櫻川	菜種さく馬路の野寺に法を説く日かやかすかに鐘の音きこゆ	
1514	銀鈴33-15	夏木立	吉田櫻川	うす霞は菜の花かをる馬路の野に紫こめぬ夜明けぬるかな	
1515	銀鈴33-15	夏木立	吉田櫻川	穂麦ふく春の風よき馬路の野は薄かすみしぬ朝の鐘鳴る	
1516	銀鈴33-15	夏木立	吉田櫻川	月おぼろ旧都の君を恋ひまつる上臈人の面影も見ゆ	
1517	銀鈴33-15	夏木立	吉田櫻川	人恋し五月真昼の濃青雲(こあおぐも)行くへまもれば人の恋しき	
1518	銀鈴33-16	夏木立	藤本晩花	徂く春の杜鵑花(さつき)の雨は昨泣きしおもかげ人の涙にも似て	
1519	銀鈴33-16	夏木立	藤本晩花	人寝ねて静寂(しじま)にかへる夜の街を君がり行くとわれは急ぎぬ	
1520	銀鈴33-16	夏木立	藤本晩花	み手とりしその日ゆ知らぬ病得て君恋ふとだに言ひ得ざる我	
1521	銀鈴33-16	夏木立	森脇桃村	火ぞ消ゆる油もて来よかくさけび日に夜に君がうなじまきぬ	
1522	銀鈴33-16	夏木立	森脇桃村	雨の宵黄なる障子に四五人の影して語る父母の家	
1523	銀鈴34-18	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	けがされしわが玉座かな昨日まで血になまぐさき呻吟(によひ)をききぬ	
1524	銀鈴34-18	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	二十五と人も言ひしやさすらひの寂(さび)の心野(うらの)に君を見出でぬ	
1525	銀鈴34-18	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	朝びらき彩帆に薔薇の香は充ちぬ聖国(みくに)の糧を君にまいると	
1526	銀鈴34-18	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	現さは王女が朝の花装被衣(かつぎ)まいらす子と召されたる	
1527	銀鈴34-18	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	櫛の根に夏をしさけて真清水の魂の常井に今日も足らひぬ	原文「撫(ふな)」→「櫛」に修正
1528	銀鈴34-19	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	夕虹に掌(たなごこ)うちて躍る子とよみがへりにき二十五の夏	
1529	銀鈴34-19	わが玉座	大屋左一：大屋桂水	乳流れの美し御国の夏にして白き虹見る日を思ふかな	

1530	銀鈴34-23	赤き珠	月森神来	紫に菖蒲さく日はおなじ名の顔よき人の追憶(おもひで)に泣く	原文総ルビ
1531	銀鈴34-24	赤き珠	月森神来	汝が赤き珠をくたくと手力に山をも裂く子慕然(ましぐら)に來し	原文総ルビ
1532	銀鈴34-24	赤き珠	月森神来	み手枕きて涙の鼓に興じたる低き屋も見ゆ磯辺を來れば	原文総ルビ
1533	銀鈴34-24	赤き珠	月森神来	惜しからず召したまひなば銀も黄金もさては生命(いのち)の珠も	原文総ルビ
1534	銀鈴34-24	赤き珠	月森神来	常にわが眼路にこそ立て蓬髪(ほうまつ)の二十の少女おもやつれして	原文総ルビ
1535	銀鈴34-24	赤き珠	月森神来	瑠璃(るり)の空一ひら雲す君おもふ和みごころにうたがひの影	原文総ルビ
1536	銀鈴34-25	赤き珠	月森神来	紫染(なしぞめ)の粗き衣に白玉の肌をつつめる少女こひしき	原文総ルビ
1537	銀鈴34-25	赤き珠	月森神来	わが心喜をえず梅雨空のものうさに似て絶えず涙す	原文総ルビ
1538	銀鈴34-25	赤き珠	月森神来	二繭(ふたごもり)汝を讀す玉楼にわがよき君とあるすがたかな	原文総ルビ
1539	銀鈴34-25	赤き珠	月森神来	さつき雨さつきつつじの紅と空木の花の白きとにふる	原文総ルビ
1540	銀鈴34-27	銀鈴社詠草	松本野火	あなやいま日ぞくれなみず朝靄(あさぎり)の乳のいろしてこめたるなかに(七月十七日の朝もや深くこめたり即ち初めの四首なる)	
1541	銀鈴34-27	銀鈴社詠草	松本野火	靄(あさぎり)の海明けのこる灯を川ぞひの家にほの見る鶏(かけ)のなくとき	
1542	銀鈴34-27	銀鈴社詠草	松本野火	朝々や靄(あさぎり)吸ひ山の松かぜにそだてられたるみめよき乙女	
1543	銀鈴34-27	銀鈴社詠草	松本野火	吾のみくろし大あめつちはただしろき中に朝居てうぐひすをきく	
1544	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	松本野火	紅させるくちびるなれば万人のこころ溶かすまどはしいふや	
1545	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	松本野火	朝の月あふぎてなきぬ山の鳥露もつむねの枝にならびて	
1546	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	松本野火	白玉のつめたさしらずそのいろをその光をばめでたまひしか	
1547	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	松本野火	琴ひきて潮どき来しと青いろの袖ふり來たるうしほの乙女	
1548	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	松本野火	蛾にとはむ紅き灯と夕顔のみづみづしさのいづれをとるや	
1549	銀鈴34-28	銀鈴社詠草	永田玉椿	をさな子よ汝が白蓮の心にも赤き火の芽の一点を見む	
1550	銀鈴34-29	銀鈴社詠草	永田玉椿	真夏の日赤き煉瓦の立ちならぶ街に軒の高ごゑを聴く	
1551	銀鈴34-29	銀鈴社詠草	小川石櫻	ふる里の我にひとつの御墓よりまぼろし見ゆれ夕月のかげ	
1552	銀鈴34-29	銀鈴社詠草	小川石櫻	天地を二つに裂かむ心もて別れ給ふや我を置き往く(桃村兄に)	
1553	銀鈴34-29	銀鈴社詠草	森脇桃村	ああ二十日潜然として天地もなみだにくれぬいたましきかな	
1554	銀鈴34-29	銀鈴社詠草	森脇桃村	み言葉は二なく華やぎいませどもおほみ心に雲は去來す	
1555	銀鈴34-30	銀鈴社詠草	森脇桃村	手に触れずされど目近に苺(いちじく)おきものたまはぬをかき人よ	
1556	銀鈴34-30	銀鈴社詠草	森脇桃村	蚊遣(むしや)たき青葉の中(あづま)の四阿(あづま)に君をまつ夜の夕顔の花	
1557	銀鈴34-30	銀鈴社詠草	菅原紅雨：菅原正男	何なればさばかりならぬ片時をいと大いなる罪とのたまふ	
1558	銀鈴34-30	銀鈴社詠草	河野翠漱	あはれまた來世おもはぬわかうどの群に向ひぬ母よゆるさせ	
1559	銀鈴35-43	銀鈴社詠草	山本碧帆	春の月君わがために琴をとれ後の世ながく思ひ出とせむ	
1560	銀鈴35-43	銀鈴社詠草	藤本晩花	わがうれひ火中してまし三日つづけ夢みし吾妹かたはらに在り	
1561	銀鈴35-43	銀鈴社詠草	河野素陽	秋風は蕭條として大野行き悔ゆれどされど我が森に入る	
1562	銀鈴35-43	銀鈴社詠草	河野素陽	ああ千たびわが胸をどる数人の群にし君が一語聴くとき	
1563	銀鈴35-44	銀鈴社詠草	河野素陽	友恋し浪速の西のみづうみに涙ながせし日思ひ出に(友は大阪高商にありて文才あり)	原文「大阪高商にりて」→「大阪高商にありて」に修正

1564	銀鈴35-44	銀鈴社詠草	森脇桃村	青き瓶赤き瓶並めからからと鬼のやうにも笑ひ給ひぬ	
1565	銀鈴35-44	銀鈴社詠草	森脇桃村	三五人裸したるが船の上に豆など喰みぬ八月の海	
1566	銀鈴35-44	銀鈴社詠草	吉田櫻川	焦熱の心の苦役葉月野は声をひそめぬ早魃の国	
1567	銀鈴35-44	銀鈴社詠草	吉田櫻川	花かざす浜の少女の数人は素足に琴を弾きつつぞ来し(琴の浜にて)	
1568	銀鈴35-45	銀鈴社詠草	吉田櫻川	わが胸に幾とせ秘めし恋なれば蓮のごとく淨らかに咲け	
1569	銀鈴35-45	銀鈴社詠草	吉田櫻川	何ものぞ黒き翼をうちひろげ君が周囲を固めむとする	
1570	銀鈴35-45	銀鈴社詠草	吉田櫻川	詩の宮のおはみ戸近く守り給へ左近右近のさくら橘(素陽兄に)	
1571	銀鈴35-45	銀鈴社詠草	有井漱花	ああ聖の光にそむきいつかたへ走るとすらむ我ひそに泣く	
1572	銀鈴35-45	銀鈴社詠草	菅原紅雨：菅原正男	その夕君に似る子と似ざる子と二人を抱き泣きにけるかな	
1573	銀鈴35-46	銀鈴社詠草	菅原紅雨：菅原正男	君といふ大なる悩み胸に棲み巣くはむとして間なくはばたく	
1574	銀鈴35-46	銀鈴社詠草	菅原紅雨：菅原正男	夜毎夜毎寒き涙に頬(ほ)の匂ふ君を夢みぬ別れし日より	
1575	銀鈴35-46	銀鈴社詠草	菅原紅雨：菅原正男	東の曇りかあらず小ひさなる境にうつるわが胸の雲	
1576	銀鈴35-46	銀鈴社詠草	河野翠漱	かにかくに物よく語りおはすかな少女が髪の色も知らぬげに	
1577	銀鈴35-46	銀鈴社詠草	河野翠漱	病ありみ薬たまへ時たばはやはや死なむいのち危ふし	
1578	銀鈴36終刊	玉	川上賢三	むかしなり石ふる夜なり崑崙の山に明かしぬ楊家の人と	
1579	銀鈴36終刊	玉	川上賢三	春の日の珊瑚の海に玉拾ふおもひをなして相見る夕	
1580	銀鈴36終刊	玉	川上賢三	赤がへるあまた入れたる古桶はまるびまるびぬ野分の朝	
1581	銀鈴36終刊	玉	川上賢三	このひまに百千の人の浮き沈みあるも忘れて君が恋聴く	
1582	銀鈴36終刊	玉	川上賢三	いとやすく人を抱きていとやすく解く手に赤き煉瓦つむかな	
1583	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	まづ我れは汝等が族に眼あるものなしと熱罵しやや心なぐ	原文総ルビ
1584	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	鶯の歌と牡獅子の雄叫と何れを君は讃へ給ふや(人に)	原文総ルビ
1585	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	吹く風の吹くがまにまに安らかに靡く尾花に似たる君かな	原文総ルビ
1586	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	ああその日君がみ手とり春の野の鳥のごとくに歌ひけるかな	原文総ルビ
1587	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	そのかみのわが恋人と語る子の側(かたへ)をゆけど心躍らず	原文総ルビ
1588	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	われ捨てぬ曠野の中にけしの実を一粒おきし如き恋ゆえ	原文総ルビ
1589	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	争はじされど証は確かなりかくて断たれし赤紐を投ぐ	原文総ルビ
1590	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	色硝子花とかをれる夜の街のとある館の前を去り得ず	原文総ルビ
1591	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	十の鐘十の音色すそのごとく百の女は百の香りす	原文総ルビ
1592	銀鈴36終刊	瓜の実	月森神来	瓜の実を榿の実とせず瓜蔓に生らしむ神をわれは恨まず	原文総ルビ
1593	銀鈴36終刊	船	河野素陽	真帆あげて港を出づる船に似し恋かもややに君遠ざかる	原文総ルビ
1594	銀鈴36終刊	船	河野素陽	朝風はしろがね造り美しくしき霜の木立をなびかせて吹く	原文総ルビ
1595	銀鈴36終刊	船	河野素陽	ただ二人住まば毒よし茨よし更らに悪魔の来るなほよし	原文総ルビ
1596	銀鈴36終刊	船	河野素陽	たとふれば恋失ひし若人のよろぼふさまに冬は来りぬ	原文総ルビ
1597	銀鈴36終刊	花紅葉	山本碧帆	母恋ひて泣きし日の君わが側にわが歌ききてやすらかに寝る	
1598	銀鈴36終刊	花紅葉	山本碧帆	七草の七いろながらうらがれぬ数のおもひ出つげもやりなむ	
1599	銀鈴36終刊	花紅葉	吉田櫻川	ああ今し黄金樞の音こそすれ曙ゆゑに我がわたつみは	

1600	銀鈴36終刊	花紅葉	吉田櫻川	茅渚の浦海士の恋草かきあつめいく代焚きけむ水がくれなるす	
1601	銀鈴36終刊	花紅葉	吉田櫻川	冬きたる落ち葉ひそ泣く山峡におめきのごゑす吹くか木枯	
1602	銀鈴36終刊	花紅葉	吉田櫻川	北海の冰山を見てわが乙女いささかながらおそれ給はむ	
1603	銀鈴36終刊	花紅葉	吉田櫻川	青き月わかき女のむくろをかのせし枢の夜の街をゆく	
1604	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	冷かなる眼して君云ふ「何ゆゑに二人を恋すわれを悪むや」	
1605	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	「何欲りす飢ゑたる眼もて群集の中に覓むは」「君に似たるを」	
1606	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	十五人いと賢しらに占へる君が周囲の人な信じそ	
1607	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	いま我は落葉の中ゆ一ひら紅き花とり愛でぬる思ひ	
1608	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	秋の夕雲はおこりぬ卒然と安けき胸にいくたびとなく	
1609	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	白き蝶君に寄り来むとばかりにあざむきたまふ人とおぼえず	
1610	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	何宣らすいと厳かに科人を嘖(さいな)むごとくわれに説く人	
1611	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	君恋し一念の火はかの空に星とこほりて寒くかかれる	
1612	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	白き玉七つ捧げてわれに泣く少女を抱き朝寝してまし	
1613	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	灰いろの雲の上にも思はずや君が瞳に似る星あるを	
1614	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	なに物の強きちからぞいと易く心の石をかく動かすは	
1615	銀鈴36終刊	花紅葉	菅原紅雨：菅原正男	うき人と君を怨じぬ慎まぬ少女の性とゆるさせたまへ	
1616	銀鈴36終刊	涙	菅原紅雨：菅原正男	つねに我が心はさびしうつくしき悔に泣けとは人も強ひぬに	
1617	銀鈴36終刊	涙	菅原紅雨：菅原正男	かくてわれ再び人を恋せじといたやすげに語るひと見ぬ	
1618	銀鈴36終刊	涙	菅原紅雨：菅原正男	くろがねの大き柵結び相見るを防ぐと人の罵るをきく	
1619	銀鈴36終刊	涙	菅原紅雨：菅原正男	いまばかりゆるし給へと君言ひぬ死をも辞まぬ誓言はあれ	
1620	銀鈴36終刊	涙	菅原紅雨：菅原正男	吹雪して寝ねられぬ夜はおもふかなかる疾風に君や乗り来む	
1621	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	女いふ大和に入らむ男いふ紀伊にかへらむ趣の可(よ)し	
1622	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	丘の家はるかに見えつ車曳きわれらは急ぐ町の繁華に	
1623	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	ひと時もわすれ得がたき恋ゆえに否々胸に残れるはなし	
1624	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	よろよろと足もと知らず往くひと還るも空をのみ見てぞ過ぐ	
1625	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	紙折るになれし人ゆゑ巧妙にあらゆるものを小指にて為る	
1626	銀鈴36終刊	六首	河野翠澁	赤き旗屠手が小家の上に立つ黄色にかざる落日の前	